

MediaNet

No.32 | 2025

慶應義塾大学メディアセンター
Keio University Media Center

特集

早慶ライブラリーブックシェア・
早慶ライブラリーパスポート

特集にあたって

早慶ライブラリーブックシェア
ー相互資料取寄せの更なる強化ー

早慶ライブラリーパスポート
ー協定入館の発展ー

早慶プロジェクト担当者座談会



表紙の写真：慶應義塾図書館旧館第1書庫（三田メディアセンター）

慶應義塾図書館旧館（以下「旧館」とする）の写真といえば、壮麗な外観やステンドグラスを被写体にしたものが多く、書庫の写真を目にする機会は少ないかも知れない。古い西洋建築の趣をたたえたこの写真は、旧館2階第1書庫で撮影したものである。第1書庫は廊下をはさんで南北2つの部屋に分かれており、これは南側から北側を見た時の風景である。

旧館は1912（明治45）年に完成してから今日に至るまで増築や修繕、地震対策工事を重ねている。三つの書庫のうち竣工当時から存在するのはこの第1書庫のみで、第2書庫と第3書庫は昭和期に増築されたものである。なお、1969（昭和44）年に国の重要文化財に指定されたのは建物全体ではなく、竣工当時から残っている旧館本体および第1書庫の外装、ならびに旧館本体内部の1階ホールと階段室である。

（三田メディアセンター 川崎直子）

MediaNet

No.32 2025

慶應義塾大学メディアセンター

Keio University Media Center

MediaNet

No.32 / 2025

Contents

所長挨拶

メディアセンター，研究と教育の中核	大出 敦	4
学びの場に刻まれた記憶とこれから	内山 孝憲	5

特集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

特集にあたって	浅尾千夏子	6
早慶ライブラリーブックシェア		
-相互資料取寄せの更なる強化-	友野 詩穂，森岡 祐介	7
早慶ライブラリーパスポート		
-協定入館の発展-	太田 梨緒	11
早慶プロジェクト担当者座談会	鈴木 努，中村 洵子	14
	可児 千裕，中里 潔人	
	岡野 純子，友野 詩穂	
	太田 梨緒，森岡 祐介	
	浅尾千夏子，稲垣 侑華	
	遠藤 泉	

オーダーメイド型講習会・まなびカフェ 845		
-一人ひとりの「学びたい」に寄り添って-	遠藤 泉	23
三田メディアセンター所蔵		
レファレンス資料利用度調査（2023～2024）の報告	佐藤友里恵	28
Alma/PrimoVEの機能拡張について	稲木 竜	32

日吉図書館開館40年

日吉図書館開館40年を迎えて	瀬戸島弘美	36
座談会：日吉図書館の「今まで」と「これから」	横山 千晶，岩波 敦子	38
	長田 進，吉田 大洋	
	黒木 唯花，関口 素子	
	朝比奈華子，瀬戸島弘美	

貴重書紹介

『論語疏』巻6 文化財指定の顛末	住吉 朋彦	44
------------------	-------	----

海外レポート

英国図書館研修報告	飛 明奈	48
国立台湾図書館および台湾大学図書館における 目録業務について	原 直実	54

ティールーム

シリアの移動図書館	和気 尚美	22
-----------	-------	----

スタッフルーム

図書館渡り鳥の思い出話	進士 華子	47
-------------	-------	----

コラム

日本医学図書館協会（JMLA）協会賞受賞報告	佐山 のの	27
10年目を迎えた日吉図書館ライブラリーコンサート	吉沢亜季子	43

資料

メディアセンターの活動の記録＜2024年度＞	56
メディアセンターの主なイベントポスター＜2024年度＞	63
メディアセンター展示一覧＜2024年度＞	66
メディアセンター所蔵資料の展覧会貸出・掲載・放映＜2024年度＞	68
メディアセンターに関する書誌＜2024年度＞	70
スタッフによる論文発表・研究発表＜2024年度＞	71
年次統計資料＜2024年度＞	72

編集後記	80
------	----

所長挨拶

メディアセンター，研究と教育の中核

おおで あつし
大出 敦

(日吉メディアセンター所長)



日吉メディアセンターの掲示板に、「日吉図書館は開館40年を迎えました」というポスターが貼り出されている。40年前の1985年に、今の日吉図書館は開館した。個人的なことを語るのを許されるのなら、日吉図書館が開館したこの年に高校3年生だった私は文学部を受験した。受験票の確認の順番待ちのあいだ、水色の真新しい図書館を横目に眺めて、この建物は何だろうと思っていた。

大学に入学して、初めて日吉図書館に入った時の感動は今でも忘れられない。高校の図書室と公立図書館しか知らなかった私は、その蔵書数にまず圧倒され、和書と洋書が隣り合っている配架方式に大学生になったことを実感した。新築の建材の匂いもまだ漂っていた館内の美しさにも目を奪われた。今は4階でしか目にできないが、廊下の大胆な市松模様やグループ学習室の壁にかかっていたオランダの古地図や天球儀のレプリカなど……。あの時、日吉図書館に興奮した大学生が、メディアセンターの所長になるとは、その当時、思ってもいなかった。

図書館の役割や在り方は今、大きく変わろうとしている。私が興奮して、日吉図書館に通った頃、図書館は、何よりも紙の本を手にとって読む場所であった。実際、学生が行っていたことは、図書館のインデックスボックスで、図書を検索し、それを書架から取り出してきて読み、場合によったら、手書きでノートに抜き書きをしたり、原稿用紙にレポートを書いたりすることだった。しかし、世紀の変わり目頃からインターネットが急速に普及すると、図書館は三次元の現実空間に存在するだけのものではなくなってきた。KOSMOSをはじめとする検索エンジンで図書や文献を検索したり、各種のデータベースにアクセスして、必要な資料や文献をダウンロードしたりするといったことが日常的になり、図書館は電子空間にも存在するようになった。要するに、図書館は三次元の物理空間と電子の仮想空間の境界線

上に位置し、その二つの世界を媒介するメディアとしての役割を担うようになったといえる。私が大学生の頃からすれば、隔世の感があるが、図書館はこれからも常に変化し続けていくはずだ。しかし、変わらないものもある。それは図書館は常に、そしてこれからも「研究と教育の中核である」ということだ。この言葉は、私が教養研究センターの副所長だった頃、日吉メディアセンター事務長だった市古みどりさんから聞いたものだ。私もその通りだと思う。では、中核であるとはどういうことか。

先ほど、図書館は、現実空間と仮想空間とを媒介し、つなぐ媒体＝メディアだと述べた。しかし、図書館が媒介するのはそれだけでない。文献や資料と研究者・学生とをつなぐメディアでもある。そして、もう一つ、人を媒介する機能がある。日吉キャンパスの特徴の一つとして、昨日まで高校生だった新入生を大学生にしてそれぞれの専門課程のキャンパスに送り出すという役割がある。そのために教員、職員、学生による協働という日吉キャンパス独自の精神が培われてきた。日吉メディアセンターも例外ではなく、従来の図書館機能に加えて、学習相談や図書館フレンズなど学生が教職員とともに参加する事業がいくつも展開されている。図書館は情報を受動する場であるだけでなく、教員、職員、学生の三者が協働して何かを生み出す場ともなっている。それまで別々の領域に属していた三者が図書館を媒介してつながっていくのだ。

このような領域をつなげる媒体＝メディアがその名の通り、メディアセンターだ。メディアセンターは、あらゆる関係の糸がそこで結ばれている結節点だという意味で、「中核」なのである。図書館が現実空間と仮想世界、精神と物質、そして人間同士を結ぶ中心に存在する。この中心の結節点を通して、新しい学びやそれまでなかったものが創造される、それが中核としてのメディアセンターの役割であろう。

所長挨拶

学びの場に刻まれた記憶とこれから

うちやま たかのり
内山 孝憲

(理工学メディアセンター所長)



前任者の定年退職に伴い、2025年4月から理工学メディアセンター所長を務めることとなった。理工学メディアセンターには、学生時代（当時は松下記念図書館）からお世話になっている。

学生時代の最も記憶に残っている出来事は、カウンター内で端末を操作していただいたことである。文献検索をお願いしたのだと思う。当時は、固定電話機の受話器を音響カブラーにはめ、電話回線を使用する通信であった。通信速度は300bpsか1,200bpsだったと記憶している。300bpsでは、文字が1文字ずつ表示されるのを、目で追うことができた。ポジティブな記憶として残っていることから、必要な情報に辿り着けたのだらうと思うが、それが何だったか思い出せないのは、操作して下さった職員さんに申し訳なく思う。

大学院修了から数年後、教員として理工学メディアセンターにお世話になることになった。いや、実際には、教員として採用される前年の夏の終わりに、既に理工学メディアセンターでの思い出がある。採用面接の時刻に早めに矢上キャンパスに到着したため、理工学メディアセンターの前の藤棚の下で時間を過ごした。当時はまだ14棟はなく、理工学メディアセンターの前には大きな藤棚があり、その下にベンチがあった。ベンチに座って、緊張で食べ物は喉を通らず、出るものは出し尽くし、それまでの人生で最もストレスを感じた時間を過ごしたように思う。

教員になったばかりの頃は、文献取寄せを頻繁に利用した。文献を取寄せるには、4連だったと思う複写式の伝票の狭い欄に書誌情報を記入しなければならなかった。悪筆である私には至難の技である。幸いなことに、学科の会議室にタイプライターがあったので、これをありがたく使わせていただいた。本来、氏名などは和文で記入するところをローマ字で記入したが、その伝票で処理を進めて下さった職員さんには感謝である。

さて、現在では文献の検索や取寄せは、手元の端末でできる。必然的に、理工学メディアセンターが提供するサービスも変化しつつある。大学院生に授業のことなどを質問できるラーニングサポート、教員が研究内容を平易に紹介するサイエンスカフェ、学生が発表するプレゼンバトルなどの、図書に限らないイベントも開催している。サイエンスカフェは、番外編（研究ではない話題を扱う回、大河ドラマ「真田丸」が放送されていた頃の回やワインの回）の参加者が多く好評を博しているようである。何を隠そう私も、理工学メディアセンター所長就任前にはそれら2つの回にしか参加していない。

理工学メディアセンターの設備としては、声を出してグループ学習ができる場所やオンライン面接に利用できる場所など、学生のニーズに合わせて整備が進んでいる。雑誌の費用が毎年上昇して、それ以外に充当できる予算が限られる中で、職員さんがあれこれやりくりして様々なサービスを提供してくださることは、感謝しかない。感謝といえば、慶応工学会様からご寄付をいただいていることも忘れてはならない。話をサービスに戻す。理工学部独自のリポジトリであるΣStarの運用も様々なサービスの一つである。しかし、ΣStarは、設備・ハードウェア・ソフトウェアの老朽化と運用に必要な技術の問題から、残念ながら2027年度末で現在の形態でのサービスは終了することとなる。

理工学メディアセンター所長に就任した今、私が考えることは、次を担う学生さんに今の時代に相応しい形の充実したサービスを提供することであると考えている。

特集

早慶ライブラリーブックシェア・
早慶ライブラリーパスポート

特集にあたって

あさお ちかこ
浅尾千夏子

(三田メディアセンター課長)

2024年4月、早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターは、新たに「早慶ライブラリーブックシェア」(以下「ブックシェア」とする)および「早慶ライブラリーパスポート」(以下「パスポート」とする)の2つのサービスを開始した。

本特集では、これらのサービスの背景と経緯、新機能導入の課題、サービス開始後の状況等について、慶應側の担当者から報告するとともに、早慶の担当者で実施した座談会記事を収録している。

「ブックシェア」「パスポート」サービスは、1986年に締結された早稲田大学との図書館相互利用に関する協定、そして2019年9月より開始した早慶図書館システムの共同運用を基盤とするものである。この共同運用にあたり、図書館システムに求める重要な要件として「早稲田と慶應の図書館がまるで一つであるかのようにCirculationやResource Sharingができること」を掲げており、また共同運用後の早慶の連携をさらに進めていく構想として、第1段階を協定書・実施要綱内でのサービス拡大、第2段階を新たな図書館システムの機能を活用したサービス拡

大と設定し¹⁾実現に向けた準備を進めてきた(表1)。第1段階は、新型コロナウイルス感染症の影響で相互訪問が困難になったことを契機に、常勤教職員対象に非来館での利用登録・資料貸出として実現し、今回の「ブックシェア」により、第2段階で目指していたAlma Fulfillment Network機能(以下「相互受取・貸出機能」とする)を使った個人間の相互貸出が実現した。さらに、「ブックシェア」検討段階で副次的に生まれた「パスポート」によって、相互来館の利便性が向上する結果となった。

本稿執筆時点(2025年7月)において、「ブックシェア」の対象者は大学院生および専任教職員に限定されているが、今後さらなる対象拡大を見据え、引き続き早慶が連携・協力関係を維持しながら、持続可能な発展を目指していきたい。

注・引用文献

- 1) 岡野純子. CirculationからFulfillmentへー早慶図書館システム共同運用の先に見えるものー. MediaNet. 2020, No. 27. p 28-31.

表1 サービス開始までの道のり

2021年9月	Ex Libris社Almaの相互受取・貸出機能の紹介ワークショップに参加
11月	早慶相互利用における新サービス(後のブックシェア、パスポート)に関する懇談を開始
2022年2月	相互受取・貸出機能の検討開始
5月	Ex Libris社による相互受取・貸出機能設定のためのワークショップに参加
10月	早慶の閲覧チームでの月例会を開催。検証の進め方・検証シナリオについて協議(以後継続)
2023年6月	新サービスの運用に関わる閲覧・システム・ディスカバリーチームのリーダー会議を開催(以後継続)
9月	早慶の運用プラン(運用ルール詳細)が確定
10月	ライブラリーパスポートの試行サービス開始(三田メディアセンター)
12月	スタッフ向け説明会の実施およびスタッフマニュアルを整備
2024年2月	本番環境稼働前の最終検証実施
3月	本番環境にて相互受取・貸出機能の稼働開始。KOSMOS上に利用登録・取寄せボタンの表示開始
4月	ライブラリーブックシェア:「常勤教職員」「名誉教授」を対象にサービス開始 ライブラリーパスポート:「学部生」「大学院生」「専任教職員」を対象にサービス開始
11月	ライブラリーブックシェア:「大学院生」にサービス拡大 サービス名称を「早慶ライブラリーブックシェア」「早慶ライブラリーパスポート」とし、早慶でプレスリリース掲載
2025年3月	早慶相互利用実施要綱、および補足資料の改定手続き
4月	試行サービスから正式サービスへ移行

早慶ライブラリーブックシェア -相互資料取寄せの更なる強化-

とも の し ほ
友野 詩穂

(三田メディアセンター主任)

もりおか ゆうすけ
森岡 祐介

(メディアセンター本部)

1 はじめにーサービスの背景と概要

2019年9月、慶應義塾大学メディアセンター（以下「慶應」とする）は早稲田大学図書館（以下「早稲田」とする）と図書館システムAlma/PrimoVE¹⁾の共同運用を開始した。それまでは両校の蔵書を別々に検索する必要があったが、このシステム共同運用によって一元的に検索できるようになった。その際「自校の資料だけでなく相手校の資料も予約・取寄せや館外貸出ができる」機能の実装は見送られていたが、この時すでに、“このシステムを利用することによって実現された1,000万冊を超える所蔵を誇るバーチャル図書館が両大学の利用者によって活発に利用される”²⁾という、より進んだ将来像が描かれていた。

こうした背景から、両校の間で2022年頃に相互利用拡大に向けた検討が開始され、2023年度に運用実施案や機能の検証を進めた。それぞれでシステム設定を変更して検証する中で、新たな問題に直面する

こともあったが、両校のスタッフ間で情報共有や連携を密にして協力しつつ、試行錯誤しながら打開した。サービス内容を検討する上で目指したのは以下の点である。

◆Alma/PrimoVEの機能を使って、両校の資料へのアクセスを容易にすること

- KOSMOS/WINE³⁾ から互いの図書館の利用登録ができること
- KOSMOS/WINEから互いの図書館所蔵資料の取寄せ（所属館での受取り）ができること
- カウンターでお互いの図書館所蔵資料を貸出できること

最終的にこれらの点を実現したサービス「早慶ライブラリーブックシェア」（以下「本サービス」とする）を、2024年4月に両校の常勤教職員・名誉教授を対象として開始した。その後、2024年11月にサービス対象を両校の大学院生へ拡大した。表1に本サービスの概要を示す。

表1 早慶ライブラリーブックシェアの概要

	早稲田所属者	慶應所属者
来館貸出可能館	三田・日吉・理工学・湘南藤沢	中央・戸山・理工学・所沢・理工学生読書室
取寄せの対象資料	三田・日吉・理工学・湘南藤沢・薬学の各メディアセンターの一般図書	中央・高田・戸山・理工学・所沢・理工学生読書室の各図書館の貸出可能資料
取り寄せた相手館資料の受取可能館	早稲田：中央・高田・戸山・理工学・所沢 慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢	慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢・薬学 早稲田：中央・戸山・理工学・所沢
返却可能館	早稲田：中央・高田・戸山・理工学・所沢 慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢	慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢・薬学 早稲田：中央・戸山・理工学・所沢
貸出期間・更新最大期間	貸出期間：14日間 更新最大期間：90日間	貸出期間：14日間 更新最大期間：42日間
貸出冊数	5冊まで	
取寄せ冊数	5冊まで	

2 早慶ライブラリーブックシェアの取り組み

本サービスの取り組みを運用とシステムの2面から述べる。

(1) 運用面について

導入にあたり、運用プラン（サービス対象身分、貸出冊数制限等）やサービス開始のスケジュールを両校の担当者で検討した。対象身分は「まずは常勤教職員・名誉教授、次に大学院生と段階的に進めていくのか」「常勤教職員・名誉教授と大学院生を同時に開始するのか」が論点となった。後者の方がインパクトは大きいですが、スタッフの負荷や利用状況を注視しながら運用調整ができるという理由から、前者を採用することとし、対象身分のサービス開始時期を策定した。

a 取寄せによる貸出（Direct requesting機能）

国内の大学図書館コンソーシアムの事例を確認したところ、いずれも他大学図書館の蔵書を借りるための利用券作成や所蔵館への直接訪問が必要であり、資料の取寄せには別途申込みをしなくてはならない。一方、本サービスでは相手校の資料を自校の検索システムからリクエストし、自校の図書館へ取寄せて借りられるという、あたかも自校の資料であるかのように相手校の資料を取寄せて借りることができる。これは本サービス独自の強みである。

本サービスに先立ち、新型コロナウイルス感染症が流行した2021年3月～2024年3月には非来館による利用者登録と資料の取寄せ貸出の臨時サービスを実施していた。その際は、両校スタッフ間でのメール連絡による利用者登録や、NACSIS-ILLでスタッフの手を介して資料取寄せ処理を行っていた。この対応は従来の枠組みのなかでのサービス拡大であり、作業コストはかかっていたが、本サービス導入の下地となる取り組みであった。本サービス導入後は利用者登録・資料取寄せともに利用者自身がそれぞれKOSMOS/WINEから行えるようになり、大幅な事務処理の効率化が実現した。

また、日々両校間を行き来し、資料を定期的に巡回し配送する「早慶便」についても調整を行った。従来の図書館間貸借とは異なる専用の宛名札、ビニールバッグ、コンテナを用意して担当者が判別しやすいように配慮した。また、慶應内のコンテナの集配場所を従来のものと分けることで、物流の増加に対応するとともに、資料の発送・到着処理の作業効率も向上した。現在、早慶便は早稲田の中央図書

館と慶應の三田メディアセンター間で運行しているが、今後さらに物量が増えた場合には他キャンパスへの巡回も検討することになるかもしれない。

なお、KOSMOSの検索範囲のデフォルト設定も検討対象となっていた。現在は「所蔵資料と電子資料」の検索がデフォルトとなっているが、自校に所蔵しているタイトルしか相手校の所蔵は表示されない。利用者が「相手校のみ所蔵」の資料も発見できるよう両校の所蔵を検索する「所蔵資料と電子資料（早慶）」をデフォルト表示させることも検討されたが、両校の契約電子資料の表示調整が困難なことから、2025年8月時点では見送りとなっている。

b 来館による貸出（Walk-in loans機能）

これまでの相互利用では、両校の常勤教職員と名誉教授は相手校に出向いて利用登録を行うことで貸出券が発行され相手校の資料を借りることができた。そのため、「取寄せによる貸出（Direct requesting機能）」ではなく、まずは従来のサービスに近い「来館による貸出（Walk-in loans機能）」から検討を始めた。システム設定を調整し無事に両校の利用者データを参照できた瞬間は、本サービス実現に一步近づいた場面として強く印象に残っている。

なお、WINEで利用登録せずに慶應に来館し、その場で貸出を希望する早稲田所属者もいる。そのため、WINEにアクセスして利用登録ボタンが表示されるQRコードを早稲田所属者用のICカードリーダーに貼付し、早稲田所属者のスマートフォンで読み取れば登録できるようにした。「取寄せによる貸出」の実現によって利便性は飛躍的に向上したが、「来館による貸出」にも対応したことで、両校の所蔵資料をブラウジングした後、そのまま欲しい資料を借り出せる機会も確保されている。

本サービスの開始にあたり、慶應内では各メディアセンターの閲覧業務担当の代表者を募り、半日間の講習会を行った。参加できなかったスタッフには録画の配信も行った。検証に携わったスタッフは、通常の業務と並行して前述の講習会や業務マニュアルの改訂、委託スタッフへの説明等の準備を進めたため負担も大きかった。しかし、普段はなかなか知ることのできない他大学の閲覧業務について、忌憚なく意見を交換できるまたとない経験になった。

(2) システム面について

早慶の担当者とEx Libris社のAlma製品サポート

の三者で連携し、2022年2月に両校のテスト環境を連結させて検証をスタートさせた。

a 利用者データ連携

まずは利用者データの連携について検証を行った。相手校に共有されるデータ項目は、サービスを提供する上で必要最低限の項目になるよう、両校の担当者が協議して設定した。また、一部データ項目は両校で利用方法が異なるものもあり、相手校の運用の理解も必要であった。

b 貸出ルール設定と動作検証

取寄せ・貸出の動作検証のため、まずはテスト環境に本サービス用の貸出ルールを別途作成し、両校で共通化したルールを設定することから始めた。取寄せや罰則など両校の間には様々な違いがあって時間を要したが「貸出期間」「罰則」「冊数制限」「受取館」など可能な範囲で共通化したルールを作成し、2022年8月頃から連携した動作検証を開始した。

当初、共同運用開始時から利用していたプロジェクト管理ツール上でやり取りをしながら、必要に応じて相手校に操作を依頼する流れで検証を行った。しかし、両校でそれぞれのAlma/PrimoVEでの操作が必要な場合が多く、上記の方法は効率的とは言えなかった。

そこで、両校の担当者でまとまった時間を取って合同で作業する検証会を開催することにした。それまで閲覧・貸出業務を担当するFulfillmentチームが中心となって検証を行っていたが、この検証会ではディスカバリーサービスを担当するDiscoveryチーム、図書館システム全体の運用を担当するシステムチームを加えた3チームのメンバーで新たに検証チームを編成し、より幅広い目線で検証・評価を行えるようにした。検証会では会議室に複数のPC・モニタを準備して両校のAlma/PrimoVEを同時に確認できるようにすることで、一連の流れを把握しやすいうようにした。

事前準備として、実施する検証項目を挙げた上で、各検証で使用するテストデータの準備を行った。このテストデータの準備は、利用者データの有効期限や貸出冊数、返却日など、想定しなければならない条件が多く、想像以上に労力を要した。しかし、これにより詳細な検証を行うことができシステムの理解も進んだ。

検証会は2023年7～8月の間に4回行われ、運用

に必要な機能は問題なく動作することを確認し、各チームリーダーへの報告が行われた。さらに、本サービス開始直前の2024年2月と、大学院生へのサービス拡大直前の2024年10月に、検証チームでリリース前の最終検証が行われた。今後サービス対象の拡大等が行われる場合は、同様の検証・確認が行われるだろう。

c 教職員ユーザグループの分割

本サービスの対象者は常勤教職員・名誉教授・大学院生に限られている。サービス開始以前、慶應の利用者マスタファイル上では常勤教職員・非常勤教職員を区別なく「教職員」グループとして扱っていたが、このタイミングで、本サービスの対象である「教職員W」と対象外である「教職員」に分割することとなった。

運用中のユーザグループの分割はシステム運用開始から実績がなかったため、分割方法を慎重に検討した。その結果、教職員用の貸出ルールが「教職員W」「教職員」両方に適用されるよう調整し、その後、利用者データ登録で利用しているツールの改修や既存の利用者データの分割作業を行うこととした。この作業は本サービス開始の約3か月前に行われ、特に大きな問題なく終えることができた。

d 利用者向けメール等の調整

利用者向けメール（資料到着、返却期限日のお知らせ等）のフォーマットを両校で統一することも検討した。しかし、前述のとおり利用方法の異なるデータ項目が存在するため、作業に多くの工数がかかることが想定され、自校の貸出サービスにも影響を与えることから統一は見送られた。

業務で利用する帳票やAlmaの機能を補うために開発した独自システムも、あまり工数をかけず必要最低限の改修のみを行うこととした。それまでの帳票や独自システムから大きく変更がないという意味では、本サービスの開始に伴うスタッフへの負担を最低限にすることができたと考えられる。

e 早稲田用ICカードリーダーの導入

来館による貸出に対応するためのICカードリーダーの導入が必要になった。実際に利用しているICカードリーダーと検証用ICカード（教職員証・学生証）を早稲田から借り受け、スムーズに検証を進めることができた。特に問題なく利用できたため、現在では早稲田所属者の入館を認めている慶應の各メディ

特 集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

アセンターに設置している。

f 利用登録ボタンに関する Ex Libris 社との交渉

本サービスを利用するには事前に相手校への利用登録が必要となる。慶應所属者は KOSMOS から、早稲田所属者は WINE から利用登録ボタンを押下することで登録が可能である。相手館と利用者データを連携するためには、個人情報等の取り扱いについて利用者から同意を得ることは不可欠であった。しかし、検討段階では、ボタン押下後に同意を求める画面を表示させることができなかった。

そこで、Ex Libris 社製品のユーザ・カンファレンスに早慶ともに現地で参加し、上記の問題点も含めて製品の機能改善を求めることにした。ミーティングでは Ex Libris 社の幹部と直接交渉のうえ、上記の問題点について理解を得て、サービス開始までに改善された。

(3) 貸出統計の分析

本サービスの貸出統計は月次で集計し、両校で共有している。この統計結果を分析した。

まず、早稲田所属者への貸出の多い資料を所蔵するメディアセンターを調査した。慶應には各キャンパスにメディアセンターが存在し、そのうち 5 つのメディアセンターで早稲田所属者への貸出を行っているが、約 6 割が三田メディアセンターで、約 2 割が日吉メディアセンター、残り 2 割が理工学、湘南藤沢、薬学の各メディアセンターという結果となった。これは早稲田所属者が借りることのできる資料の所蔵割合とほぼ一致しており、所蔵と利用傾向の整合性が確認された。

次に、本サービスによって貸出された資料が自校に所蔵されているかを確認した。その結果、早慶ともに 4 割以上は自校に所蔵がない資料の貸出であることが分かった。今後も継続的にこの数値を追っていくことで、分担収集の観点からも本サービスの有用性を評価していきたい。

3 おわりに

本サービスの短期的な展開としては、残されている課題の一つである「KOSMOS 上の利用登録ボタン表示の改善」が見込まれている。現在サービス対象外の身分にも利用登録ボタンが表示されているため、利用者にとってサービスの利用可否が分かりづらい状況となっているが、今後は対象身分に対して

のみボタンが表示されるよう PrimoVE の改善が進められている。また中長期的な展開として、本サービスの対象者が拡大すれば、慶應のメディアセンター間だけでなく早稲田とも分担収集や共同保存に関する協力の検討も視野に入るだろう。国内大学図書館の事例では山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムが「逐次刊行物の分担収集・保存協定」を調印している⁴⁾。元来、図書館界には相互協力の理念が根付いており、早慶でも 1986 年 4 月より「早稲田大学および慶應義塾の図書館相互利用に関する協定書」を締結しサービスを提供してきたが、本サービスの開始によって更なる連携が具体的に前進したといえる。今後も早稲田との協力を継続的に進化させていきたい。

注・参考文献

- 1) Alma は Ex Libris 社のクラウド型図書館システム、PrimoVE は同社のディスカバリーサービス
- 2) 深澤良彰. 特集に寄せて 早慶図書館システム共同運用の実現を振り返って. MediaNet. 2020, no. 27, p. 5.
- 3) KOSMOS は慶應, WINE は早稲田の蔵書検索システムの名称
- 4) 牛崎進. 講演 山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムに見る図書館連携. 私立大学図書館協会会報 = Bulletin of Japan Association of Private University Libraries. 2008, no. 129, p. 53-55.

早慶ライブラリーパスポート

－協定入館の発展－

おおた りお
太田 梨緒

(薬学メディアセンター)

1 はじめに

「早慶ライブラリーパスポート」(以下「パスポート」とする)は、早稲田大学(以下「早稲田」とする)と慶應義塾大学(以下「慶應」とする)の図書館が2024年4月¹⁾から共同で開始したサービスである。対象は、通学課程の学部生・大学院生、常勤教職員および名誉教授で、所属大学の学生証あるいは教職員証等を持参し、相手校図書館の入館ゲートにかざすと「まるで自校の図書館に入るかのように相手校の図書館へも入ること」ができる²⁾。早稲田は、中央図書館・戸山図書館・理工学図書館・理工学生読書室・所沢図書館、慶應は三田・日吉・信濃町・理工学・湘南藤沢の各メディアセンターに入館可能である。本サービスについて構想し始めたのは2022年9月頃で、早稲田の図書館利用者支援課と慶應の三田メディアセンター閲覧担当³⁾、両校の図書館システム部門で検討を重ねた。

2 これまでのサービス

遡ること約40年前、1986年に早慶の図書館相互利用に関する協定が結ばれ、互いの構成員に対するサービスが始まった⁴⁾。利用を希望する常勤教職員は、相手校に図書館カードを発行してもらうことで訪問時に紹介状が不要となり、資料の貸出も可能となった。2001年からは通学課程の学生にもサービスを広げ、自校の学生証を提示すれば入館、資料閲覧ができるようになった⁵⁾。ただし、入館には都度手続きしたうえで当日限定のゲート通過用の入退館カードを借りる必要があり、シームレスな利用とはいかなかった。慶應の図書館に初めてやってきた早稲田の学生が、入館ゲートに学生証をかざしてみては、エラー反応に戸惑った様子で手続きの案内を受けるという姿を何度も目にした。教員や友人から「早慶の学生証でお互いの図書館に入れるよ」と聞いて、自校の図書館と変わらぬ手軽さで入館できると思って来たのだろう。

3 実現までの道のり

本サービスでは、まさに学生のイメージするスムーズな相互入館を実現することができた。しかし、実のところ初めからこのようなサービスを目指してプロジェクトが始まったわけではない。もう一方の資料の相互利用を容易にする新サービス「早慶ライブラリーブックシェア」(以下「ブックシェア」とする)の検討を主として行う中で出てきた「もし資料の貸出が自校の教職員証等を使ってできるようになるのであれば、入館も同様にできたら理想的ではないか」というアイディアが発端である。新型コロナウイルス感染症拡大の状況が落ち着き始め、停止していた従来の協定入館を再開して少し経った頃であった。

当初は、相手校の利用希望者に個別発行する従来の図書館カードを維持するか、あるいは入館専用のカードを新たに発行するか、が有力候補として考えられていた。ブックシェア対象者は貸出のみ自校の教職員証等で可能になる一方、入館には別のカードを持参してもらうことになってしまうが、これまでの運用をあまり変えずに済むという点で現実的な選択肢であった。対して、理想としては、それぞれが相手校の所属者に発行していた従来の図書館カードの運用を中止し、自校の学生証・教職員証1枚で相互に入館を認める方法だが、これには様々なハードルや懸念があった。特に、お互いのゲートで相手校が発行したカードを読み取って入館可否を判定することは、技術的に非常に難しい、あるいは不可能ではないかと思われた。プログラムを変更するならば両校で業者への作業委託費用も発生する。複雑な仕様・設定の念入りな確認も必要だ。

しかし、このような理想を現実にするチャンスはもう訪れないのではないかと思うと欲が出てきた。諦めきれずに早稲田大学図書館のSNSを眺めていたところ、入館ゲートの写真を発見した。慶應のものとそっくりではないか。改めて確認したとこ



図1 入館ゲート（三田メディアセンター）

ろ、早慶ともに2社からゲートを導入しており、なんと、そのどちらも同じメーカーであることが分かった（図1）。細かい仕様や設定の違いはあるが、一縷の望みにかけて、検討用資料に理想案をねじこむことにした（図2）。

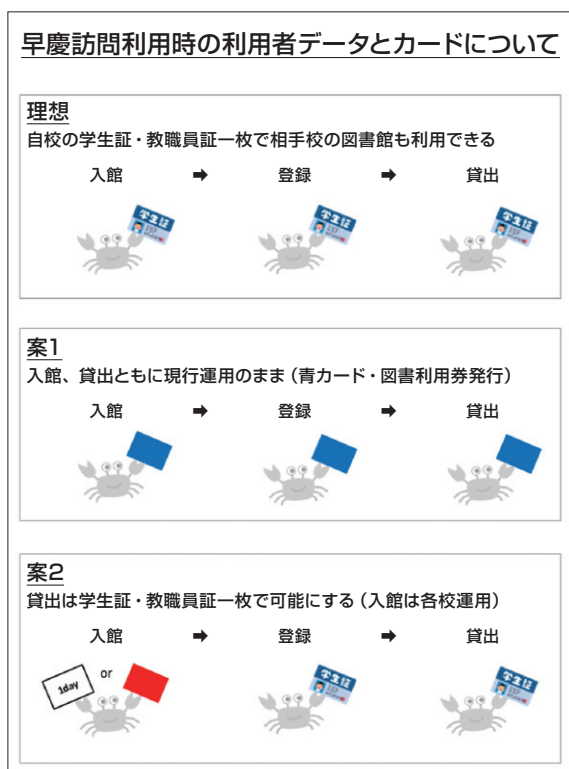


図2 検討用資料の一部（通称「カニの文書」）

いざ動き始めると、両校の細かい仕様や設定の違いに非常に苦しめられることになった。しかし、系列でもない2つの大学の、全く仕様の異なるICカードを読み取り合うという前例のないプログラム改修を引き受けてくださったゲートメーカー関係者のお

かげで実現が相成った。早慶と各ゲートメーカーによる打合せを何度か設け、細かい設定の相談はメールでやり取りを重ねていった。両校ともゲートに独自のID変換プログラムを搭載していた事情もあり、改修は決して簡単なものではなかった。素人では理解が及ばない部分も多く、慶應側はメディアセンター本部システム担当に仕切ってもらいながら、協定入館サービスを行う各メディアセンターのゲート管理担当者はもちろんのこと、カードの仕様確認では発行元の学内担当部署にもご協力いただいた。

4 広報

2つの新サービスを利用者に広く周知し、たくさん使ってもらうため、サービス名称（愛称）をつけることにした。関係者にアイデアを募ったり生成AIに提案させたりして、以下の候補が集まった。当初候補に挙がったのは、早慶ライブラリーコネク、ユナイト、ユナイテッド、リンク、ブリッジ、コンソーシアム等で2つのサービスをまとめた名称であった。しかし、それぞれサービス対象者が異なるため、2つを別にネーミングした早稲田考案のパスポート、ブックシェアがしっくりきた。

学内向け広報^{6) 7)}はそれぞれ図書館のWebニュースに掲載した。プレスリリースは両校の広報担当部署に相談しながら共通の文面を作成した。その内容はカレントアウェアネス⁸⁾や日本経済新聞⁹⁾にも取り上げられ、SNSでも学内外から反響があった。

5 利用実態

サービスを開始した2024年度の入館者数を見てみると、慶應の図書館に入った早稲田所属者はのべ2,394人¹⁰⁾であるのに対し、早稲田の図書館に入った慶應所属者は、のべ8,581人に上った。多くの慶應所属者がこのサービスを利用しているのは、早稲田では日曜日でも開館していることが理由として考えられる。慶應では、日曜日は信濃町メディアセンターを除いて原則休館しており、期末試験期など一部の期間に限って開館している。早稲田の担当者からは、実際に土日にも慶應所属者が多く入館していると聞いている。

入館者の身分は、やはり両校とも学部生・大学院生が多数を占め、特に期末試験期である7月と1月の利用が突出している。次いで6月、11月の利用も

多い。2月は慶應の側で入試や蔵書点検による休館日が多いこともあり、慶應所属者が早稲田に居場所を求めたようだ。教員は傾向が異なり、早稲田教員の慶應への入館は、授業がない夏・春休み期間に増えている。2024年11月は、ブックシェアの対象身分を大学院生に広げ、プレスリリースを出した影響もあってか、早稲田の大学院生の利用が最も多い月となった。

早稲田では、慶應所属者の入館先は中央図書館が最も多く、年度内入館者数はのべ7,567名と総数の9割近くを占めている。一方、慶應では、早稲田所属者の3割が三田メディアセンターへ、6割強が日吉メディアセンターへ入館していて、やや分散傾向が見られる。日吉メディアセンターへの入館が多いのは、駅からほど近い立地と、早稲田の図書館が無い神奈川方面に位置していることが理由であろう。対して、早稲田の所沢図書館は慶應の図書館が無い埼玉方面に位置し、慶應教員の利用が見られ、それぞれのエリアを互いにカバーし合う形になっている。

利用傾向は2025年度に入っても尻すぼみになることはなく、前年に比べ早慶それぞれ入館者数が増加している。今後もさらに利用を促進し、ニーズを満たし合うことができれば幸いである。

6 おわりに

パスポートは副次的なサービスとして検討を始めたが、最終的には新サービスの柱のひとつとなった。ブックシェアがサービス対象を常勤教職員、大学院生のみとしているのに対して、パスポートは学部生も対象に含むため、より多くの人に早慶の協定にもとづくサービスを認識してもらうことができてよかったと感じている。今後の課題として、学生証や教職員証の券面や形態に変更があった場合の対応が挙げられる。カードに何らかの変更が発生する場合には、自校だけではなく、両校で調整が必要であることを認識しておきたい。

注・参考文献

- 1) 三田メディアセンターは他のメディアセンターに先んじてゲート改修が済み、2023年10月から実験的に早稲田大学所属者の入館運用を開始していた。早慶ともに準備が整った図書館から2024年4月以降に試行運用開始、2025年4月からサービスを実施するすべての図書館で本運用

を開始した。

- 2) “プレスリリース 早慶の図書館連携をさらに強化―「早慶ライブラリーブックシェア」・「早慶ライブラリーパスポート」の開始―”. 早稲田大学, 慶應義塾大学.
<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2024/11/6/28-163092/>
- 3) 筆者は当時、三田メディアセンターの閲覧担当に所属しており、入館ゲートや利用者情報の管理業務担当者として本サービスに携わった。
- 4) 慶應義塾大学 メディアセンター. 慶應義塾図書館史. II. 東京, 慶應義塾大学メディアセンター, 2023, 337p.
- 5) ICカードの教職員証発行が始まってからは、常勤教職員も学生同様に自校の教職員証提示で入館のみ可能となった。
- 6) “「早慶間取寄せ貸出」・「学生証・教職員証による相互入館」サービスの開始 (2024年4月1日～)”. 早稲田大学図書館.
<https://www.waseda.jp/library/news/2024/11/06/21492/>
- 7) “「早慶間取寄せ貸出」・「学生証・教職員証による相互入館」サービスの開始 (2024年4月1日～)”. 慶應義塾大学メディアセンター.
https://www.lib.keio.ac.jp/news/008336_Jp.html
- 8) “早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンター、相互資料取寄せ貸出しサービス「早慶ライブラリーブックシェア」の対象を拡大”. カレントアウェアネス.
<https://current.ndl.go.jp/car/229402>
- 9) “早大と慶大、図書館連携をさらに強化し「早慶ライブラリーブックシェア」・「早慶ライブラリーパスポート」を開始”. 日本経済新聞.
https://www.nikkei.com/article/DGXZRSP681438_W4A101C2000000/
- 10) パスポートとは異なる手続きで慶應の図書館に入館する早稲田所属者もいたため、協定全体による入館者数はさらに多い。

早慶プロジェクト担当者座談会

〈出席者〉 早稲田大学図書館：

すずき つとむ
鈴木 努
(利用者支援課長)

なかむら じゅんこ
中村 洵子
(利用者支援課)

かに ちひろ
可児 千裕
(理工学図書館担当課)

なかざと きよひと
中里 潔人
(高田早苗記念研究図書館担当課(社会学担当)兼
図書館情報管理課)

慶應義塾大学メディアセンター：

おかの じゅんこ
岡野 純子
(信濃町メディアセンター事務長)

とも の し ほ
友野 詩穂
(三田メディアセンター主任)

おおた り お
太田 梨緒
(薬学メディアセンター)

もりおか ゆうすけ
森岡 祐介
(メディアセンター本部)

あさ お ち か こ
浅尾千夏子
(司会・三田メディアセンター課長)

いなぎ ゆい か
稲垣 侑華
(編集・湘南藤沢メディアセンター)

えんどう いずみ
遠藤 泉
(編集・信濃町メディアセンター)

所属は2025年6月4日時点

1 はじめに

浅尾 早稲田大学と慶應義塾大学(以下「早慶」とする)による早慶ライブラリーブックシェア(以下「ブックシェア」とする)、そして早慶ライブラリーパスポート(以下「パスポート」とする)について、より広くこのサービスを周知するとともに、実現までの経緯、課題、現時点でのサービスの評価、これからの展望などについて、意見交換したいと思います。まずは簡単に自己紹介をお願いします。

鈴木 早稲田大学の鈴木努です。図書館システム移行の頃は、システム担当の早稲田側のリーダーを務めていましたが¹⁾、2019年の12月に利用者支援課長を兼務してからは早慶のFulfillment(以下「FUL」とする)チーム²⁾の早稲田側のリーダーも務めております。なので、このFulfillment Network³⁾(以下「FN」とする)の機能の導入は、一応頭から見届けた一人です。

可児 早稲田大学の可児千裕です。今は理工学図書館で勤務していますが、2024年5月末までは利用者支援課で働いていました。このプロジェクトでは、特にFN機能の事前検証や、検証のための早稲田側のデータの準備、導入前の学内の説明会の調整や準備等に関わりました。

中村 早稲田大学の中村洵子です。2024年6月からプロジェクトに関わっており、担当になった時点では既に常勤教職員のサービスがスタートしていました。2024年11月からの大学院生へのサービス拡大に向けての準備や検証とサービス開始に向けた広報を

行いました。

中里 早稲田大学の中里潔人です。所属は高田早苗記念研究図書館担当課(社会学担当)兼図書館情報管理課です。6月から異動になりましたが、情報管理課は兼務で担当しておりますので、引き続きAlma⁴⁾周りの管理もしています。ブックシェア、パスポートにつきましてはAlmaとPrimoVE⁵⁾のシステム面の設定や検証、必要な機能についてEx Libris社⁶⁾との調整等を行ってまいりました。

岡野 信濃町メディアセンターの岡野純子です。早慶図書館システム共同運用を目指して立ち上がった早慶システム会議のFULチームメンバーとして2017年11月に参加し、2018年11月にFULチームリーダーとなった後、異動で離任する2023年10月末までの6年間、早慶プロジェクトに関わりました。

友野 三田メディアセンター閲覧担当の友野詩穂です。早慶のプロジェクトでは、業務フローやシステム動作の検証、マニュアルの作成に携わり、サービスリリースした後も不具合の対応ですとか、ちょうどこの春、新しいAlmaのインターフェイスに切り替わったところでも早慶でのサービスの動作検証を行いました。あとは各キャンパスのメディアセンタースタッフ、委託スタッフへの説明などを主に担当しました。

太田 2025年5月末まで三田メディアセンターの閲覧担当で、6月から薬学メディアセンターに異動となりました太田梨緒です。Almaに関しては2019年9月の導入時から早慶でのサービスインまで、友野

さんと同様に検証から関わりました。私は入退館ゲートや利用者データについて日常的に携わっていたため、その点に力を入れてきました。

森岡 メディアセンター本部システム担当の森岡祐介です。私はAlmaの導入の時期からシステムを担当しておりまして、今回のプロジェクトでは、Almaの設定周りと検証作業に参加しました。

浅尾 三田メディアセンター閲覧担当の浅尾です。2023年11月より、岡野さんからFULチームの慶應側リーダーを引継ぎ、ブックシェアとパスポートのサービス開始に携わりました。



2 サービス開始後の利用者やスタッフの反応

浅尾 ブックシェアが2024年の4月に教職員を対象に開始して、11月に大学院生に拡大しました。パスポートは2024年4月から学部生、大学院生、教職員を対象に、試行という形で開始してちょうど1年ほど経ったところです。サービス開始後の利用者の反応をお聞きしたいと思います。

友野 パスポートを始めた後、「早稲田の図書館に本当に慶應の学生証をピッとするだけで入れた！便利！最高！」という投稿をSNSで見つけまして、早速使われていることを実感しました。三田メディアセンターで先行してパスポートを始めましたけれども、開始直後に早稲田大学の1年生の方から「早慶の連携について調査をしている」とお話もいただいたことがあります。

太田 私もSNSをよく見ていましたが、学生は早慶が協定⁷⁾を結んでいると聞いて当然、ゲートを相互に通れる程度のサービスはあるものだろうと想定していたみたいで、前からできると思っていたという感想が見られました。なので、今回ようやく学生や教職員がイメージする早慶協定のサービスレベルに達したのではないかと感じています。

友野 ILLで現物貸借を申し込んできた利用者

にブックシェアを案内すると喜んでもらえているようで、スタッフからも好評のようです。

浅尾 毎月取っている利用統計からも利用度が測れていますよね。

鈴木 統計が語る部分も大きいのかなと思います。パスポートの統計を見て、例えば、早稲田の所沢キャンパスに慶應の先生方が意外と来られていることや、理工キャンパスにも結構学生が来ていて、意外や意外、戸山キャンパスよりも来館者数が若干多いぐらいであることが分かりました。皆さんにしてみると、もともとあって当たり前のサービスがやっとできるようになったことを実感しました。

可児 理工学図書館のある西早稲田キャンパスは、西早稲田駅に直結しています。慶應の学生さんが思ったより多く理工学図書館を使っていた様子で、西早稲田駅は副都心線で埼玉方面にもつながっているため、利便性が良いのかもしれませんが。入館者数の動きを見ると、試験期間に勉強のために使っていたということもありそうです。

浅尾 確かに慶應側も日吉の入館者数が他キャンパスより突出していますし、交通の便が良くて、かつ駅からとっても近いところがあるのが一つのポイントなのかもしれませんね。

鈴木 早稲田の中央図書館は日曜日にも開館していますが、開館時間がちょっと短いので人が集中しがちなのか、意外と混雑しており、かつ慶應の方も結構使っていられることも分かったのが新しい発見でした。使っていただけるのは光栄です。

中里 慶應の学生の早稲田大学中央図書館への来館者数を比較すると、2024年4月の延べ392名から2025年の4月には延べ493名と、101名増加しています。こういったサービスは開始時点で盛り上がってだんだん収束していくパターンもあるかと思いますが。増加傾向は、このサービスのニーズが一過性のものではなく、中長期的にあることを示していると感じています。

鈴木 統計を見ると2025年5月も、パスポートやブックシェアも特に大学院生の利用が伸びていますよね。多分6月、7月はずっと伸びていくのだろうと思いますし、しばらくはどのくらい伸びていくのが気になります。今のところはまだ大丈夫ですが、物量が増えると早慶便⁸⁾の負荷問題も出てくるので、その辺のケアをしっかりとしていければと思います。

特集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

浅尾 従来の業務負荷の効率化についてはいかがでしょうか？

鈴木 パスポートに関しては、利用者自身が自分の持っている学生証や教職員証で入れるようになったことで、利用券や図書館カードを発行していた部分がまるっとなくなったわけなので、そこは省力化が図られたと思います。ブックシェアも、早稲田はILL業務を委託しているので、我々は実感としてはあまりないのですが、おそらく慶應さんはILLの負担が減りましたよね。

友野 スタッフからは業務の負荷が軽減されたと言っています。ILLの現物業務は必ずスタッフの手を介していましたが、利用者自身による資料の取寄せにシフトし、直接KOSMOS⁹⁾から申し込めるのはスタッフからも利用者からもWin-Winだと思います。オンライン申請フォームで依頼を受けてNACSISで処理して、とするとステップも多いですし、ミスも出がちだったので、効率化が実現したと言っているのではないのでしょうか。

浅尾 森岡さんをはじめ、システム担当の方には縁の下の力持ちで本当にご協力いただいたところですけど、どうですか？ システム担当の皆さんの反応はやっと始まったかって感じでしょか？

森岡 長い準備期間だったので、やっと始まったかという感じです。ブックシェアが開始されてすぐに担当内でそれぞれ1冊程度早稲田さんの資料を取り寄せて、「本当に届いたね」と言って、その日に返却するというようなことをやりました。パスポートについては、早稲田さんに打ち合わせでお邪魔したスタッフから次の日に、「ちゃんと入館できた！」という報告があって、「ああよかった」と思いながら聞いていましたね。

浅尾 実際に自分でやると喜びがありますよね。「あ、入館できた！」と私も思いました。

3 苦労したこと

浅尾 では次の話題、ここが山場です。サービス開始までいろいろなご苦労があったかと思います。それぞれの業務の中で、大変だったこと、苦労したことを、ぜひこの場で明らかにしていただければと思います。

鈴木 共同運用によるシステムが2019年の秋に稼働しましたが、その時はシステムの安全確実な移行に

完全に振り切ってやっていたから新しいサービスをAlmaとPrimoVEで実現できていないことが課題でしたよね。

岡野 当時プレスリリース¹⁰⁾に出した言葉が、早慶の1,070万冊の資料を同時に検索、システムの安定運用、目録の共同作成が中心で、利用面が落ちていました。教員や利用者の皆さんにサービスについて話した時の「あ、そこまで？」「検索できるだけ？」っていう素直な反応がずっと、私の中に残っていました。利用面での利便性というか、共同運用のメリットを生かすまでは終われないぞ、と思っていました。

鈴木 私が閲覧チームを受け持つようになってから岡野さんや慶應側からぜひやりませんか？っていう、割と強いメッセージをいただいたことをまず覚えています。



浅尾 Almaには、ほかにリソースシェアリング機能もあったかと思いますが、共同運用のメリットを生かすためのサービス構築として、今回FN機能を採用した経緯、決め手はなんだったのでしょうか？

岡野 リソースシェアリングを実現するためには、罰則などのルールの統一、調整が必要かかもしれないと思って、ハードルの高さを感じていました。でも、FN機能は独自のルールを活かした設定や運用が可能だったので、そのハードルがちょっと低めに感じたし、利用者にとってもわかりやすく、利便性も高いだろうということで選択しました。Almaのリソースシェアリング機能のバリエーションは複数あって、一般的に使われているのは疎結合な感じですが、FNは密結合ですよね。早慶にはぴったりですが、FN機能を導入している海外機関も少なく、Ex Libris社がなかなか対応してくれないという課題もありましたが、中里さんや森岡さんたちがIGeLU¹¹⁾でEx Libris社に直接交渉して解決してくださったこ

ともあります。

中里 新しい機能を実現させる時に正規のルートであるCERV¹²⁾と呼ばれる投票システム経由ではなかなか実現が難しかったのですが、IGeLUで直接交渉をするとうまくいく可能性があることが今回わかりました。利用者登録は、以前は申請書を書いて、利用者の同意のうえでデータを預ける流れだったのが、これからは自動的にデータが連携されて、かつ相手館からも分かるような状態になる。なので、メールアドレスと名前だけの限定した情報であってもきちんと同意の手続きを踏むようなシステム設計をするのが望ましいという慶應側のリーガル相談のアドバイスを受けて、EUのGDPR¹³⁾を調べたうえで、早慶だけでなく世界的にみて必要な機能改善であるという説明を直接Ex Libris社に行い、利用者登録時の個人情報提供への同意ボタンを実装していただきました。

浅尾 初期設定とか、システム側で苦労したことはありましたか？

森岡 早慶のAlmaをつなぐ部分はEx Libris社のサポートスタッフも一緒に設定してくれましたが、利用者データのやり取りや罰則設定の部分は早慶で設定して検証して、想定通り動かないからまた設定を変えて、と地道に進めました。早慶で集まって検証した時も、慶應のAlmaの画面、早稲田のAlmaの画面、それとは別にPrimoVEの画面も開いて、大掛かりな検証になりました。そういう部分でも難しく、労力がかかりました。

太田 早稲田と慶應で使っている利用者データの項目が違っていたので、情報の連携に調整が必要でした。また、個人情報への配慮も結構難しい部分だったかなと思います。

可児 早慶のシステムを横断してテストしたり、エラーを実現するために複数のパターンで事前にテストデータを仕込んだりしていたので、混乱しないようにルールとテストの兼ね合いをきちんと理解する必要があったことも大変でした。

友野 早慶両方の立場からいろんなパターンで試行錯誤しながら検証していたので、今、自分がどの立場でどういう設定で検証しているのか、こんがらがりましたよね。このほかにも、英語のシンプルなドキュメントを読解したり、システム稼働から数年経ってお互いそれぞれにカスタマイズしている部分

もあったりで、設定がうまくできない等の壁にも当たりました。私はAlmaへのシステム移行時の動作検証には2019年1月から、本当に最後の方でしか関わっていなかったのですが、今回のFNの動作検証でシステムを新しく動かして検証することの大変さを初めて実感しました。



太田 パスポートも最初は無理な話として始まりましたが、慶應と早稲田で入退館ゲートの業者が一緒だったということが分かって、一気に実現性が増したのが嬉しかったです。

森岡 早慶で入退館ゲートを一斉に入れ替えるのではなく、既存のものを維持したまま、それぞれの所属者を入館させるところが、業者の方も我々もかなり骨を折りました。機密事項も多く、難しかったですけれど、学内の関係部署など、多くの方に協力いただいて、最終的に実現できたことに驚きました。

太田 自画自賛じゃないですけど、よくできましたよね（笑）。

鈴木 FNだけだと不十分だろうということで、もう少しわかりやすいサービスはないかと考えた時に、パスポート、入館の方の話が出てきて、その二本立てで話が動き出しましたよね。今思えば、コロナ禍であまり顔も合わせていなかったのに同時に2つやるのだから、しかも基本的に全部オンラインでやりとりしたので、それも苦労でしたよね（笑）。

太田 ブックシェアが詰まった時にパスポートが進んだりして、立ち止まっている感覚が薄れたので、私はブックシェアとパスポートを同時にやって良かったと思っています。紆余曲折あって頓挫しそうになったことや、苦労もありましたけど。両方のサービスの広報を出せて、インパクトもあってよかったと感じています。

岡野 このプロジェクトは、慶應側だけでなく

特集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

て、早稲田さん側でも調整してもらわないといけなかったものでした。お互いの部署ごとの業務の切り分けや委託している範囲、意思決定のプロセスやスケジュール設定が違っていたので、改めて早稲田と慶應で持っている背景が違うのを身に染みて感じました。お互いの気持ちだけではどうにもならない状況もたくさんありましたが、月例会やSYS、DSC、FUL3チーム合同の検討会のような密にお話できるようなところがあって良かったですし、改めて本当にうまくいって良かったなと思います。

友野 検証は早稲田の中央館の方と慶應の三田メディアセンターとメディアセンター本部で行いましたが、運用面に関しては、各キャンパスのメディアセンターにもいろいろ調整してもらいました。オール慶應オール早稲田というか、本当に皆さんの協力なくしては成功しなかったプロジェクトですよ。

中里 FULチームのリーダーシップがかなり大きかったと感じています。実現したいサービスのイメージ、仕様、ワークフロー、そしてその機能を実現するためにはどういうテストケースが必要なのかを詳細に出していただいたのがありがたかったです。システム担当だけの観点だと、ワークフローを含めた検証が抜けてしまい、運用開始後に不具合が見つかることがありうるのですが、FULチームの方々かなり詳細にシナリオを組み立ててくれたおかげで、今こうして無事に運用できていると感じています。



鈴木 FULチームのプラン作成やシナリオはいつも慶應さんが先行して作成してくれていました。今は維持管理として、岡野さんがブレインストーミング的に書かれていた早慶FNプランのエクセル表が生きています。慶應の皆さんは経験豊富だから、例えば汚破損本とか郵送とかを事前に予測していろんなパターンを洗い出してくれていましたし、システム障害が起きたらどうするかっていうところまでも

ちゃんと見ていてくれたので、本当にありがたかったし、そういう意味でも慶應さんの、このプロジェクトをやりたいという気持ちも感じました。

岡野 私達が頑張って送り続けていた熱いメッセージが伝わって、ようやく両想いになれて良かったです。

全員 (笑)

浅尾 プロジェクトに実際に関わって、個人的に、もしくは組織的にプラスになったことや得られたことはありましたか？ Alma移行当初から理想として描いていたものが一つのサービスとして結実したこともそうですが、今こうやって、皆さんでお話ができていること自体も一つの収穫だと思いますけどね。

鈴木 もともと早慶は主にILLの実施要綱の改訂で、年に1回対面で、早慶交互で会議をやっていたよね。それがコロナ禍で会議がなくなっていたのですが、FN機能の話をきっかけに月例会を持つようになったのは良い変化でしたね。

岡野 この関係性は、ただ単に協定を結んだだけで得られたものじゃなくて大変なことを一緒に乗り越えてきたからこそのものですよね。早慶の協定書は1986年に締結して、2026年に40年の節目を迎えます。これは記念すべきことですし、システムの共同運用がきっかけで、早稲田の皆さんとより一層関係性が深められたのは本当にありがたいことです。

鈴木 慶應さん以外でこんなにいろんなことを話せる他大学さんはないです。コロナ禍での対応を相談させていただくようなケースも多くて、システム以外でもいろんなことを自由に相談できるのが本当にありがたいと思っています。

岡野 私もコロナ禍の時にすごく思いました。初めてのケースだったから、どういう風に開館するのか、どう対応するのかっていう閲覧周り、特に利用者サービス系のところは相談できてすごく良かったです。

浅尾 先日、三田メディアセンターで受け入れた職場研修生に早慶の関係について説明したのですが、こんなに早稲田さんと親しいと思わなかった、こんなに情報交換が密だと思わなかった、もうひとつのキャンパスみたいな近さですごく驚いた、との感想が寄せられています。まるで一つの図書館のように、ということをもともと理想に掲げていましたけど、その言葉を他の方から聞くことができ、そう見えていることを実感できて嬉しかったです。そういう関係はほかにはないですよ。

岡野 今は大学だけでなく、全体的に予算や人員が縮小していく一方で維持するのさえも厳しくて、新しいことをやるのがなかなかできない。そんな中で皆さんと一緒にやれたのは、熱意と良い関係性があったからこそだと思います。いろいろ大変なこともありましたけど、本当に奇跡のようなプロジェクトでした。今回すごく前進したとは思いつつも、やっと追いついたぐらいの気持ちなので、これでやめることなく、このプロジェクトをさらにもう一步、二歩と進めていきたいですね。

鈴木 今更やめることはないと思いますよ。学部生がまだですし、まだビハインドですよ（笑）。

全員 （笑）

4 評価や課題 早慶間の今後の協力

浅尾 実際はまだビハインドだというお話が出たところで、このブックシェアとパスポートの課題、もしくは将来的な展望をお伺いできればと思います。ブックシェアに関しては、対象者の拡大が次のステップ、と皆さんお考えなのかなと思っていますがいかがでしょうか？

中里 自機関が所蔵する資料があるときは、他機関からのリクエストができないといった制限をした方が良い可能性もありますよね。Ex Libris社から難しいと言われていますが、システム担当としてはこういった機能を実現するために、Ex Libris社に働きかけることで利用対象者の拡大が目指せるのではないかと感じています。

中村 学部生への拡大は将来的にはできたらいいなとは思いますが、大学院生へのサービスを始めて1年も経っておらず、身分別のボタン表示の制御ができないというところも気になります。現在あげているCase¹⁴⁾のこともありますし、それらの解消状況を見ながら進めていきたいですね。

可児 利用者が増えて、より多くのニーズに応えられていることは、とても良い面だと思います。一方でこのサービスのユーザーが増えていくと、それまではそれぞれの機関だけで対応すればよかった汚損や延滞の問題がどうしても機関をまたがって出てしまう可能性があります。現時点ではまだ大きな問題にはなっていないですが、今後のことを考えると、うまく連携をとって対応していく必要があると感じています。



浅尾 会議でブックシェアについて説明をした時、教員の方から「学部生はいつから取寄せできるのですか？」という反応をいただいたことがあります。もちろんニーズがあるのは我々もわかっているのですが、将来的なシェアドプリントにつながるようなことをやっていければと思いますよね。ただ、現時点で既に延滞や汚損などのネガティブな出来事も起きているので、学部生拡大の実現に向けてはもう少し整理が必要かなと思います。

太田 そもそも協定の対象が常勤教職員で、非常勤講師は対象外であることに対して早稲田さんの方で不安の声がありましたよね。確かに、学部生レベルの学習はカバーできるようにそれぞれの大学で資料を集めているから、まずは非常勤講師のカバーを先にすべきなのか？とか、学部生が使えるようになるかと通信生も使いたくなるかもしれないとか、対象者の拡大一つとっても考えることはいろいろあります。でも、決してネガティブな感じではなくて、実現のためにもう一頑張りする甲斐はあるだろうな、という感じです。

森岡 サービスの一番の対象者は学生や教員なので、学部生への拡大はしたいですね。今の状態で対象者の拡大をすると、学部生も大学院生も教員も同じルールで貸出を行うことになりますが、そうすると利用状況を想定しきれないのが心配です。でも、身分別に異なるルールを設定できれば、学部生にも広げられるので、そこをシステム担当としてフォローしていきたいですね。

中村 広報も課題の一つだと思っています。統計を見ていると、一度使った方はかなりリピートされているようですが、どこまで浸透しているかがわからないので「こんなに良いサービスがあるよ」ということを教職員と大学院生にさらに浸透させていければと思っています。

岡野 早慶共同保存や分担購入も視野に入れて検討していければいいですね。予算の枠組みとか難しい

特 集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

ところもあると思いますし、大変ですけど。そのためにはまずはお互いの資料をお互いの所属者が自由に取り寄せできるという状態を作らなければいけなくて、ブックシェアを学部生っていう一番大きなターゲットに対象を広げること考える必要があると思います。一番資料を多く使うだろうと思われる学部生にサービスを広げるということは、自機関の人達へのサービス面に対する懸念、例えば慶應の学生が早稲田さんの資料をガンガン取り寄せてしまうというような懸念がありますが、紙の需要も減っていますし、慶應の中でも「慶應で、一つでいいよね」というお互いの資料や資産をうまく活用する考え方にシフトしつつあるので、その先の話として、「慶應と早稲田で、一つでいいよね」という考え方ができるようになればいいと思っています。

鈴木 システムが統合された時点から電子資料の共同利用は期待されているところですよ。ただ、契約や予算といった大きな壁があるからなかなか乗り越えられない。早慶和書電子化推進コンソーシアム¹⁵⁾で一定の成果を上げたことで、和書の電子化がかなり進んだ部分があるので、利用者支援課や閲覧担当でもぜひ協力していきたいですね。究極的には利用資格がある人は早慶どちらか気にせずに本が借りられて、電子資料も使えることが理想だと思うので、その実現に向けて電子のチームを支援していければと思います。もちろん紙の部分でも、対象者拡大の次の一步をどうするのか、今後も統計データを見ながら進めていきたいですね。

友野 電子媒体が増えて紙の資料の貸出数が減ってきているとは言われていますけど、統計を見ると一定の需要がありますよね。なので、早慶の資料をもっとお互いに活用できるフェーズに行った方がいいのではないかなと私も思っています。早慶のサービス開始時のように、冊数制限を設け、段階的にスモールスタートで始めますよと、サービスに対する説明や概念が浸透していけば資料の分担収集と共同提供の可能性も十分あり得るのかなと思います。

中里 分担収集と分担保存の可能性については、早稲田大学図書館内でも話題になることはあり、今回のような共同利用が保証された状態に関わる取り組みが、分担収集の前提になることは確かだと思います。その一方で、必要な資料をいち早く学生といった利用者に届けることを考えると、早慶で全分野を

分担収集することは難しい面もあるのではないかと思います。特定の分野、例えば薬学やスポーツ科学等に限定して、収集を分担することはあり得るかもしれないですね。もしくは、ある程度利用が落ち着いている資料については、早慶で特定の冊数を保存するとか、そういった分担保存の方がまずは協力して取り組みやすいのかなと思います。

浅尾 まずは保存をとというのはたしかにその通りですよ。

鈴木 分担収集に関しては、現場レベルでは今も自然に行っている部分がありますよね。戸山図書館で洋書の選書業務を担当していたときには、慶應に所蔵されていたら早稲田では買わなくてもいいかな、と考えることもありました。たぶん、慶應さんも同じようなことを考えていたのではないのでしょうか。分担収集を全くやっていないわけではないものの、もう少し加速させるためには様々な障壁がありそうですね。それに比べると保存の方が手を付けやすそうので、紙の保存をもっとコンパクトにすることが喫緊の課題ですね。

浅尾 2024年3月の早慶所長館長懇談会¹⁶⁾でも話題に上がったように記憶しておりますので、そのあたりからでも検討していきたいですね。

中里 学術情報検索における生成AI機能の利用の検討でも協力できるかもしれませんね。Primo Research Assistant¹⁷⁾ もリリースされましたし、先日の所長館長懇談会で情報共有はしましたが、早慶での今後の対応について具体的に検討していければと考えています。

太田 慶應は、三田だけでなく他キャンパスのメディアセンターにも早稲田さんとの関係性を広げていけたらいいなと思っています。

友野 展示やプレゼンバトル、ビブリオバトルなどの利用促進イベントの早慶戦をするのも面白そうですね。

浅尾 もっとお話を聞いていたいのですが、座談会はここで終了とさせていただきます。皆さま今日は本当にありがとうございました。

全員 ありがとうございました。

太田 結局、打ち上げがやれてないのが心残りなので、やるなら呼んでほしいです。

友野 もちろんです！

全員 (笑)

5 座談会を振り返って

今後についてシェアードプリントや資料分担購入のような、相互利用を超えたより大きなスケールでの早慶間の協力も語られた座談会だった。当面は、現在調整中のCaseの解決を待ちつつ、少しずつ連携の足場を固め、その先の具体化を検討することになるだろう。早慶の「まるで一つの図書館のような」

サービスの構築はこれで終わりではなく、図書館サービスの在り方や役割、将来像を見据えながら次のフェーズにつながっていくことを期待したい。最後に、ご参加いただいた早稲田大学図書館の皆さんに、あらためて感謝申し上げる。

(2025年6月4日 三田キャンパス図書館新館5階大会議室にて開催)



座談会に参加した早慶のスタッフ

(手前左から：友野さん、鈴木さん、岡野さん、可児さん、

奥左から：浅尾さん、太田さん、中里さん、森岡さん、中村さん)

注・参考文献

- 1) 早稲田のシステム担当リーダーとしての鈴木氏の任期は2020年5月までだった。
- 2) 早慶図書館システム共同運用の実現に向け、業務内容ごとにチームに分かれ、各分野で検討を行った。FULチームは閲覧・ILL業務を担当した。他にシステム業務を担当するSYSチームやディスカバリーを担当するDSCチームがある。
- 3) “Fulfillment Networks”. Ex Libris Knowledge Center.
[https://knowledge.exlibrisgroup.com/Alma/Product_Documentation/010Alma_Online_Help_\(English\)/030Fulfillment/050Resource_Sharing/Fulfillment_Networks](https://knowledge.exlibrisgroup.com/Alma/Product_Documentation/010Alma_Online_Help_(English)/030Fulfillment/050Resource_Sharing/Fulfillment_Networks).
- 4) “Alma”. Ex Libris Knowledge Center.
<https://exlibrisgroup.com/products/alma-library-services-platform/>.
- 5) “Primo VE”. Ex Libris Knowledge Center.
https://knowledge.exlibrisgroup.com/Primo/Product_Documentation/020Primo_VE/.
- 6) Ex Libris Group.
<https://exlibrisgroup.com/>.
- 7) 1986年4月1日に「早稲田大学および慶應義塾大学の図書館相互利用に関する協定書」を締結し、訪問利用やILLにおいて早慶間での相互利用を開始した。その後、2017年5月、日本初の図書館システムの共同運用に向けた覚書を締結し、2019年9月、図書館システム共同運用を開始した。
- 8) 早慶の図書館間で資料の搬送を行う連絡便
- 9) 慶應義塾大学KOSMOS.
<https://search.lib.keio.ac.jp>
- 10) “早稲田大学図書館・慶應義塾大学メディアセンター 日本初となる図書館システム共同運用を開始”. プレスリリース, 2019-09-03. 慶應義塾.
<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2019/9/3/28-62756/>.
- 11) IGeLU : International Group of Ex Libris Users.
<https://igelu.org/>.
- 12) “Primo Community Enhancement Requests and Voting (CERV)”. Ex Libris Knowledge Center.
[https://knowledge.exlibrisgroup.com/Primo/Knowledge_Articles/Primo_Community_Enhancement_Requests_and_Voting_\(CERV\)](https://knowledge.exlibrisgroup.com/Primo/Knowledge_Articles/Primo_Community_Enhancement_Requests_and_Voting_(CERV)).
- 13) GDPR. Proton AG.
<https://gdpr.eu/>.
- 14) “Case”. Ex Libris Knowledge Center.
https://knowledge.exlibrisgroup.com/Cross-Product/Knowledge_Articles/Welcome_to_the_Support_Portal.
- 15) 慶應義塾大学メディアセンター.” 早慶和書電子化推進コンソーシアム”. 慶應義塾大学リサーチナビ.
<https://libguides.lib.keio.ac.jp/sokei-ebook/home>.
- 16) 早稲田大学図書館の館長と慶應義塾大学メディアセンターの所長による懇談会
- 17) “Primo Research Assistant”. Ex Libris Knowledge Center.
[https://knowledge.exlibrisgroup.com/Primo/Product_Materials/001_Next_Discovery_Experience_\(NDE\)/Primo_Research_Assistant](https://knowledge.exlibrisgroup.com/Primo/Product_Materials/001_Next_Discovery_Experience_(NDE)/Primo_Research_Assistant).

シリアの移動図書館

わ け な お み
和 気 尚 美

(文学部助教 (図書館・情報学専攻))

2024年12月、シリアのアサド政権が崩壊したというニュースが世界を駆け巡った。驚きと衝撃でしばらく気もそぞろになり、私は夢中で報道記事を読みあさった。

かつて、私は2年間シリアで生活していたことがある。2007年から2009年まで国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊(現JICA海外協力隊)としてシリアの首都ダマスカスに滞在した。シリアには、会いたい人、歩きたい道、懐かしい景色、魅力的な食べ物が山ほどある。そして、図書館情報学という分野への好奇心の扉が、「イフタヒ・ヤ・シムシム(開けゴマ)」と開いたのもシリアでのことだった。

きっかけは1台の移動図書館だった。当時、私はシリア環境省の内局で図書館とは全く関係のない活動をしていた。移動図書館と出会ったのは、休日に私的に訪れた、ゴラン高原に程近いシリア南西部の町でのことだった。移動図書館は、日本政府からの文化無償協力により購入されたもので、車体には日本とシリアの国旗が描かれていた。開架している資料は主に児童書で、多くはエジプトやレバノンなど、周辺国で出版されたものだった。移動図書館は、対象地域にある公立学校を定期的に巡回し、学校の生徒や地域の人びとに資料を貸し出していた。なかには、図書館を生まれて初めて利用する人もいる。「この本はいくら?」「この本は貰えるの?」などと利用者から質問されるたびに、スタッフは図書館とは何か、どのような仕組みか、丁寧に説明していた。移動図書館の車内は狭く、一度に入ることができる人数には限りがある。移動図書館の外には、あっという間に入館の順番を待つ人の長い列ができた。皆一同にわくわく、そわそわしており、その様子を見て不思議

と私も嬉しくなった。順番を待つ人のなかに、幼な子の手を引くヒジャブ(スカーフ)を被った成人女性の姿があった。女性は絵本を借りに毎回、移動図書館を利用しているのだと語った。そして、図書館で借りる絵本を通して、子どものみでなく、彼女自身も言葉の読み方を学んでいるのだと言った。彼女は小学校を中退しており、日常アラビア語で話し、聴くことはできるが、読み書きは困難なのだと打ち明けた。女性の話は私の心に深く突き刺さった。移動図書館が僻地へ本を届けることが、非識字の成人が改めて読み書きを学ぶ機会を創出しているという事実を目の当たりにし、目頭が熱くなった。

興奮冷めぬまま、ダマスカスの自室に戻り調べたところ、図書館サービスが十分に届いていない人びとに対して、サービス範囲を広げていく移動図書館のような活動を「アウトリーチ」や「エクステンションサービス」ということを知った。そして、図書館情報学という分野で探求していくことができるとわかった。その後、シリアからの帰国直後に大学院へ進学し、図書館情報学という分野と向き合う、苦しくも挑戦に満ちた日々が始動した。

シリアにおいて2011年からの約14年間は、市井の人びとの知的自由が脅かされた時間だった。その間のシリアでの図書館活動の様子は、デルフィユ・ミヌーイ著『戦場の希望の図書館』(東京創元社)などに詳述されている。そして、ようやくシリアは抑圧から解かれ、新たな時代を迎えた。これからのシリアにおいて、本や図書館という存在が、人びとの心にそっと寄り添い、新たな目標や課題解決に向けた動力源となっていくことを願ってやまない。あの移動図書館がそうであったように。

オーダーメイド型講習会・まなびカフェ845

ー一人ひとりの「学びたい」に寄り添ってー

えんどう いずみ
遠藤 泉
(信濃町メディアセンター)

1 はじめに

医学分野に特化した信濃町メディアセンター（以下「信濃町」とする）は、日ごろからサービスの見直しやスタッフの育成のための試みを繰り返し行っている。とりわけ近年では、オンライン化が加速しサービスが多様化するとともに、一人ひとりのニーズに適したサービスの個別化が求められている。

元来、信濃町のサービスは利用者の個別の研究テーマに寄り添い、研究活動に深く関わる傾向があった。そのため医学図書館員の専門性を高め、医学分野における図書館員のスキルを磨き、スタッフ間での研鑽や知識・ノウハウの共有は欠かせないものとなっている。本稿では近年の信濃町の新たな試みとして、オーダーメイド型講習会¹⁾とまなびカフェ845について紹介する。

2 オーダーメイド型講習会

信濃町の利用者教育の詳細な歴史は慶應義塾図書館史Ⅱ²⁾（以下「図書館史Ⅱ」とする）を参照いただきたい。2003年に誕生した「電子リソース活用講座」の短縮版「電子リソースミニ講座」（以下「ミニ講座」とする）が開始したのは2009年だった。2015年以降のミニ講座は、PubMed・医中誌・EndNote・インパクトファクターのメニュー4種で、あらかじめ提示した日時において、個人あるいは少人数を対象に対面形式で実施された。

ミニ講座は、常に忙しくまとまった時間を作れない信濃町キャンパスの医学研究者・医療従事者にとって手軽に参加でき、利便性が高い一方で、メニューや日程が限定された講座であったことから、利用者にとっての選択肢の自由度はそれほど高くなかった。開催当日の無断キャンセルもあり、講座の担当者が半日レファレンスデスクで受講者を待っていても、一人も受講しないこともあった。また、1年間を3タームに分けてその都度広報を行ってい

たため、広報にかかる業務負担と受講実績が見合っていない部分も少なからずあった。

近年では、Webサイトから入手可能な利用の手引きなど各種ガイドも充実した³⁾ことで、ピーク時には年間100人を超えていた受講者数も減少傾向にあった。2023年度前期の時点で約10名にまで激減し、従来のミニ講座の形態が、利用者のニーズに適合していないことがわかった。そこで2023年10月よりミニ講座の後継サービスとして、利用者の申込みベースでのオーダーメイド型講習会を開始した。一人30分から受講可能であったミニ講座の手軽さを維持し、1年を通していつでも申込み可能で、受講は対面形式でもオンライン形式でも可とした。例えばPubMedと文献管理ツールの活用について1時間の講習会を行うなど、利用者のニーズに応じて自由に内容を組み合わせることができる。受講者に特定の研究テーマがある場合は、講習会後にオンデマンド検索相談や代行検索サービス⁴⁾など、さらなる相談対応につなげることもある。

2023年10月から2025年7月時点での実績は表1の通りである。2024年度は1年間で25回開催し、延べ33名の受講者となった。内容は多岐にわたるが、特徴的であるのは、従来のEndNoteのメニューをより大枠の「文献管理ツール」としてMendeleyを含んだ内容に拡げたこと、PubMedや医中誌の中級以上の内容として、「診療ガイドライン/システムティックレビューのための文献検索」を追加したことである。これらはオーダーメイド型講習会のメニューとして選択肢の一つになっているが、選択肢外の文献データベースの使い方についても、要望があれば可能な限り対応する。また2025年度からは、利用者が生成AIで作成した検索式を添削するメニューも選択肢に追加している。

受講者は大学院生以上の教職員がほとんどである。これは学部生には授業で医中誌やPubMedの使

表1 オーダーメイド型講習会の内容（2025年7月現在）

年度	回	所属	属性	人数	内容	形式
2023	01	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	PubMed・医中誌	対面
	02	看護医療・健マネ	修士学生	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	03	看護医療・健マネ	博士学生	1	EndNote	Zoom
	04	看護医療・健マネ	博士学生	1	PubMed	対面
	05	医学部/医学研究科/病院	学部生	2	文献管理ツール	対面
	06	看護医療・健マネ	修士学生	1	EndNote	対面
	07	看護医療・健マネ	博士学生	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	08	その他（通信教育課程）	学部生	1	Mendeley	対面
	09	医学部/医学研究科/病院	教員（臨床医学系）	1	EndNote	対面
	10	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	PubMed	対面
	11	医学部/医学研究科/病院	看護師	2	医中誌	対面
	12	医学部/医学研究科/病院	教員・研究員（秘書業務除く）	2	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	Zoom
2024	01	看護医療・健マネ	修士学生	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	02	医学部/医学研究科/病院	教員（臨床医学系）	1	Mendeley	対面
	03	医学部/医学研究科/病院	研究員（秘書業務除く）	1	PubMed・インパクトファクター・EndNote	対面
	04	医学部/医学研究科/病院	教員（基礎医学系）	1	Endnote	対面
	05	医学部/医学研究科/病院	教員（基礎医学系）	1	文献管理ツール	対面
	06	看護医療・健マネ	修士学生	1	PubMed・医中誌	対面
	07	医学部/医学研究科/病院	研究員（秘書業務除く）	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	08	看護医療・健マネ	修士学生	1	PubMed・医中誌	Zoom
	09	その他（SDM）	博士学生	1	文献管理ツール	Zoom
	10	看護医療・健マネ	博士学生	1	PubMed・医中誌	Zoom
	11	看護医療・健マネ	修士学生	3	文献管理ツール	対面
	12	看護医療・健マネ	修士学生	1	PubMed・文献管理ツール	対面
	13	医学部/医学研究科/病院	看護師	3	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	14	医学部/医学研究科/病院	教員（臨床医学系）	4	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	Zoom
	15	医学部/医学研究科/病院	教員（臨床医学系）	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	16	看護医療・健マネ	修士学生	1	PubMed・医中誌	対面
	17	看護医療・健マネ	博士学生	1	文献管理ツール	Zoom
	18	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	19	医学部/医学研究科/病院	研究員（秘書業務除く）	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	20	看護医療・健マネ	博士学生	1	PubMed・医中誌	対面
	21	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	文献管理ツール	対面
	22	医学部/医学研究科/病院	研究員（秘書業務）・職員	2	業績調査/業績リストの作成	対面
	23	医学部/医学研究科/病院	専修医	1	PubMed	対面
	24	その他（SDM）	博士学生	1	EndNote	対面
	25	看護医療・健マネ	修士学生	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
2025	01	看護医療・健マネ	博士学生	1	Endnote・Web of science	対面
	02	看護医療・健マネ	博士学生	1	PubMed・医中誌・Mendeley	対面
	03	医学部/医学研究科/病院	研修医	2	PubMed	対面
	04	看護医療・健マネ	教員（看護・薬学系）・博士・修士学生	8	PubMed・医中誌・文献管理ツール	Zoom
	05	看護医療・健マネ	博士学生	3	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	Zoom
	06	看護医療・健マネ	修士学生	1	医中誌	Zoom
	07	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	医中誌	対面
	08	看護医療・健マネ	修士学生	1	PubMed	対面
	09	医学部/医学研究科/病院	看護師	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面
	10	看護医療・健マネ	博士学生・学部生	2	PubMed	対面
	11	医学部/医学研究科/病院	教員（基礎医学系）	1	診療ガイドライン / システマティックレビューのための文献検索	対面

い方を案内する機会があることや、まだ本格的な文献検索を行う段階ではないことが理由かもしれない。信濃町キャンパスが軸足の健康マネジメント研究科生が学位論文の執筆のために受講することもある。

信濃町の利用者属性とオンライン化の加速を考慮すると、Zoomでの相談対応がメインとなるかと思われたが、思いのほか対面での受講を希望される利用者が多く、受講後アンケートでも「対面がよい」

という回答が見られた。またリピータも少なからずおり、同一利用者が複数回申し込むことや、受講後に頻繁にレファレンスデスクへ相談しに来る利用者もいた。講習会を通し自らの問題が解決されたといった成功体験が、レファレンス相談への心理的なハードルを下げ、さらなる問題解決のきっかけを生み出しているのかもしれない。

広報は主に年に2回、医学部の各教室にちらしを

ポスティングしており、それを見た図書委員の教員が興味を持ってレファレンスデスクを訪れることもあった。研究手法としてシステマティックレビューやスコーピングレビュー⁵⁾を行うことが多い健康マネジメント研究科では、教員や大学院生同士の口コミでサービスが拡がりつつある。同研究科では軸足となるキャンパスが信濃町キャンパスと湘南藤沢キャンパスで分かれているが、湘南藤沢メディアセンターからの相談を受け、オーダーメイド型講習会として信濃町で相談対応を引き受けることもあった。今後も利用者の要望や困っている状況に応じて、カスタマイズ可能な柔軟さを持つサービスの提供を目指したい。

このサービスは誕生後2年が経とうとしているが、しだいに課題も見えてきた。まず信濃町では別サービスとして類似した名称の「オンデマンド検索相談」があるが、利用者にとって両サービスの区別が付きづらく混同しやすい。また「講習会」という名称から、複数人でまとめて受講するセミナー形式と認識されることもあり、一人から気軽に受講可能であることがアピールしきれしていない。そのためサービス名称変更について検討の余地はある。

さらに、受講後に「このようなサービスがあることを知らなかった」「せっかくWebサイトで案内されていても申込みフォームまでたどり着けない」等の意見をいただくことがあり、より多くの利用者にこのサービスの存在を知ってもらうために、多様な広報ツールを活用するなどの工夫が必要と考えている。

3 まなびカフェ845

信濃町では、スタッフの医学図書館員としての専門性を育成・維持することが必須とされる。信濃町の職員研修や勉強会に関する取り組みの歴史については、こちらにも図書館史Ⅱ²⁾にて詳しく紹介されているため省略するが、近年では1990年代から2000年代にかけて、「医学メディアセンター研究会」が発足し⁶⁾、1999年からは週に1回、開館前の25分間に行う輪番制の報告発表会「ワンポイント研究会」が誕生した⁷⁾。

名称や内容の変遷を経たものの2000年代前半にスタッフによる勉強会は途絶え、その後のスタッフの研鑽は日本医学図書館協会(JMLA)の研修や、各自の担当業務にかかわるセミナーを受講することなどが中心であり、なかなか担当外の業務についての知識を得たり、スタッフ全員で信濃町の課題や問題

点を共有したりすることが難しくなっていた。そこでスタッフの提案により、2023年10月より輪番制の勉強会を開始することとなった。

この勉強会の名称はスタッフからの意見を募ったり、生成AIを用いて候補を出したりした結果「まなびカフェ845」とし、隔週水曜の8時45分から15分程度を目安に、事務室内で各自が選択したテーマで発表するが、ワークショップ形式の際は館内マナビバのセミナーエリアを活用する。なるべくスタッフの負担を軽減するために、配布資料等の用意は不要とし、1回の発表で2名が担当してもよい。開始当初から2025年7月までの発表テーマは表2の通りで、40回を超え現在も継続している。

表2 まなびカフェ845発表テーマ一覧
(2025年7月現在)

開催日	発表テーマ
2023/10/11	信濃町メディアセンターについて事務長がいま考えていること
10/25	集合研修について
11/08	健康情報ひろば&診療ガイドラインについて
11/22	TS業務の困りごとあれこれ
12/13	インボイス制度とILL-IN請求書・入金確認
12/27	リニューアルについて
2024/01/17	KOMPASについて
01/31	早慶相互利用サービス拡大について
02/14	ILL-OUTの処理の流れ
02/28	管理職が出席する会議の紹介
03/13	生成AIに関する情報収集と検討
03/27	見える化プロジェクト調査協力&診療ガイドライン検索事例①
04/10	古医書目録の修正版PDF公開(作業内容とスケジュール)
04/24	山中資料センターの重複資料除籍作業について
05/08	見える化プロジェクト調査協力&診療ガイドライン検索事例②
05/22	日吉・信濃町メディアセンターの違うところ、同じところ
06/12	メディアセンターの広報戦略(広報手段・課題など)
06/26	信濃町メディアセンターの災害時の緊急対応
07/10	2025年・2026年電子資源契約の見直しについて
07/24	慶應義塾大学病院BCP方針(災害対応訓練に参加して)
08/28	Web協働選書への参加について
09/04	鍵の管理について
09/18	慈恵大&薬学メディアセンター出張報告
10/02	電子資料契約の動き
10/16	生成AI×ポスター作成
11/06	KOMPASサイトリニューアルの進捗について
11/20	集合研修WGの活動紹介
12/04	生成AIでおためし議事録作成
12/18	信濃町IDカード
2025/01/22	2025年度予算について
02/05	組織の比較/似てるところ違うところ
02/19	古医書目録電子化の進捗報告
03/05	信濃町の利用統計分析に向けて
03/19	健康情報ひろばの選書: ACPとグラフィック・メディスン
04/02	2025年度に実施するAI関連の取り組みについて
04/16	医学部史料委員会資料の概況と資料整理報告
05/07	中期計画・事業計画について
05/21	MediaNet編集委員会あれこれ
06/04	第1回生成AI勉強会
06/18	KOMPAS今昔
07/02	第2回生成AI勉強会
07/16	メディアセンター協議会報告

現在は発表順の大枠を担当単位でパブリックサービス、テクニカルサービス・総務、パブリックサービス、健康情報・事務長とローテーションしている。割り振られた担当内で誰が何について話すかを決めるが、予定されている発表以外でも、タイムリーなテーマがあればローテーションに適宜組みこむ。発表スケジュールは共有フォルダのスケジュールシートで管理されており、自分が発表できるテーマや、聞きたい発表テーマがあれば発表候補シートに書き溜めておく。

当初は発表するテーマがなかなか決まらないのではないかと、担当業務やキャリアによって発表者に偏りが生じてしまうのではないかとといった心配の声もあったが、人事異動などによるスタッフの入れ替えや担当交代等もあり、現時点では発表テーマは枯渇していない。また常に図書館を取り巻く環境は変化しており、トピックとなる話題が絶えることはなく、とりわけ近年は生成AIが爆発的な発展を遂げていることで、生成AIとメディアセンターのサービスや業務がどのように結びつき、今後どのように活用できるのかを考えるための発表や勉強会も複数回にわたって開催されている。



図1 生成AI勉強会の様子

先述の「ワンポイント勉強会」では、メディアセンター所長や薬剤部といった多様な属性の参加者が見られた。実現は難しいかもしれないが、まなびカフェ845の今後の展開として、医学部や病院スタッフとのつながりが生まれるきっかけを作るべく、メディアセンターの垣根を超えた勉強会へと発展させることも視野に入りたい。

4 おわりに

本稿では近年の信濃町の取り組みの一環として、オーダーメイド型講習会とまなびカフェ845を紹介した。オーダーメイド型講習会は、従来のあらかじめ決められたスケジュールやメニューで申込みを募る形態から、利用者ごとの申込みベースで自由にカスタマイズできる講習会へと変容を遂げた。まなびカフェ845では、2000年代前半で途絶えたスタッフの研究会を、およそ20年ぶりによりカジュアルな形で復活させた。これら2つの取り組みの共通点は、個々の困りごとや知りたい気持ち、学びたい気持ちを尊重し、問題解決へとつなげる仕組みへと再構築した点である。

このように信濃町では、ある時はすでにあるサービスをリニューアルし利用者サービスにつなげ、またある時はいったん途絶えたスタッフの勉強会を新たな形で再開することに成功した。著しく変化する環境の中で、現状を適切に評価・分析し、問題解決のための糸口を模索し試行錯誤を繰り返す。そのためには変化への適応はもちろん、自らも変化を生み出すことを恐れない姿勢を培うことが求められるだろう。

注・参考文献

- 1) 慶應義塾大学信濃町メディアセンター. “オーダーメイド型講習会”.
<https://www.lib.keio.ac.jp/med/service/seminar.html#A01>.
- 2) 慶應義塾図書館Ⅱ編集委員会. 慶應義塾図書館Ⅱ. 東京, 慶應義塾大学メディアセンター, 2023.
- 3) 慶應義塾大学信濃町メディアセンター. “キャンパス別探し方ガイド (信濃町メディアセンター)”.
https://libguides.lib.keio.ac.jp/snm_home.
- 4) 慶應義塾大学信濃町メディアセンター. “レファレンスサービス”.
<https://www.lib.keio.ac.jp/med/service/reference.html>.
- 5) ライフサイエンス分野で多用される研究方法論で、特定の疑問やテーマに基づき系統的・網羅的な文献検索を行い、抽出した文献を評価・分析する手法。どちらも文献レビューではあるが、それぞれ目的や疑問となる問いの範囲が異なる。
- 6) 吉井由希子. 医学メディアセンターにおける職員勉強会について. MediaNet. 1996, no. 4, p. 47-49.
- 7) 岡野純子. 慶應義塾大学医学メディアセンターにおける研修の一例: 医学メディアセンターワンポイント研究会. 医学図書館. 2001, vol. 48, no. 1, p. 26-29.

コラム

日本医学図書館協会（JMLA）協会賞受賞報告

さやま
佐山 のの

（信濃町メディアセンター）

慶應義塾大学病院（以下「慶應病院」とする）のWebコンテンツKOMPAS¹⁾の取り組みが2024年度日本医学図書館協会（JMLA）協会賞を受賞した。1972（昭和47）年に医学情報センターとして「医学図書総合目録の編成と検索」が受賞して以来、2度目となった。今回の受賞根拠は『医学図書館』掲載の「医学図書館による医療活動支援：慶應義塾大学信濃町メディアセンターを例として」²⁾と『MediaNet』掲載の「信濃町メディアセンターの社会貢献：すべての人に健康と福祉を」³⁾の2本の記事である。

KOMPASとは、慶應病院の医師・医療専門家が病気や検査、薬など様々なトピックを一般の方向けにわかりやすく解説した、オリジナルの医療・健康情報サイトである。「病気を知る」のほか、6種類およそ900件の記事で構成されている。2024年の年間ページビュー数は670万にのぼり、主に患者さん向けのWebコンテンツとして高く評価されている。

信濃町メディアセンターは「健康情報ひろば・KOMPAS運営委員会」および「KOMPAS編集委員会」の事務局として、月ごとの新規記事掲載の続きと校正、記事の定期改訂の計画や実施、記事内

のイラストの転載許諾対応など、KOMPASの運営の一部を公開当初から担ってきた。しかし当然のことながら、記事の執筆や改訂には慶應病院の多くの医師・医療専門家が関わってきた。また、記事の執筆依頼先も教員から構成される編集委員会で決定している。多忙な中、執筆や改訂に真摯に取り組んでくださった慶應病院のスタッフの尽力があったからこそ、2009年1月に慶應病院内の「健康情報ひろば」で限定公開してから今日まで運用を続けることができ、今回の受賞に至った。

ちなみに、KOMPASは運用開始から10年以上が経過し、スマートフォンへの対応など時代に即した改修が求められていたところ、2024年度慶應義塾医療環境整備資金の採択を受け、2025年3月に新しいWebサイトを公開した。このリニューアルによって操作性や視認性が改善されるとともに、同時にリニューアルを行った慶應病院のWebサイトと一体感のあるデザインが実現した。さらに、同サイトではKOMPASが以前よりも大きく取り上げられている。

今後もKOMPASを通した慶應病院による質の高い医療・健康情報の提供に、事務局として責任をもって取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) “KOMPAS：慶應義塾大学病院医療・健康情報サイト”。
<https://kompas.hosp.keio.ac.jp/>.
- 2) 佐山のの. 医学図書館による医療活動支援：慶應義塾大学信濃町メディアセンターを例として. 医学図書館. 2024, vol. 71, no. 2, p. 95-98.
- 3) 遠藤泉, 西崎亜砂子, 佐山のの. 信濃町メディアセンターの社会貢献：すべての人に健康と福祉を. MediaNet. 2023, no. 30, p. 28-32.



図1 授賞式の様子

三田メディアセンター所蔵 レファレンス資料利用度調査(2023～2024)の報告

さとう ゆりえ
佐藤友里恵

(三田メディアセンター主任)

1 はじめに

三田メディアセンターでは、2017～2018年に図書館新館1階（以下「1階」とする）に配置されたレファレンス資料の利用度調査を行い、この調査結果や出版年等を元を選別して、多くの資料を新館地下4階書庫（以下「地下4階」とする）に移動させた。その調査から約5年が経過した2023年4月にレファレンス担当内で「そろそろまた利用度調査をしてはどうか」という声が上がったことを受けて、2023～2024年に再び調査を行った。本稿ではこの2回目となる調査について報告する。基本的には前回同様の方法によるが、ここでは調査結果について前回と比較することはしない。

2 調査の実施内容

ICタグやRFIDタグ等がついておらず、手に取った資料は自分で書架に戻すルールとなっている図書館で、貸出対象としていない冊子資料がどの程度手に取って利用されているのかを把握することは簡単ではない。書架の乱れ具合や、資料の傷み具合によってある程度推し測ることができるが、具体的な数字には結びつかない。では、他にどのような方法があるだろうか。通常業務を行いながら長期の調査を実施するには、図書館員だけでは無理な話で、図書館利用者（以下「利用者」とする）の協力が欠かせないと考えた。

前回は利用者也巻き込んだ人海戦術で調査を行ったが、今回もそれに倣うことにした。当時作成した掲示物等も適宜アレンジして再活用することで、準備にかかる時間と手間を多少は省略することができた。

(1) 対象資料

三田メディアセンターレファレンス担当の管轄となるレファレンス資料は現在約51,300冊、そのうち7割ほどは外部書庫である山中資料センターに保管されている。残る3割、約15,700冊が三田キャンパ

スにあり、そのほとんどが1階と地下4階に配置されている。基本的な資料、比較的よく利用される資料、新しい資料は1階に置かれているため、利用者がアプローチしやすい環境となっている。利用頻度が少ないであろう古い資料や旧版資料は、地下4階へまとめている。

前回の調査以降、地下4階が配置場所に追加されたため2つのフロアで調査を行うことにした。レファレンス資料は1階と地下4階以外にも図書館旧館等にわずかに配置されているのだが、作業の手間等を考慮して省略した。対象となる資料は、1階約8,800冊（DVD-ROM等の非図書資料を除く）、地下4階約6,300冊、あわせて約15,100冊である。

(2) 調査期間

今回は2023年10月10日から2024年10月10日まで実施した。調査の提案が上がった時は業務繁忙期と重なっていたこともあり、着手したのは9月に入ってからだった。開始日は、秋学期の授業が始まり入館者数が増えてくる頃を見計らって10月10日とした。一方、終了時期については、当初は約1年後の9月末としていたが、正確に1年間のデータを収集すべきだと考え直したこと、初日は準備等に時間をとられて実質1日もなかったため事実上の開始日は11日と考えてよいこと、の2点の理由から最終的に2024年10月10日までに変更した。

(3) 調査方法

調査は、①利用者に利用した資料を書架に戻さず所定の場所に置いてもらう、②それらをレファレンス担当4名で記録用紙に書き込む、③資料を書架へ戻す、④記録した内容をExcelファイルに転記してデータを保存する、という流れである。資料を置いてもらうための返却場所は、ブックトラック、低書架の上、書架の空いている棚を活用して、利用後にあまり移動せずに置くことができるよう多めに設置した。

記録する作業は、まずは前日の夕方以降に返却場所に置かれた分を始業時に手分けして行い、それ以外の時間は置かれている（あるいは溜まっている）ことに気づいたスタッフが記録をとった。利用が少ない地下4階は、初めの頃は1日1回の作業としていたが、様子が見えてきてからは数日に1回程度の頻度となっていた。

利用後そのまま書架に戻されてしまったり、授業の課題等でよく使われる資料は記録をとらない間に何度も利用されてしまったりするケースもあった。そのため、やむを得ないことではあるが、すべての利用を漏れなく確認できてはいない。ただ、様子を見ていた限りでは、かなりのデータを得ることができたかと思われる。

記録用紙に記入する項目は、日付、請求記号、バーコードラベルの番号のみとし、ファイルに入力する際に、タイトル、巻、出版者、出版年、配置場所の情報を追加した。手書き・手入力にもかかわらず記録ミスがほとんど出なかったことは、その後の作業において大変ありがたかった。

(4) 広報

利用者をお願いするのは「資料を使ったら返却場所へ置く」ことだけだが、まずは調査を実施していることを意識してもらわなければならない。そのため、とにかく視界に入るように、「調査実施中」のポスターに加え、各書架の棚板やブックトラックにも所定の返却場所へ誘導する掲示を出した。さらに今回の調査では「ここが返却場所である」ことを示す紙を貼りつけ、同時に三角柱を置いて立体的にも目につくように工夫を施している。(図1～3)



図1 書架とブックトラック



図2 書架の書棚



図3 返却場所

また最初は目立ちやすい「赤」を基本色としたが、時間の経過に伴って見慣れてしまい意識されにくくなるため、途中で2回の張り替え作業を行った。赤の次は緑、その次は濃いピンクを基調として、「何か変わった」感じを演出することで改めて意識してもらうようにした。

最初に掲示した枚数を以下に挙げてみる。1階、地下4階を合わせた数である。

- ・「利用度調査実施中」ポスター27枚
- ・書架棚板用掲示866枚
- ・「返却場所」37枚
- ・三角柱（1階低書架のみ）13本（枚）
- ・調査対象書架の案内（地下4階のみ）4枚

合計947枚で、2・3回目は多少変動するが全期間の延べ数はこの3倍となる。初日は作業のコツをつかむまでに時間もかかり、すべて貼り終えたのは午後まだいぶまわってからであった。2回目以降は一斉に変える必要はなく何日かけて空いた時間に順に張り替え作業を行った。

調査終了時は、最終日の翌朝に前日利用された分を記録、すべての掲示物と返却用ブックトラックを撤去し、「調査終了」の掲示を出した。予想したほどの混乱もなく、以前のように書架に戻されるようになるまで時間がかからなかったため、1か月ほどで掲示を剥がして完全終了とした。

3 調査結果

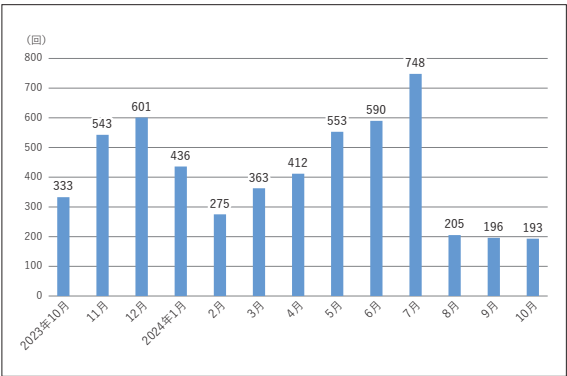
日々記録したデータは毎月はじめに前月のバックアップをとりつつ統計をまとめ、最終的に総合値での統計を出した。調査期間366日中、開館日は293日、利用回数は5,448回、利用資料は1,102タイトルであった。この結果について5つの切り口で分析した。

(1) 月別統計

表1のとおり、最も利用された月は7月の748回、次いで12月の601回であった。逆に少なかったのは9月の196回、8月の205回となっている。想定していたように、授業期間か期間外かによる部分は大きいとみられる。授業やセミナーとの関わりの詳細について具体的な確認はできないが、毎年同じような傾向が見られるのではないかと推測される。

ちなみに、もっとも利用回数が多かった日は2月のとある一日、131回であった。100回を超えること自体が稀である中で突出した回数となった。そして、まったく資料が利用されなかった日は、わずか5日のみであった。

表1 月別統計



(2) 配置場所別統計

1階の資料は合計5,131回、地下4階は317回であった。やはりよく利用される資料は1階に集中している。言い換えれば、多くの利用者は1階に置かれた資料を使うということになるだろうか。地下4

階の中で利用が目立ったのは『国会便覧』である。古い巻は元々山中資料センターにあったのだが、取り寄せ回数が多いため三田キャンパスに戻して地下4階配置とした。置かれた環境にも負けずよく使われる資料となっている。

(3) 和洋別統計

調査対象の和書と洋書の蔵書数はほぼ同じだが、利用回数については和書は4,088回、洋書は1,360回であり、和書3：洋書1の比率となった。タイトル数で見ると和書861タイトル、洋書241タイトルで、回数の比率と大きく乖離することはない。

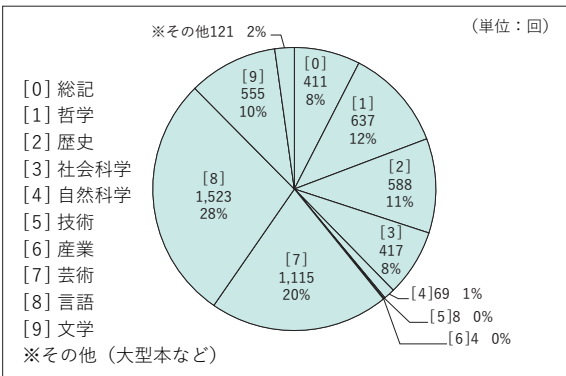
(4) NDC分類別統計

NDC分類ごとの利用も第2次区分（綱目）まで統計を出してみた。

まず第1次区分（類目）では、表2に示すとおり「[8] 言語」が1,523回と最多で、全体の3割ほどを占める結果となった。次いで「[7] 芸術」が1,115回、「[1] 哲学」が637回である。月別統計で見ても、ほとんどの月でこれらの分野がトップ3に入っている。

第2次区分で見た結果は、表には出していないが、「[70] 芸術・美術」926回、「[81] 日本語」465回、「[13] 西洋哲学」399回の順となった。第1区分の分野と少々順番の入れ替えがあったものの、この3つの分類で3割を占めており、特定の資料に偏りが出ていることがわかった。

表2 NDC分類別統計



(5) タイトル別統計

調査を経てレファレンス担当にはすっかり顔なじみとなった資料のうち、100回を超えた6タイトルを紹介する。参考までに請求記号の分類番号も（ ）内に付しておく。複数巻からなる資料は合計値をとっているため、1冊ものとの不公平感は否めない

が、敢えて1タイトルとして見ていただきたい。

『新潮世界美術辞典』(703) 220回

『国会便覧』(314.1) 193回

『オックスフォード西洋美術事典』(703) 180回

『スクリプナー思想史大事典』(130.3) 171回

『New dictionary of the history of ideas』(130) 165回

『大漢和辞典』(813.2) 112回

美術の2タイトルはそれぞれ複本があり、いずれも利用が多いのだが、複本の方がよく使われている。書架では複本が右側に並ぶため手に取りやすいのだろう。学生に聞いてみると、やはり授業の課題で使っているとのことであった。集中する時期には次々と学生が手に取る様子をレファレンスカウンターから眺めていた。厚みと重さのある図書がこれだけ利用されれば当然傷みも進んでおり、今回、利用がやや落ち着いたところで再製本や買い替えを行った。

思想史の2タイトルは原書と翻訳書の関係に非常にセットで利用されている印象がある。これらの資料も、授業の中で紹介して学生が利用していることを教員から伺うことができた。

また、特定のタイトルが特別に利用されているわけではないが、毎年のように授業において人物について調べる課題が出ると280～281の伝記の書架が乱れ始め、しばらくその状態が続く。その様子を見て、今年もまた人物調査の時期がやってきたことを知るのである。

4 調査から気づいたこと

電子化が進み入館者数が減っている中、セミナー等の機会に教員から「学生が図書館に行かない」「インターネット上の情報しか見ない」という嘆きの声をいただくことが多い。その一方で、授業で出される課題をこなすために図書館を利用せざるを得ない学生が、来館して実際に様々な資料にあたって情報を集める一面も確認できている。学生が手軽に入手できるものを好む傾向にあるのは実感としてあり、図書館の資料を使ってもらうようにするには、当然ながら図書館側からの働きかけは必須である。そして、教員との協力体制がとれば、かなり有効であろうという思いも抱くようになった。

また、文・経済・法・商の学部を有する三田キャンパスにありながら社会科学分野の資料が思ったほど使われていないという発見もあった。表2の[3]

が社会科学だが、この中の内訳を見てもどれが多い・少ないという差はほとんどなく、全体の7.7%の割合に留まっている。この分野は、近年レファレンス資料の冊子の受け入れが少ないことや、データベースや電子資料が充実していること、また、研究内容によっては新しい情報が重要で冊子資料をあまり必要としないことが背景にあるのかもしれない。レファレンス担当としてもデータベース等の利用を薦めているのだが、一方で冊子も使ってほしいという願いがあり、セミナーの際にはお薦めの資料を紹介している。これが利用につながってくれば喜びもひとしおである。

5 おわりに

1年間にわたる調査は大変ではあったが、レファレンス資料に対する親しみや理解が深まり、また、通常のシェルフリーディングでは得られないデータを確保できたことで、実施した意義は大きいと考える。人事異動による欠員対応や業務繁忙期により着手できていなかったが、この後は配置場所や分野ごとの分析をする予定である。

2回の調査の結果は、日々の受入れ資料の選定においても参考にしているが、そろそろレファレンス資料全体のコレクション構築の見直しをする時期かとも思われるので、そこで活用するための準備を進めておきたい。

最後に、ご協力くださった利用者の方々、および調査を見守ってくださった三田メディアセンタースタッフに、改めて感謝申し上げる次第である。

Alma/PrimoVEの機能拡張について

いな き りょう
稲木 竜

(メディアセンター本部主任)

1 はじめに

2019年9月に早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターは図書館システムの共同運用を開始し、Ex Libris社製の図書館システムであるAlmaとディスカバリーシステムのPrimoVEを導入した。運用開始から5年が経過し、導入当初から様々な機能拡張が行われている。本稿では、現在に至るまでに図書館システムに追加された代表的な機能拡張の内容について報告する。

2 クラウド型システムの利点

2010年から2019年8月まで運用されていた慶應の図書館システムKOSMOSⅢは、Ex Libris社の図書館システムであるAlephと資料検索システムであるPrimoで構成されていた。KOSMOSⅢでは学内に自館専用のサーバ機器を導入し、そのサーバ上に図書館システムを構築して運用するオンプレミス型のシステムであった。一方、現在運用中の慶應の図書館システムKOSMOSⅣのAlma/PrimoVEはクラウド型のシステムとなっていて、その利点はシステムアップデートが定期的に自動で行われていくことである。不具合修正や新機能がリリースされたタイミングで即座にシステムに反映され、利用可能となる。KOSMOSⅢまでのオンプレミス型のシステムでは、システムアップデート作業をシステム管理者側で実施する必要があった。実施計画を策定し、事前のアップデート手順の検証やトラブル時の切り戻し対応方法の検討を行うなど、大変な労力がかかり、定期的の実施することは難しく、数年に1度のタイミングでの実施となっていた。そのため、システムの修正や新機能プログラムがリリースされても即座に適用することができず、滞ってしまうというデメリットがあった。クラウド型システムの導入によりこれらの問題が解消された。

3 Alma/PrimoVEの機能アップデートサイクル

先に述べた通り、Alma/PrimoVEは定例でシス

テムアップデートが実施されている。システムアップデートには、①新機能(Main Features)、②機能改善(Additional Enhancements)、③不具合修正(Resolved Issues)が含まれる。アップデートは毎月実施されており、上記の①～③の内容が適用されるが、2022年6月以降は機能アップデートサイクルが見直され、現在は①の新機能のリリースは3ヶ月に一度、まとめてリリースされるように変更されている。これは、毎月提供される多くの新機能に対応することへの導入館側の負担について、全世界のAlma/PrimoVE導入館から意見が寄せられたことによる変更である。

表1 Alma/PrimoVEの機能リリースサイクル

<2022年5月までのリリースサイクル>		<2022年6月以降のリリースサイクル>	
月	アップデート内容	月	アップデート内容
Jan.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Jan.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Feb.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Feb.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues
Mar.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Mar.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Apr.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Apr.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
May.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	May.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues
Jun.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Jun.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Jul.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Jul.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Aug.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Aug.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues
Sep.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Sep.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Oct.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Oct.	-Additional Enhancements -Resolved Issues
Nov.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Nov.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues
Dec.	-Main Features -Additional Enhancements -Resolved Issues	Dec.	-Additional Enhancements -Resolved Issues

4 ユーザ・インターフェースのアップデート

Alma/PrimoVEは数年ごとに利用しやすさやウェブデザインのトレンドなどが考慮され、ユーザ・イ

ンターフェース（以下「UI」とする）の刷新が行われる。慶應でのシステム運用中においてもUIのアップデートが行われてきた。UIのアップデートではシステムの画面の見た目や操作方法が大きく変更され、利用者への影響が大きい変更となるため、Ex Libris社によって設定された移行期間内において、新UIを適用するかどうかを選択可能な形でリリースされる。これにより、リリース後即座に新UIへの切り替えが行われるのではなく、事前に十分な検証や業務マニュアルの準備の期間を確保することができ、導入館ごとに自由に切り替え日を決めて新UIへ移行することができるようになっている。

(1) AlmaのUIアップデート

Alma全体のUIは2020年11月のアップデートで現行のレイアウトに変更された。新旧UIの大きな変更点は、ナビゲーションメニューが画面上部から左側に配置され、検索バーがヘッダー内に表示されるようになった点である。この変更により、業務担当者の作業画面の表示領域が縦に広くとられるようになり、より多くの一覧データやメタデータエディタ（目録レコードの編集機能）の情報を表示できるよう改善が行われた。

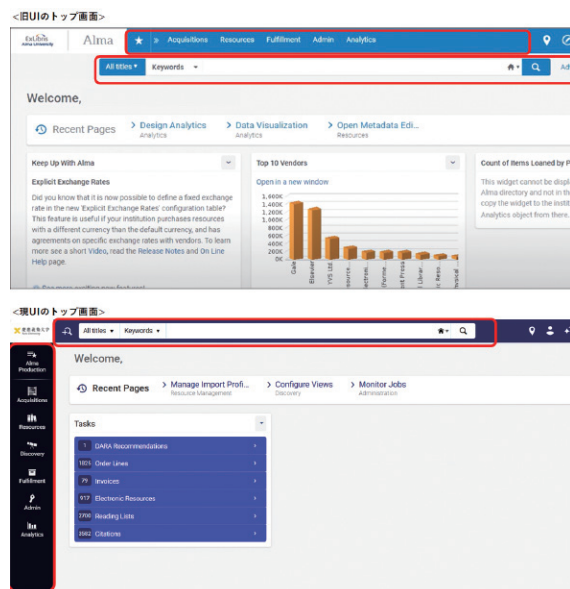


図1 Almaの新旧UIのトップ画面

AlmaのUIはシステム全体のアップデートとは別に機能ごとの改善も行われている。2024年には所蔵資料の情報検索機能のNew Title Search、利用者サービス管理機能のNew Manage Patron Services

等のアップデートが行われ、運用を開始している。これまでに追加で実装されてきた新機能を含めてシステム全体の再設計が行われたことで、一画面内でより多くの情報の確認や操作を行うことができるようになった。しかしながら、このような大幅なシステム変更時には多くの課題も発生する。リリース直後は不具合が多く発生することがあるため、切り替え前には十分な検証を行う必要があった。また、旧UIでは可能だった処理が、新UIでは不可となるケースもあり、早期の不具合修正や更なる機能改善をEx Libris社へ要望し、運用上の課題を解決していくようにしている。

(2) PrimoVEのUIアップデート

PrimoVEのUIは、オンプレミス型のPrimoから引き継がれたUIをリリース当初から利用しているもので、現在までに大きな変更は実施されていない。2025年中にPrimoVEの次期UIであるNext Discovery Experience (NDE) がリリースされ、各導入館のPrimoVEで利用可能となる予定である。今後はKOSMOSにおいても、次期UIの適用に向けて動作や独自のカスタマイズの検証を行い、計画を立て、対応を進めて行くこととなるだろう。

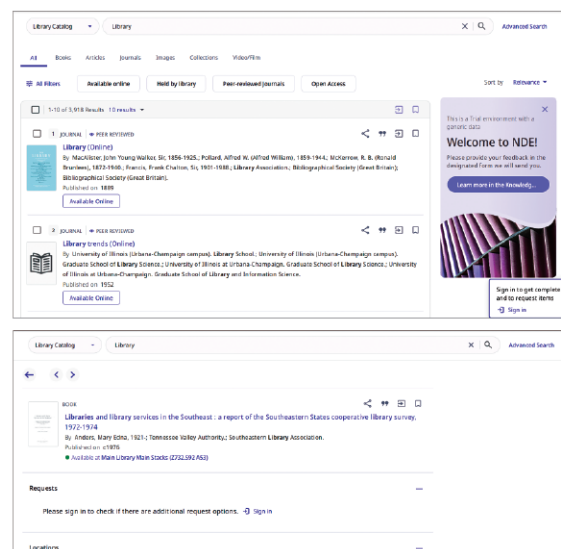


図2 PrimoVE NDEのデモ画面

5 その他の機能拡張

(1) Alma Cloud Appsの利用

Almaでは、搭載されている機能とは別に、Ex Libris社やAlmaの導入館が開発したCloud Appsという様々なアプリケーションを追加することで、機

能を拡張することができる。これらのアプリを活用することでAlmaに標準搭載されていない機能を追加し、機能を補完する専用システム等を独自に開発することなく業務の効率化を図ることができる。Cloud Appsは2025年8月現在で約80種類のアプリが提供されており、Almaの導入館はアプリを選択し、組み込んで利用することができる。慶應では2023年3月より一部のCloud Appsの利用を開始し、目録作成やデータ整備等の業務で活用している。

a NACSIS-CAT/ILL連携用のApps

運用中の代表的なCloud Appsの一例としてNACSIS-CAT/ILL連携用のAppsがある。これは、Almaに標準の機能として搭載されていないNACSIS-CAT/ILLとの連携を可能にするアプリである。このアプリを利用することで、Alma上からNACSIS-CATのデータを検索し、参照することができる。さらにCAT-P形式の書誌データをMARC21形式に変換してAlmaに取り込む機能も有している。また、このアプリを使用してNACSIS-CATの所蔵情報の更新を行うこともできる。これまで運用してきたKOSMOSⅢではNACSIS-CATとのシステム連携を行うことができず、国内製の図書館システムであるiLiswaveの目録機能を別途導入してNACSIS-CATのデータを取り扱ってきた。現在はこのアプリの導入によりAlmaからNACSIS-CATのデータを直接利用することが可能となった。NACSIS-ILLとの連携についてもこのアプリで機能が提供されているが、慶應では運用していないため、説明は割愛する。

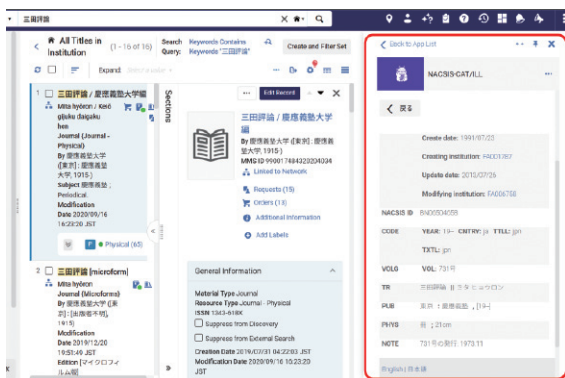


図3 Alma Cloud Apps「NACSIS-CAT/ILL」

(2) PrimoVEの機能拡張

PrimoVEについてもAlmaと同様に定例アップデー

トにて様々な機能追加が行われている。以下に、KOSMOSで運用中の主な機能について紹介する。

a Unpaywall¹⁾のフルテキストへのリンク表示

Unpaywallの情報をもとに、PrimoVEの検索結果からオープンアクセスフルテキストへのリンクを表示する機能が2021年に追加され、KOSMOSでも利用可能となっている。



図4 Unpaywallのフルテキストリンク

b 利用者からのフィードバック機能

利用者からの意見を受け付けるフィードバック機能が2022年に追加された。慶應では、図書館ウェブサイトから利用者から図書館への問い合わせを受けけるオンラインフォームがあるため、PrimoVEのフィードバック機能はKOSMOS上の電子資料へのリンク切れを報告する用途に限定して運用している。

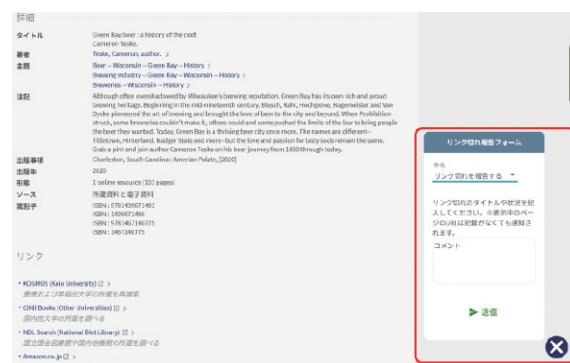


図5 KOSMOSのリンク切れ報告フォーム

c 検索結果へのバナー表示機能

PrimoVEの導入当初から運用している検索ワードに対応したおすすめデータベースやガイドを表示するResource Recommenderの追加機能として、検

索結果一覧の上部にバナーを表示できる機能が2022年に追加された。管理用の設定画面で“Display Always”のオプションを有効にすることで、検索ワードに関係なく、常に利用者の画面に表示されるようにすることができるため、KOSMOSでは図書館のイベントや新たな取り組みの広報に活用している。



図6 バナー表示機能

6 おわりに

Alma/PrimoVEには、ここで紹介した機能以外にも図書館スタッフや利用者に有用となりうる大きな機能追加が行われているが、慶應では運用に至っていないものもある。例えばPrimoVEの典拠検索機能などがあるが、これはコンソーシアム向けに対応していないため早稲田大学図書館との共同運用においては利用できない機能となっている。また、AIを活用した検索機能であるResearch Assistantも提供されているが、これは図書館員が機能を理解し、利用者への提供について慎重に検討を行ったうえで展開していく必要がある。

これまで紹介したように、Alma/PrimoVEは今後も機能拡張が行われていくが、有用と思われる機能については今後も積極的に検討を行い、導入における課題解決を進めて、より良い図書館サービスの提供に繋げていけると良いと考えている。

注

- 1) Unpaywall
<https://unpaywall.org/>

参考文献

- 1) Ex Libris Developer Network.
<https://developers.exlibrisgroup.com/>
- 2) Ex Libris Knowledge Center.
<https://knowledge.exlibrisgroup.com/>

日吉図書館開館40年

日吉図書館開館40年を迎えて

せ と じ ま ひ ろ み
瀬戸島弘美
(日吉メディアセンター)

2025年、日吉図書館（以下「当館」とする）は開館40年の節目を迎えた。1985年に慶應義塾創立125年記念事業の一環として建設され、2005年には開館20年を記念した行事を実施した。それからさらに20年経過した本年は、記念グッズの作成や館内展示など、ささやかながらいくつかの企画を行っている。ここにそれらの記録をとどめておく。

1 記念ロゴと記念グッズの作成

当館では、従来のロゴと同じく四阿^{あずまや}をモチーフに開館40年記念ロゴを製作し、2025年度限定で使用している。

記念ロゴを用いたポスターもあわせて作成し、館内に掲示するとともに、1階常設のデジタルサイネージでも表示している（図1）。

また、ロゴ入りの記念グッズも製作した（図2）。不織布バッグは黒・紺・茶・緑の4色各300枚を用意し、図書館ツアー参加者や学外からの来訪者に配布している。葉は2,000枚作製し、利用者が自由に持ち帰れるようメインカウンターに置いている。



図1 デジタルサイネージ



図2 不織布バッグ（左）と葉（右）

2 日吉ギャラリーでの展示

当館中央に位置する十字路廊下は、1階から3階までが日吉ギャラリーと呼ばれ、メトロポリタン美術館所蔵の代表的な作品のポスターを常時壁面に飾っている。この1階部分を2025年3月26日から1年間は衣替えし、当館設計者である横文彦氏による建築当時の直筆スケッチや、開館当時の建築写真を展示し、来館者にも40年前の雰囲気を感じてもらっている（図3）。



図3 1階日吉ギャラリーでの展示

3 日吉図書館設計者・若月幸敏氏の来訪

5月14日、当館の設計に横文彦氏とともに携わった若月幸敏氏が来訪された。若月氏が当館を訪れるのは実に20年ぶりであり、館内をご覧になりながら「建物は開館当初の姿をよく保っている」とのお言葉をいただいた。この日、1階ラウンジでは毎年恒例の「ライブラリーコンサート」（図4）が開催されていた。ここは開館当初、新聞キャレルコーナーだったが、当時から使用されている吊り下げ照明は、コンサートの演奏者を照らすスポットライトの役割を果たしていた。



図4 ライブラリーコンサート
(2023年春・弦楽四重奏)

日吉ギャラリーでの開館40年記念展示もご覧いただき、建設当時の貴重なエピソードを多数伺うことができた。たとえば、三田キャンパスの図書館新館と比較して限られた予算の中で建設が進められた当館は、若月氏自らが施工業者に色の指定を行うなど、様々な工夫を凝らしたという。また、レファレンスルームの奥行きを広く見せるために色彩のコントラスト（図5）や、閲覧機の脚の色使い（図6）に加え、館内の照明器具（図7）に至るまで、「色」と「光」への細やかな配慮がなされるなど、気づかなかった仕掛けがあちこちに隠されていた。



図5 レファレンスルーム
柱の色に濃淡をつけ空間を広く見せている

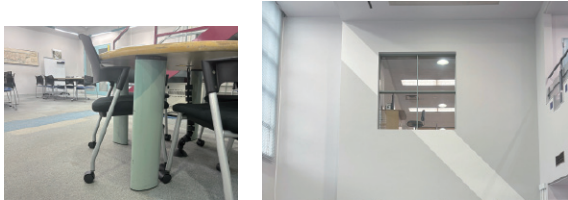


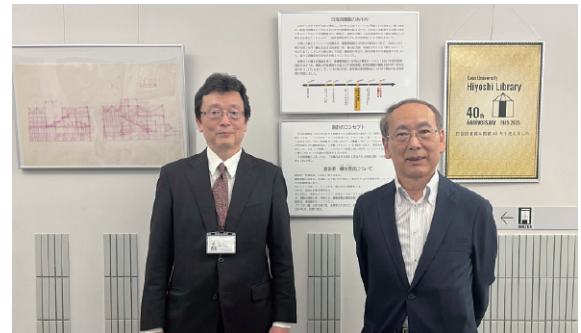
図6 閲覧機（左）グループ学習室（右）
「叡智の光」をイメージした斜めの塗装



図7 入館ゲート横の照明
若月氏がデザインした照明器具

開館20年の記念誌に寄稿された文章の中で、若月氏は「情報を求め図書館を巡り歩く人々は、見知らぬ世界への旅人である」と記している。それからさらに20年を経て、若月氏のお話を改めて伺い、これからも若き旅人たちが歩みを進めていけるよう、常

に時代の先を見据えたサービスを提供し続けることが当館の使命であると感じた。



繁森日吉キャンパス事務長と若月幸敏氏

参考文献

- 1) 杉山良子. 日吉図書館開館20年記念行事を終えて. MediaNet. 2006, no. 13, p. 40.
- 2) 若月幸敏. 巡る旅の回想. 慶應義塾日吉図書館開館20年記念誌. 2006, p. 11.
- 3) 石黒敦子. 図書館の風景とアート—美術品・日吉ギャラリー—. 2006, p. 16-17.

日吉図書館開館40年

座談会：日吉図書館の「今まで」と「これから」

〈出席者〉

よこやま ち あき
横山 千晶
(司会・日吉メディアセンター所長)

いわなみ あつ こ
岩波 敦子
(理工学部教授)

おさ だ すすむ
長田 進
(経済学部教授)

よし だ たいよう
吉田 大洋
(図書館フレンズ・理工学研究科修士1年)

くろ き ゆい か
黒木 唯花
(学習相談員、図書館フレンズ・商学部4年)

せきぐち もと こ
関口 素子
(日吉メディアセンター事務長)

あさ ひ な はな こ
朝比奈華子
(日吉メディアセンター)

せ と じまひろ み
瀬戸島弘美
(編集・日吉メディアセンター)

所属は2025年5月30日時点

日吉図書館の「今まで」と「これから」をテーマに、横山千晶日吉メディアセンター所長の司会ののもと、当館にゆかりのある教員2名と学生2名、職員2名による座談会を行い、これまでの思い出やエピソード、今後の日吉図書館に期待することについて、ざっくばらんに語り合ってもらった。



横山 本日はお集まりいただきありがとうございます。日吉図書館は、慶應の大先輩・楨文彦先生が「船」をイメージして設計され、入口のスロープは「栈橋」を表しています。開館から40年間航海を続けてきたこの図書館が、次の航海に進んでいけるよう、今日はぜひ皆さんのお話を伺いたいと思います。

利用者ニーズに応えるサポート

横山 岩波先生は古い文献を探される機会も多いと思いますが、日吉メディアセンター¹⁾のサポートはいかがでしょうか？

岩波 国内に一冊あるかどうかという資料も多いのですが、問い合わせるとすぐに複数の入手方法を示していただけます。昨年出版した著書執筆で1,000件近い文献が必要になった際も、メディアセンター

の協力で資料にたどり着けました。情報リテラシーセミナー²⁾も毎回内容が更新され、私自身学び直しの機会となっています。

横山 黒木さんは学習相談³⁾にも関わっていらっしゃると思いますが、デスクには学生以外の利用者も来られますか？

黒木 私が担当する学習相談は学生が中心ですが、レファレンスデスクには幅広い年齢層の方がいらっしゃいます。夏には通信教育課程の方、授業期間中の午前中には教授の姿も見かけます。資料が充実しているからこそ、学部生だけでなく研究者のサポートも可能なのだと思います。

横山 朝比奈さんはレファレンス対応で、どんな点を意識されていますか？

朝比奈 会話を大切にしています。急ぎで資料を求める方もいれば、探し方が分からない方もいます。相手のニーズを丁寧に聞き出し、その方に合った資料を提供できるよう心がけています。

黒木 私も、何気ない会話の中で相談の核心が見えてくると感じているので、やりとりを大切にしています。

横山 最近はAIも進化していますが、会話を大切にするのは人間ならではの重要なポイントですね。

図書だけではない「メディアセンター」

横山 日吉キャンパスには1・2年生が多く集まります。日吉メディアセンターは、そんな若い世代にとって図書館が居心地の良い場所になるよう努めています。図書館フレンズ⁴⁾(以下「フレンズ」とする)

の皆さんにも、さまざまな面で協力していただいています。その活動のひとつとして選書ツアーがありますが、吉田さんはこれまでも複数回ツアーに参加なさっているそうですね。

吉田 はい。2024年、2023年に参加しました。フレンズ10名程度と職員1名で大型書店へ足を運んで選書を行うのですが、自分の関心だけでなく、1・2年生のうちに読んでほしい本も意識して選びました。選定した図書の展示もフレンズの活動の一環です。

朝比奈 選書された本は新聞・雑誌コーナー横の階段の踊り場に展示されています。

横山 展示って大事ですね。私は本の表紙を見て読みたくなることが多いので。長田先生は学生時代、AVブースを活用していたと伺いました。



長田 最初は図書館に映像資料⁵⁾があることが不思議でした。でも行ってみたら、映画史に登場するような名作もあって。以来、映画を観て帰る生活が続きました。教員になって情報リテラシーセミナーをお願いしていますが、そこで「ここは本だけじゃなくて、データベースや映像・音声資料など、すべての情報を扱うから“メディアセンター”なんだ」と職員の方が言われて。「ああ、なるほど」と納得しました。情報がたくさん詰まっていて面白い場所だなと感じていました。大学にとって図書館のあり方はすごく重要だと思っています。以前いた大学では、分野横断的に資料を探すには複数の図書館を回る必要がありました。でも慶應ではメディアセンターに行けば、ある程度そろっている。横断的な研究している者にとって、これは本当にありがたいです。

横山 さまざまな形式の情報を集めてくれる力がメディアセンターにはありますよね。

関口 ありがとうございます。日吉の場合、1・2年生の学部生だけでなく、研究者や協生館の3つの大学院の学生など、幅広く対応していけるように資料を選定しています。最近では、学生が自分たちで本を選ぶ「塾生選書」⁶⁾も実施していて、図書館

員だけでは拾いきれない視点から資料が選ばれるので、蔵書の幅が広がっていると感じます。映像資料では、DVDは5,000本以上所蔵していますが、置いてある場所は事務室内です。そのため、学生がふと見て「こんなものもあるんだ」と思ってもらえるように、DVDのパッケージだけを展示するなど、小さな工夫もしています。目に見えない資料も多いので、それにどう気づいてもらうかが課題です。

岩波 KOSMOS上で図書を検索すると、関連する図書の表紙が見られますが、DVDパッケージもこのようにオンライン上で見られる仕組みがあると良いですね。装丁や表紙の印象って大事ですし。

横山 確かに、先ほども述べた通りですが、カバーから受け取る印象や情報は大きいですね。

岩波 せっかく多くのDVDを所蔵しているのですから、もっと活用されると良いですね。

何度も訪れたいくなる、自分の居場所

横山 ここからは少し未来の話をしたいと思います。まずは岩波先生、今後日吉メディアセンターにはどんなふうになっていってほしいと思われませんか？

岩波 キャンパスごとにメディアセンターの雰囲気は異なると感じていますが、先ほど黒木さんもおっしゃっていたように、その中でも日吉は、多くの人に開かれた場所だと思います。退職された教員も訪れるのを楽しみにしているようですし、大学院生や研究者が集中して勉強している姿もよく見かけます。学生はもちろん、塾員を含む幅広い世代が利用できる点に大きな魅力を感じています。こうした雰囲気は、この40年の間に試行錯誤を重ねて育まれてきたものだと思います。また、学生主体の取り組みも日吉ならではの特徴です。ビブリオバトルやコンサート、学習相談など、学生の視点が運営にしっかり反映されていて、今後もそうした姿勢を大切にしていってほしいと感じます。

横山 吉田さんも黒木さんも、今は日吉キャンパスに通っているわけではありませんが、それでも日吉メディアセンターで活動してくださっているのは、やはりこの場所ならではの雰囲気があるからでしょうね。吉田さんはビブリオバトルにも参加されていますが、それ以外にも、日吉メディアセンターの資料や魅力を伝える方法として、何か良いアイデアはありますか？

吉田 フレンズの展示のように、既に取り組まれている仕掛けもありますが、学生からもっと提案が出てくると、さらに良い形に進化していくと思います。たとえば、文系の内容を理系のキャンパスで紹介したり、逆に理系の話題を日吉で取り上げたりと、キャンパス間で情報を共有するのも面白いのではないのでしょうか。日吉には多様な背景を持つ学生が集まっているので、情報の交流の拠点としての役割を果たすことができるはずです。将来的には、地域の人々とも知識を共有し、対話が生まれるような場所になれば理想的だと思います。



岩波 確かに日吉キャンパスは慶應の中で最も関係学部が多いキャンパスですので、例えば、それぞれのキャンパスのメディアセンターを通して、その向こう側にいる学生たちと交流するような場ができたらしたら面白いかもしれないですね。

長田 今の話を聞きながら、他のキャンパスのメディアセンターもいろいろ思い浮かべたのですが、やっぱり日吉が一番「柔らかい」雰囲気だと感じます。構えて利用するというより、目的がなくてもふらっと立ち寄れて、ぼうっと過ごせるのが心地いい。あの雑誌コーナーなんて、何もしないでただ座っているだけでも意外と楽しくて。静か過ぎず、でもうるさくもない音の感じがちょうどよくて、集中もしやすかった。天井が高くて音の響きも独特で、あの空間がすごく好きでした。それから、電源や設備が少しずつ充実してきて、年々使いやすくなっているのを感じます。場所として明るくて落ち着けるし、レファレンスルームや2階東閲覧室あたりは、自分にとって特に居心地の良い場所でした。日吉はキャンパスの中心にもなっていて、いろんな人が行き来する場所でもありますよね。だからこそ、ただ機能的なだけでなく、「なんとなく居たい」と思わせる空気があることが、日吉の魅力なのではと思います。

横山 黒木さんは日吉メディアセンターを施設とし

て使ってみて感じることはありますか？

黒木 私も居心地の良さを感じていますが、学生たちは主に自習スペースとして使っている印象があります。今日も多く席が埋まっていて活用されている一方で、少しもったいなささも感じます。私は2階のバルコニー⁷⁾が好きで、小説を手にとってソファで読む時間を楽しんでいます。学生にももっと気軽に本と関わる機会があるといいなと思います。

横山 そうですね。日吉メディアセンターには本当にたくさん本があるので、自習だけでなく、楽しんだり自分から学んだりするようになると良いですよ。施設面でかなり工夫が感じられますが、そのあたり関口さん、いかがでしょうか？



関口 はい。見学に来た方に「この建物は40年経っているんですよ」と話すと、皆さん「そんなに古いなんて思えない」と驚かれます。実際には、壁の塗り直しや什器の更新など、キャンパスからの予算で毎年少しずつでも整備ができていて、本当に助かっています。また、スタッフが日々施設の状態を細かくチェックして「ここが傷んでいます」といった報告が上がることで、早めの対応ができ、良い状態を保てていると思います。先ほど黒木さんがお話されていたバルコニーは、最近、本棚の配置を少し見直しました。以前は本を取るときに、後ろのソファ席とぶつかることがあったので、棚の向きや間隔を見直しました。小さなことですが、そうした使いにくさを一つずつ改善していきたいと思っています。もし気づいた点があれば、ぜひ教えてください。皆さんの声を反映させながら、より良い図書館を目指していけたらと思っています。

岩波 日吉メディアセンターには多様なスペースがあり、学生それぞれが「自分の場所」を見つけて利用していると感じます。静かな隅を好む人もいれば、大きな机で対面して座るのが好きな人もいて、画一

的ではない空間づくりがされています。自分だけの居場所って大事ですね。

横山 そうした工夫は素晴らしいと思います。最近ではオンライン授業や就職活動などの面接で利用できる「声出しブース」⁸⁾ができたと聞きました。多様なニーズに応えようとしているのは本当にありがたいですね。

日吉メディアセンターならではのイベント

横山 場所としても素晴らしいですが、日吉メディアセンターは展示やイベントにも力を入れていますよね。

朝比奈 日吉キャンパスには、大学生活にまだ不安を抱えていたり、これから本格的に学びを始めようとしていたりする1・2年生がたくさんいます。そうした学生たちを、さまざまな角度から支援していくことが日吉メディアセンターの重要な役割だと考えています。そのために、我々スタッフは「企画展示ワーキンググループ」と「読書推進ワーキンググループ」という2つのチームを組んで、前者は館内展示を通じて情報発信を行い、後者は主にフレンズの活動を支援しています。私は読書推進ワーキンググループに所属し、学生たちの自主的な読書活動を後押ししています。また、レファレンス担当として学習相談の活動にも関わっており、特に4月の新入生向けイベントでは、大学での勉強方法や有意義な学生生活の過ごし方についてアドバイスをを行いました。学術の世界の入り口に立つ学生たちにとって、図書館が安心して使える場となり、自然と足を運びたくなるような存在でありたいと日々意識しています。



関口 今、朝比奈さんが話した学習相談のイベントは、学習相談の学生たちが自ら発案してくれたものなので、彼らの主体的な取り組みにとっても感謝しています。

岩波 地下のAVホールを活用して、映画上映会や、その後みなで感想を述べあったりするイベントがあっても楽しいかもしれませんね。

これからの日吉メディアセンターへ

横山 もっとたくさんお話を伺いたいところではありますが、時間が来てしまいました。最後にみなさん日吉メディアセンターに期待することを一言ずつお願いいたします。

岩波 今後もますます人が集う場所になってほしいと思います。学生の中にはサークルに入っていなかったり、教室でも一人でいたりする人もいます。そういう人が「ここが自分の居場所だ」と思えるような場所はとても大切です。授業や食堂は長く居られる場所ではないけれど、図書館は好きな時間に来て自由に過ごせます。本を読むだけではなく、リラックスしたり、自分のペースで使ったりできる場所として、これからも開かれた場であり続けてほしいです。

吉田 岩波先生がおっしゃっていたとおり、いろいろな学部の人が集まるからこそ、中心地としての役割があると感じます。実際、寝ている学生もいるくらい自由で、それぞれが思い思いに過ごしています。そういう意味で、この図書館は「自分の居場所だ」と感じられる、居心地の良い空間になっていると思います。ほかの図書館と比べても、古風なイメージではなく、新しいデザインを取り入れている点が印象的です。また、個人的には、地域とのつながりをもっと深まるといいなと思っています。もちろん難しい面もありますが、慶應には門がなく、外の人も入りやすいという特徴があります。そうした開かれた環境を活かして、地域との交流の場がもっと増えるといいなと感じています。

黒木 私も「居心地の良さ」を大切にしてほしいと考えています。日吉メディアセンターは、いろんなブースがあって、ゾーンごとにテーブルや椅子のデザインが違っていたりして、本当にそれぞれが自分に合った居場所を見つけやすい空間だなと感じています。そうした快適さに加えて、もっと「本との関わり」を感じられるような、素直に本を楽しめる場所になっていくといいなとも思っています。

長田 やっぱ私は日吉の図書館がすごく好きですね。建物の雰囲気やディテールを含めて、とても魅力的だと感じています。ですので、これからもっと図書館が開かれた存在になるといいなと思います。同時に、私は教員という立場でもあり、主に1・2年生の授業を担当しています。学生たちは、大学に

入ったばかりで、いろいろなことに慣れる前に卒業してしまうこともあるので、できるだけ早い段階で図書館の使い方を覚えてもらいたいと思っています。たとえば、データベースにはどんなものがあるのか、図書館にはこんな資料まで揃っているのか、というようなことを知ってほしい。実際に図書館に足を運ぶことで、ネットだけでは得られない発見もありますし、そういった体験を通じて、学びの幅が広がる

場になるといいなと感じています。

横山 次は開館50年、その次は100年、この先も図書館はどんどん進化していきます。そしてその進化にはみなさんの存在が欠かせません。どうぞこれからも日吉メディアセンターを支えていただけたら嬉しいです。本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

(2025年5月30日 日吉図書館1階所長室)



座談会参加者

(左から岩波先生・長田先生・横山所長・黒木さん・吉田さん・朝比奈さん・関口さん)

注記

- 1) 日吉メディアセンターは協生館図書室を含む組織の名称であるため、本来は建物名である「日吉図書館」と表記するのが正確である。しかし、日常的に日吉メディアセンターと呼ばれることが多いため、本座談会では発言されたとおりの呼称を用いて表記する。
- 2) 授業を担当する教員の要望に合わせて行うセミナー。内容は、教員とメディアセンターレファレンス担当者と相談しながら決定する。
- 3) 教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」を履修した学部2～4年生・大学院生による、レポートの書き方やプレゼンテーションの基本についてサポートする活動。2008年度から教養研究センター、日吉メディアセンター、日吉学生部の共催により実施している。慶應義塾大学日吉メディアセンター。“日吉メディアセンター 学習相談”。慶應義塾大学リサーチナビ。
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice。
- 4) 「『読書』という共通の趣味を通じた学生活動の場を図書館で」を合言葉に、2015年春に始まった学生によるボランティア組織。学生自身の目線から、読書や図書館の魅力を伝えることを目指した企画展示など、様々な活動を行っている。慶應義塾大学日吉メディアセンター。“図書館フレンズ”。慶應義塾大学リサーチナビ。
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_friends。

- 5) 1階AVコーナーでは、日吉図書館所蔵のDVD、ブルーレイ、ビデオ、レーザーディスク、CDなどが利用できる。
- 6) 2009年10月より、学生の声を収集する手段として、学生に自由に選書をしてもらうラウンジ選書がスタートした。2020年度～2021年度はコロナ禍により休止していたが、2022年度より図書館フレンズの学生による選書として再開（「フレンズ選書」）、2024年5月より「塾生選書」と名称を変更し、図書館フレンズ以外の塾生にも自由に選定してもらう以前の形式に戻した。
見島知子。日吉メディアセンターの読書推進活動計画。MediaNet. 2010, no. 17, p. 68-71.
<https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/01700680.pdf>
- 7) 図書館の入り口の真上に位置する東向きのスペース。ベストセラー小説や話題の図書、ガイドブックなどの軽読書用図書が「バルコニーコレクション」として配架されている。
山中みどり。“学生の憩いの場—バルコニーコレクション—”。慶應義塾日吉図書館開館20年記念誌。慶應義塾大学日吉メディアセンター編。横浜、慶應義塾大学日吉メディアセンター、2006, p. 14-15。
- 8) 2024年11月、AVコーナーにオンライン授業やオンライン会議をするための1人用「声出しブース」4席を設置した。

コラム

10年目を迎えた日吉図書館ライブラリーコンサート

よしざわ あ き こ
吉沢亜季子

(日吉メディアセンター)

日吉図書館でのライブラリーコンサートの初回は2016年5月であった。新入生歓迎の企画として、図書館でプロの演奏を聴いてもらおうと、教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）¹⁾と日吉メディアセンターの共催で開催した。“図書館でコンサート”はまったく初の試みで心配ばかりであったが、結果は大好評で、翌年度以降の継続的な開催に繋がった²⁾。それから10年、常に多くの観客が集まり、日吉キャンパスの風物詩としてすっかり定着したように感じる。

弦楽四重奏は、日吉図書館の閉館時に流れる「ラ・フォリア」の奏者でヴァイオリニストの本庄篤子さん（元日吉メディアセンター所長伊藤行雄名誉教授のご夫人）、ジャズ演奏はGIC（Global Interdisciplinary Courses）センターで音楽の授業を担当されていた井上智先生と土田晴信先生を中心に、それぞれメンバーとしてプロの演奏者にお声がけいただいている。

10年の間には新型コロナウイルス感染症流行による苦労もあった。2020年度は観客なしの配信のみ、2021年度は席数を制限した観客と配信のハイブリット開催となった。2022年度は席数をやや増やしたうえでハイブリッド開催を継続した。そして2023年度には生演奏にこだわって、会場開催のみに戻した。

毎年のアンケートでは、これまで本物の音楽に触れる機会がなかった学生から間近で聞く生音の迫力に感激する声が多く寄せられている。また、コンサート終演後には、複数の学生がステージへ駆け寄り、演奏者と会話を楽しんでいる様子が見られる。HAPP活動の総合テーマ「心と体と頭と…」³⁾にも繋がる良い刺激となっているようだ。

この10年間、企画に賛同してご協力いただいた演奏者の皆様と関係者に感謝したい。ライブラリーコンサートが、その後の学生生活においても図書館を気軽に利用するきっかけになっていればとても嬉しく思う。

ライブラリーコンサート（HAPP）開催記録

年度	ジャンル	日程	公演 (各回約50分間)	参加者数 (〇内 配信参加)
2016	クラシック	5/20(金)	①15:00- ②17:00-	
	ブルース	5/23(月)	①14:00- ②15:00-	
	ジャズ	5/24(火)	①13:30- ②17:00-	
2017	クラシック	5/16(火)	①12:20- ②15:00-	
	ジャズ	5/23(火)	①12:20- ②17:00-	
2018(春)	ジャズ	5/15(火)	①13:30- ②17:00-	155
	クラシック	5/22(火)	①14:30- ②16:30-	108
2018(秋)	ジャズ	10/26(金)	①14:45- ②17:00-	181
2019	ジャズ	5/24(金)	①14:45- ②17:00-	130
	クラシック	5/31(金)	①15:00- ②17:00-	118
2020	クラシック	10/21(水)	①15:00-	(192)
	ジャズ	10/23(金)	①15:00-	(170)
2021	ジャズ	10/15(金)	①15:00-	238(168)
	クラシック	10/20(水)	①15:00-	140(80)
2022	ジャズ	5/20(金)	①15:00-	201(98)
	クラシック	5/25(水)	①15:00-	168(52)
2023	ジャズ	5/17(水)	①15:00- ②17:15-	145
	クラシック	5/19(金)	①15:00-	70
2024(春)	クラシック	5/15(水)	①15:00-	70
	ジャズ	5/25(金)	①15:00- ②17:15-	130
2024(秋)	公募 古楽+準貴重書	10/22(金)	①15:00-	45
	ジャズ	11/11(月)	①13:45- ②15:00-	110
2025	クラシック	5/14(水)	①15:00-	70
	ジャズ	5/16(金)	①15:00- ②17:15-	100



2025年度 ラウンジでの弦楽四重奏

注・参考文献

- 1) 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP：Hiyoshi Art and Performance）Project.
<https://happ.hc.keio.ac.jp/>
- 2) 酒見佳世. ライブラリーコンサート in 日吉：図書館がコンサートホールになった日. MediaNet. 2017, no.24, p.40-41.
- 3) 慶應義塾大学教養研究センター日吉行事企画委員会, HAPPの活動の趣旨.
<https://happ.hc.keio.ac.jp/about/>

『論語疏』 卷6 文化財指定の顛末

すみよし ともしこ
住吉 朋彦

(附属研究所斯道文庫教授)

『論語疏』^そ 卷6 (図1) は、『論語義疏』^{ぎそ} とも称する『論語』の注釈書で、中国南北朝時代の梁の学者、皇侃^{おうがん} (488-545) が記したもの。抑も紀元前に遡る2500年も昔の孔子のことは、今も何とか理解できるのは、500年ほど後の漢魏時代の学者が、注を作り経義を書き留めてくれたお蔭である。そこからまた500年、隋唐に至る間の南北朝時代は、哲学思想の論議が流行り、經典の解釈は、その恰好の素材であった。そうした注説をまとめ綴ったのが「義疏」と称する注釈書で、『論語』の字句の解釈をめぐる議論が、『論語義疏』という書の主な内容である。

『論語義疏』の説は、時代の精神を映して闊達ながら、冗長で要領を得ない所もある。さらに500年を経て、合理主義の伸長した宋代に『論語正義』という簡潔な注釈書がままとると、『義疏』は時代錯誤と見なされ、その伝を絶ってしまった。今から約1000年前のことである。しかし歴史主義的な文献観が発達した清代になり、『論語義疏』の日本に伝わることが再発見され、南北朝時代精神史の一齣として、再び脚光を浴びる。

日本には、早くから梁代の書籍が、いくつか伝わっている。『千字文』『玉篇』『文選』といえは聞き覚

えがあるであろうか。これは中国南朝との古い付き合いの結果で、百済を媒とした伝来もあったであろう。『論語義疏』はその列に並び、他にも早稲田大学図書館所蔵の唐写本^{らいきしほん}『礼記子本疏義』^{そぎ} 卷59は、皇侃^{ていしやく}の弟子の鄭灼^{ていしやく}がまとめた同類の書で、光明皇后の所持本である。

さて『論語義疏』が日本に伝わったといっても、今日その全文が知られるのは、室町時代、15世紀の写本によってであり、斯道文庫所蔵の文明19年(1487)写本は、その代表的なもの。文明年間は、中国でいえば明前期、本書が伝を絶った宋代からさらに500年近く経っており、清朝の学者間には、日本で作られた偽書ではないかと疑う説も存在した。

この疑問は、20世紀初頭、ポール・ペリオにより敦煌莫高窟から『論語疏』卷2 (Pc3573/BnF) の唐写本が発見されたことで半ば解決したが、今回の『論語疏』卷6の再発見により、さらに磐石となった。当該本の卷6は、現在通行している『論語』および『論語義疏』の卷5に当たる部分で、紙背に奈良平安時代の縫印^{つぎていん} (料紙の継ぎ目を跨いで捺される管理者印) があるため、当然その本文は8世紀より古い。室町時代写本の卷2や卷5も、これら中国

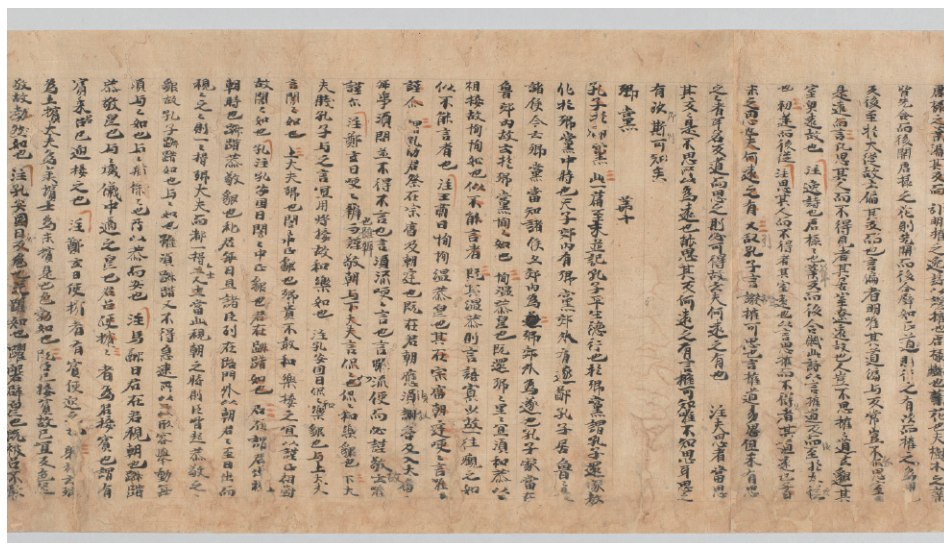


図1 『論語疏』 卷6

写本の残巻と、ほぼ同内容であったことから、全10巻がそれに準じ、唐以前の内容と認められる。

しかし再発見の真価は、その先のことである。まず当該本の古さは頭抜けており、7世紀以前と考えられる。これは著者皇侃の生きた6世紀にも近接する。展観で本資料を目にした現代人、特に学者は、一見して不思議な感覚に襲われたであろう。行款も不揃いの異常な字面に出くわすからである。稿者自身、初めて見た時の戸惑いを忘れ難い。ともかく頭の中で比較対照すべき資料が、何も浮かばないのである。ここが評価の分かれ道となる。

内容は『論語義疏』に違いない。書店から一部の写真を預かった稿者が気を取り直し、この異常さには何か大きな意味があると考え出したのはそこからで、結論からいってしまえば、それは、楷書成立以前の書であった、ということである。

楷書の成立には、二つの要素がある。一つは、篆書でも隷書でもない、紙の時代の標準書体としての楷書で、中国南北朝時代が確立期であり、書道で習う初唐の欧陽詢おうようじゅんの書が、その完成した姿である。もう一つは標準字体の成立。字体とは、文字の字面構成の問題で、例えば「應」と「応」との違いである。これは、儒教の経典を石碑に刻んだ、唐開成石経とうかいせいせつ (837) がその完成形で、南北朝の合一した隋唐の交（7世紀）が確立期であった。『論語義疏』巻6の文字には、どちらの意味からいっても楷書の標準が確立しておらず、唐以降の文字を標準とする現代人から見ると、概して異常と感ずるのであった。

また世の中には、そう極端に古い写本の存在を信ずることはできないと、贋作説を口にする論者もある。本書の伝来に藤貞幹とうていかん（藤原貞幹ふじわらさだもと、以下「貞幹」とする）が関与したことを知ると、贋作論者は勢いを増し、抑も全面的に贋造ではないかと、原本を見ることなく公言する者まで現れた。

江戸時代中期の有職故実家である貞幹は、早くから毀誉褒貶の著しい人物で、好古の癖を考証学に昇華させた稀代の学者であるにも関わらず、典籍の沽却に関わったり、強弁ともとれる激しい論争を行ったりしたこと、著述にも疑惑の目を向けられることになった。考証学も黎明期のこと、貞幹にしか知り得ない、原資料に基づく情報を弄するうち、そこには単なる誤認も含まれていたが、かえって偽証の誹りを受ける羽目に陥ったのである。

しかし、小倉慈司氏（元文学研究科講師）が指摘されたように、その著作に壬生家本として記録された『論語疏』の場合、闇に包まれていたこの本の伝来に光をあて、貴重な証言を遺したといえる。もっとも、一戸渉氏（斯道文庫教授）が明らかにしたように、その片隅から破片を取って古紙の見本としたようであるが。貞幹の贋作を臭わせるような憶測は、彼のこの行いと矛盾する上、種村和史氏（商学部教授）が精密に行った本文校勘の結果、中国南北朝時代以前の伝写に起因し、後世からは創出し得ない重大な異文が含まれていたことから、成り立ち得ないのである。

そうした理解は、三田メディアセンターのスペシャルコレクション担当による力強い支えの上に、塾内に設けた慶應義塾大学論語疏研究会において諮られ、多角的な意見交換を経て、2020年10月の第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」展¹⁾ 図録により、初めて世に問われた。しかしこれは、孤立した古代写本の分析であって、解題を担当して無責任のようではあるが、正直に言えばあまり自信はなかった。

一連の研究を経て、2021年11月に勉誠出版社から影印本『〈慶應義塾図書館蔵〉論語疏巻六〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵〉論語義疏 影印と解題』を刊行した。共著者の種村和史氏、一戸渉氏、齋藤慎一郎氏（文学研究科博士後期課程、当時）の尽力、佐藤道生先生（名誉教授）の付序を忝くし、日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の助成を得て、世に送り出した形である。慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションにおける画像公開²⁾ や、中国での同様の出版を条件としながら刊行を引き受けてくださった、勉誠社吉田祐輔社長の英断に負う所も大きい。ともかくも『論語義疏』の最古本と最善本とを、慶應義塾の名を冠する一冊として発刊できたのは、幸いなことであった。

ただ、稿者が当該本の位置付けについて心から確信できたのは、2021年3月10日に、早稲田大学図書館特別資料室の計らいにより、国宝・唐写本『礼記子本疏義』巻59（図2）全紙の原本を、閲覧させて頂くことができたからである。半日間、隣接のレクチャールームを貸し切りにして、室員の方が常に在室してくださる体制の下、大机に卷子本の全16張（約7m）を展開、調査用具を乗せた台車を曳きな

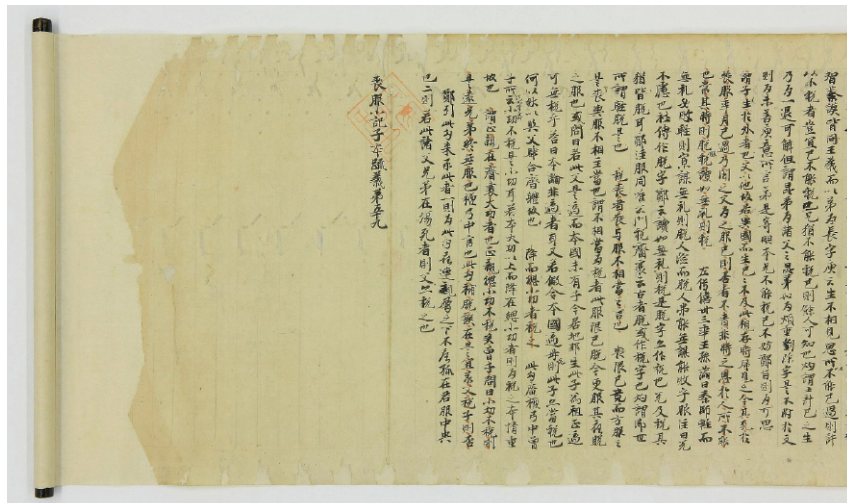


図2 国宝『礼記本疏義』巻59 早稲田大学図書館蔵

がら、自ら移動し具さに観察したが、こちらは国宝の指定に相応しく、確立期の秀抜な楷書によって、見る目に麗しい美観を湛え、筆作者の一貫した意志の力を滲ませていた。しかし、あの『論語疏』巻6の発するような違和感に襲われることはなく、この美しい標準器を得て、その位相がよく実感できたのである。

この前後、種村教授、齋藤氏と稿者は、伝道師よろしく内外への宣伝にも努力した。成均館大学校国際学術会議「東アジア文献学の新地平」(2020年11月14日)、斯道文庫開設60年記念フォーラム「書誌学のこれまでとこれから」(同11月28日)、国立台湾大学中文系学術專題演講(2021年3月18日)、北京大学国際漢学家研修基地における東亞漢籍伝播研究ワークショップ(同4月3日)といった具合に、半年間に4回ほど報告を行い、韓日台中と紹介活動を実施、ポストコロナ期でみなりモートでの開催であったが、各地で様々な反響を呼んだ。北京大学の会を主催された劉玉才教授は、中国における影印出版を建議され、2024年11月には上海古籍出版社から、勉誠出版社版の中国語訳となる『論語義疏二種』を、慶應義塾大学論語義疏研究会と北京大学東亞古典研究会の共編として刊行することができた。

幸い、これらの成果が汲み取られ、2025年3月21日、文化庁文化審議会文化財分科会の答申³⁾を経て、「論語疏巻第六」は、日本国指定の重要文化財となったというのが、今日までの経緯である。4月19日から5月11日まで開かれた、京都文化博物館における「新指定国宝・重要文化財」展⁴⁾には、故あって開

会時刻に推参したが、居並ぶ名品に伍し、やはり特異な存在感を放っていることを確認した。当該本の譲渡をお決め頂いた一誠堂書店の酒井健彦社長、推薦に同調してくださった教員諸賢、収蔵を決めてくださった塾経営陣と、歴代図書館長、選書関係者、適切かつ効果的な収蔵、また指定が視野に入ってから煩雑な手続きも実行してくださった旧貴重書室、現スペシャルコレクション担当の皆様、一塾員として深く感謝申し上げたい。

今後は微力ながら、その保護と活用に基づき世界文化史の構築に資するべく、さらに研究の気運を高めて行きたい。さし当たり、早稲田大学図書館の国宝『礼記本疏義』巻59と、慶應義塾図書館の重要文化財『論語疏』巻6を並べて陳列し、双方比べて参観者の知見を深める「義疏慶早戦」の開催を、かなり真面目に提唱する次第である。

注・参考文献

- 1) 慶應義塾大学三田メディアセンター。“第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」”。
https://libguides.lib.keio.ac.jp/mit_annual_exhibition/32.
- 2) 慶應義塾大学メディアセンター。“慶應義塾大学メディアセンター デジタルコレクション”。
<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/rongoso>.
- 3) 文化庁。“文化審議会の答申(国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定等)”。
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/94188001.html.
- 4) 文化庁。“令和七年新指定 国宝・重要文化財 目録”。
https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/94202201_02.pdf.

スタッフルーム
Staff room

図書館渡り鳥の思い出話

しんじ はなこ
進士 華子

(日吉メディアセンター)

かれこれ40年も前、大学の授業中に教員がぼつりと言った。「図書館の神髄はSDI, すなわち、さと出てくるインフォメーションです。」半分冗談だったのかもしれないが、私のポリシーとなった言葉だ。SDIを頭の片隅に置きながら、私の仕事歴を振り返ってみたい。

三田情報センター（現在の三田メディアセンター、以下「三田」とする）3階雑誌室が私のスタート地点だった。上司は新人の私に「どうしたいのか言え。そのために何が必要なのか明らかにしてくれたら外への交渉は私がしてくるから」と、自分の職場がどんな図書館になったら理想的なのかを考える視点を与えてくれた。初代KOSMOS開発の一員としてオープンしたての殺風景な湘南藤沢キャンパスで仕事をしたのも忘れられない光景だ。

ところが就職して6年経過したところで夫が転勤になり、あっさりと慶應義塾を退職してしまった。今の時代の視点で考えると本当にもったいなかったが、ここから私の図書館渡り鳥生活が始まる。

退職した1週間後から南山大学図書館に職を得た。小ぢんまりとした図書館、よく勉強するが比較的小おとなしく品行方正な学生、宗教学者として来館する神父様たち。あの頃、郵便事情の良くないローマやバチカンにエアメールで宗教学関係の複写や貸借の依頼を出すのは何か月もかかる大仕事だった。

そしてまた6年で東京に戻ることに今度幼稚園の図書室へ。大学図書館とは別世界の学校図書館。児童書とはいえ、歴史の積み重ねを経て構築された蔵書と聡明な児童たちに新たな図書館の世界を知り心が躍った。だが結婚9年目にして思いがけず双子を授かり、産休がない職位だったためわずか半年で退職。そこからは、子育てを満喫する人生を送ろうと決めた。我が子の通う小学校で、ボランティアとして図書室の運営に参加し、授業前の朝の時間に読み聞かせもした。いろいろのある学校だったので、冬は火の暖かさを感じながら昔話を讀んだこと

もあった。そんなある日、三田で働いていた時のご縁で図書館復帰の話をいただき、横浜初等部の図書館に嘱託として勤務することになる。

就任時、開校3年目の横浜初等部図書館は、まだ蔵書構築の真最中。児童書から大人向けの図鑑まで片端から購入し、約5年で蔵書数を3倍に増やすという貴重な体験をした。横浜初等部の生徒（横浜初等部では生徒と呼ぶ）はいつかメディアセンターの利用者になる。理想の利用者を育てるために、カウンターでは「お願いします」「ありがとうございました」と言う、本は大切に扱う、ということ徹底した。つかまえた虫を手握ったまま、その虫の名前を調べにやってくる生徒たちは少々迷惑ではあったが、本で調べるという基本中の基本を実践してくれたことは高く評価すべき楽しい出来事だった。

週3日横浜初等部で働きながら、残りの2日は神奈川県立図書館、神奈川県立保健福祉大学図書館、品川区立大崎図書館で派遣の仕事も経験した。新型コロナウイルス感染症で閲覧席や返却本の消毒が主たる仕事だった時もあった。公共図書館では、来館して真先に自分が企画した特集本の書架に足を運んで借りてくれる利用者がいると、カウンターの内側で小さくガッツポーズをしたものだ。「企画が当たる」これは大学図書館や学校図書館にも共通する嬉しい経験だろう。

横浜初等部に8年勤務したのち、協生館図書室に仕事を心得て早や1年半、私の司書生活はぐるっとまわって大学図書館に戻ってきた。三田の1階にカード目録がずらりと並び、3階では初めて導入した法律判例文献情報CD-ROMの利用法をマンツーマンで利用者に教えていた時代から37年、別世界になったメディアセンターで、自分自身が必死で学ばなければならない状況は大きな刺激である。振り返るに、SDIのためには、所蔵資料の量や質もさることながら、図書館員の知識と情熱と愛（資料と利用者両方に対する）が必要だ。これはずっと変わらない真実だと思っている。

英国図書館研修報告

とび 飛
あき な 明奈
(三田メディアセンター)

1 はじめに

2024年9月から12月の約3か月間、英国ノリッジのセインズベリー日本藝術研究所（以下「SISJAC」とする）リサ・セインズベリー図書館を拠点に、英国およびフランスの図書館における研修の機会をいただいた。本研修は2012年に開始され、筆者で10人目の派遣者となった。

2 研修の目的

研修にあたり、自身の目的を三点設定した。一点目は、英国の図書館における取組みを調査し、今後の業務にいかすこと。二点目は、日本の図書館に求められることを理解し、国際的な協力関係の中で果たすべき役割について考えること。そして三点目は、三田メディアセンター選書担当およびメディアセンター本部目録担当での経験から関心を持っていた、(a) コレクションマネジメント、(b) 図書館目録、(c) 英国、欧州の日本研究図書館における課題について、特に知見を得ることとした。

3 研修内容

(1) セインズベリー日本藝術研究所

研修の拠点であるSISJACのリサ・セインズベリー図書館では、和古書を含む日本語資料の目録データ登録を行った。受入資料は、日本芸術関係の研究書や図録が主であるが、考古学や書道等、対象の範囲は広い。また、国立国会図書館（以下「NDL」とする）や諸団体からの寄贈も多い。そうした現代本に加え、江戸時代の画譜等の和装本60タイトル程も整理した。日本美術関係の資料に集中的に触れながら、英国における目録データ作成を経験し、WorldCatとCiNiiにデータを登録できたことは、研修の成果の一つである。

またSISJAC所属者を含む日本研究の研究者との交流や、主催するイベントに参加する機会を得た。SISJACは開所25周年を迎え、「Japan in Norwich 2024」として、様々な行事が行われていた。11月に

ロンドンで開催された国際会議¹⁾では、日本芸術や考古学に関する発表が行われ、最新の日本芸術研究の一端に触れるとともに、日本芸術の受容のされ方を肌で感じることができた。会議の前には、在英国日本国大使館で行われた外務大臣表彰にも参加した。SISJAC所長のSimon Kaner氏が、英国における日本研究の発展・促進及び両国の文化交流に貢献されてきたことに敬意と感謝を表するものであった。毎月開催されるThird Thursday Lectures²⁾を含め、イベントを通じて多くの方々と交流させていただく中で、SISJACが果たしてきた役割と、その図書館の重要性を再認識した。



図1 セインズベリー日本藝術研究所

(2) 訪問機関でのインタビューと事例紹介

日本研究関係の図書館を訪問し、コレクションマネジメント及び図書館目録に関する聞取りを行った。Japan Library Group UK（以下「JLG」とする）の会議では、三田メディアセンターのコレクションマネジメントに関する発表を行い、情報共有にも努めた。リサ・セインズベリー図書館の平野明氏にご紹介いただき、訪問した主な機関は、表1の通りである。

表1 主な訪問先

日 程	訪 問 先
9/17-12/24	セインズベリー日本藝術研究所 リサ・セインズベリー図書館
10/14-15, 11/14	イースト・アングリア大学図書館
11/6	Japan Library Group UK会議 [会場：大英図書館]
11/7	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 図書館
11/8	在英国日本国大使館 図書館
11/9	Conference : Looking Forward in Japanese Arts and Cultures [会場：ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ]
11/22	大英図書館
11/25	ケンブリッジ大学図書館
11/26	ケンブリッジ大学アジア中東学部 図書館
12/3	シェフィールド大学 West Bank Library
12/5	エジンバラ大学図書館
12/16	コレージュ・ド・フランス Bibliothèque des études japonaises
12/17	パリ日本文化会館 図書館
12/18	Bpi:Bibliothèque publique d'information

選書担当である筆者の業務に関連し、受入資料の選定方法、冊子と電子資料の選定、課題、資料の除籍について話を伺った。

(a) 受入資料の選定方法

リーディング・リスト及びリクエストに基づく購入は、最も多くの機関で行われていた。本学でも利用していたEx Libris社のLeganto³⁾等、オンラインのリーディング・リストに教員が登録したタイトルを図書館で購入する。リクエストについては主として、教員や学生からサブジェクト・ライブラリアンへのメールや、図書館のWebサイトに用意したフォーム等からの申請、電子ブックのプラットフォーム経由の申請が使われていた。基本的にリクエストを謝絶することはない。高額な場合や、継続資料を新規購読する場合以外には、サブジェクト・ライブラリアンによる選定は行わず、プロセッシング・チームが購入手続きを行う機関が複数あった。こうした方法で受入資料を決定している機関では、自主的に確認しない限り、サブジェクト・ライブラリアンが受入資料を見る機会はない。また、継続資料の新規購読

や中止、高額なデータベース等の購入になると、図書委員会で決定される機関が多数であった。次に多いのは、書店のカatalogやWebサイトからの選定である。この方法で選定していたのは特に分野と所属者の研究内容についての知識が豊富な司書で、日頃から新刊情報を確認していた。司書がその言語を読解できない場合は、リクエストへの対応中心の選定になりやすい。日本語や日本の出版事情に明るい司書がない図書館では、日本関係の資料を積極的に受入することは難しい。東アジアや日本研究担当の司書でも日本人は減少しており、英国の図書館での日本語資料の受入も減っていくと思われる。その他の方法として、ケンブリッジ大学アジア中東学部図書館では、学部のWebサイトを活用し、講演等が行われる際にはゲストの著書を確認し、収集していた。受賞歴のある現代作家の小説を購入している機関もあった。また、寄贈資料からの選定については、書庫スペースや受入にかかる人手不足等の理由から、どの図書館も慎重に行っていた。NDLの資料の国際交換制度を利用している機関もあるが、それも減っているとのことである。

(b) 冊子と電子資料の選定

大学図書館では、アクセシビリティ、スペースの観点から電子資料が優先され、それがポリシーとして掲げられている。例えばイースト・アングリア大学（以下「UEA」とする）のCollection Development Policy⁴⁾冒頭1.0には、“Digital first”とある。利用者の傾向を見ても、特に新型コロナウイルス感染症のパンデミック後は、電子ジャーナルだけでなく電子ブックもより定着したという。提供までの時間が冊子より短いことも評価されている。一方、日本語資料では冊子を優先する、または電子優先のポリシーは適用しないという機関が多かった。理由として、電子版の販売がない、ユーザ・インターフェースに不満がある、ダウンロード不可のことが多い等の意見があげられた。「なぜ日本の図書は冊子刊行から電子ブック刊行までこれほど時間がかかるのか」と複数の方から尋ねられた。エジンバラ大学では、研究者の希望で日本の電子ブックサービスの利用を開始したが、準備に一年を要するほど導入のハードルが高かったという。なお、日本語資料の冊子は、今回の訪問先においては、ほぼ同じ日本の書店経由で購入されていた。支払い方法に融通をきかせてく

れる点等が評価されており、エメールであれば二週間ほどで利用者に提供できるという。

電子資料優先の流れは避けられないが、留意すべき点について考えさせられた事例を二点あげたい。一点目は、セキュリティである。2023年10月、大英図書館（以下「BL」とする）がサイバー・アタックに遭い、ほぼ全てのサービスが停止した。訪問時はそれから1年以上が経過していたが、電子資料の閲覧を含む多くのサービスが再開できていなかった。影響はBLに止まらず、ケンブリッジ大学等にも及んでいた。英国の法定納本図書館では、電子納本への切り替えが進んでおり、それらは館内の専用端末で閲覧できる。各図書館での閲覧は、BLのサーバを経由して行う仕組みのため、閲覧不可となった。二点目は、経済的な問題である。パンデミックで様々なものがオンライン化されたとき、自宅にコンピュータやネットワーク環境がない人々が問題になった。図書館も常にこうした問題に配慮しなければならないことを実感した。

（c）コレクションマネジメントに関する課題

共通の課題は予算と書架スペースに関するもので、その他は機関により意見が分かれた。新規受入を基本的にリーディング・リストとリクエストから行うものとすれば、課題は少なくなる。司書が日本語資料を選定する場合には、言語の理解、他の地域研究と同程度の予算配分の中で日本語資料が高額であること等があげられた。所蔵資料を熟知している方は、特殊な資料や、来歴不明の資料の整理等を課題とされていた。選書に政治的な偏りが出ないよう細心の注意を払う必要があること、支払い方法が煩雑で購入できない場合があること等も課題にあげられた。

（d）除籍

今回の訪問先は、書庫を増築する等の措置を講じている、納本図書のため処分できない、といった理由から除籍を行っていない機関が多かった。非西洋言語の資料は、言語のわかる担当者がいないため対象資料の選定ができないという機関もあった。エジンバラ大学では、目録データが未登録の中国語資料から除籍対象の選定を行っていたが、中国人の目録担当者とサブジェクト・ライブラリアンが協力し、実現したということである。本学でも、書庫狭隘化の対応は必至であるが、何をどのように除籍するかは難しい問題である。そこで、大規模除籍を行うUEA

で話を伺った。UEAでは、利用者のフィードバックを受け、また図書館を設計したDenys Lasdun氏の当初の意図に従い、増築された書架を取り除き、利用者スペースを作るという目標が定められた。具体的な方法は図書館に任せられており、担当管理職が置かれ、長期的に取組みが行われている。専用ツールであるOCLC GreenGlass⁵⁾を用い、数年間の利用状況や国内の他の機関の蔵書数などを入力し、除籍の目標数と照らし合わせながら蔵書分析、方針の検討が行われていた。教員の理解を得るため、説明を行いつつ進められている。利用者のためのスペースを考えるという目標を共有し、人とツールを準備し、実行に移している現場を見せていただき、大変勉強になった。

多くの司書の話を知り、コレクションマネジメントにおいて最も大切なことは、研究者の扱う主題、授業の内容を把握することだと感じた。利用者の現在のニーズを理解するため、継続的に動向を追う必要もある。三田メディアセンターでは、教科書やリクエストによる購入に加え、図書館でも一定数の資料を選定し、受入資料は担当者が確認している。限られた時間の中でもこうしたことを継続し、職員が蔵書を確認できることは、大変貴重であると改めて感じた。これは、先輩方が知識や経験を引き継いでくれたからできることであり、今後も繋げていけるよう尽力したい。図書館が積み重ねてきた歴史を大切にしつつ、電子資料の扱い等変化への対応を行うこと、役割を終えた資料の除籍を計画する等柔軟性を持って課題に向き合うことが求められると感じる。

b 図書館目録

筆者のメディアセンター本部目録担当での経験から関心のある図書館目録について、目録データ登録方法、課題に感じている点を伺った。

（a）目録データ登録方法

目録担当者は減少しており、訪問先の図書館には、目録だけを担当している司書はほとんどいなかった。日本語資料については、日本語がわかる場合にはサブジェクト・ライブラリアンも目録データ登録を行っている。英語資料については、資料購入の際に目録データや装備まで含めて購入できる、シェルフ・レディ・サービスを利用することで目録登録を行わない図書館もある。具体的な登録方法については様々であった。SISJACは慶應と同様、

WorldShare⁶⁾やAlma⁷⁾といった自館の図書館システムに登録し、所蔵のビジビリティを向上させるため、WorldCatやCiNiiといった他のシステムにも登録している。BLでは、自館の図書館システムに登録すると自動的にWorldCatに登録される。パリ日本文化会館はAlmaのみ、在英国日本国大使館の図書館はCiNiiのみに登録している。コレージュ・ド・フランスでは、フランスの研究図書館の所蔵が登録されているSudocに登録し、自館の図書館システムへはSudocから自動的に登録される方法を採用している。

(b) 図書館目録に関する課題

共通の課題は、人と時間のリソース不足である。英国の大学では学費値上げによる留学生の減少等により経営がひっ迫し、司書が減らされたり、退職者の分の補充がなかったりと、厳しい状況であった。目録担当者は特に減っている中、自館の図書館システムに加え、他のデータベースにも登録を行うことは、必要性は理解していても難しく、自動化等の対応が行われている。SISJACでは、WorldShareにはMARC21、NACSIS-CATはコーディングマニュアルに沿って登録するため、記述ルールを二種類覚えたり、一方は英語で他方には日本語で注記をしたりと、単純に二度登録するだけではない大変さもある。またWorldCatには、日本語がわかる人が利用するには抵抗を感じるほど、誤った日本語が含まれる書誌データが散見される。担当者は、どの大学の誰が作った書誌は信頼性が高いといったことを把握している。慶應を含む日本で作られたデータも登録されているが、海外でそれを利用するには多くの修正が必要となり「参考にはするが、自分で入力した方が早い」という意見もあった。ただし、担当者の不在等により専門性や知識の継承が難しくなれば「独自の書誌データは維持せず、WorldCatのデータをそのまま利用すればよい」という意見が、ますます強くなっていくように思われた。

目録を経験しない司書が増加する現状を改めて実感したが、英国等で司書の代表的なポジションであるサブジェクト・ライブラリアンの仕事においても、やはり目録の理解は必要に思われる。技術が向上し、検索できればよいという考えもあるが、書誌がどのように記述され、登録されているかわからなければ、検索できていないことに気が付くことができない。

利用者の求める資料を早く正確に探すには、どのデータベースをどのように検索するのがよいか実際にわかっていることはとても役に立つ。あるサブジェクト・ライブラリアンは「目録登録は自分の立場の人がする仕事ではないため、よくわからない」と言われた。一方、目録登録も行う別の司書は「目録は資料がわかる人の仕事だった」と言われた。慶應では目録担当を維持しており、筆者も実際に経験した中で、どのような本が刊行され、受入されているか、他の図書館でどのような資料を持っているのかといったことを学んだ。そこで得た知識は異動後にも役に立っており、図書館の仕事において非常に大切なものであると改めて感じている。また、この体制を続ける意義を改めて実感した。

c 英国、欧州の日本研究図書館における課題

欧州の日本研究図書館は、機関数も各機関の司書も多くないため、様々な協力や交流が行われている。JLGやEuropean Association of Japanese Resource Specialists等は、定例会議やイベントを開催する他、レファレンス質問への協力や、重複した本の寄贈、相互貸借など、参加館同士で日常的に情報共有と協力が行われている。そのため、担当者の入れ替わりが大きな課題となる。JLGの定例会議に参加した10機関のうち半数の司書は、日本研究以外も担当していた。入れ替わりで日本語がわからない方が着任した機関、東アジア担当者が日本人から韓国人に代った機関、前任者の退職後に補充のない機関もあった。その結果、日常的な協力体制が崩れてしまう、専門性の継承が途絶えてしまうといった問題が生じている。具体的には、これまで重複本を融通し合っていた機関で、寄贈を含む新規資料の積極的な受入が止まってしまうたり、相談が難しくなったりしているという。プレグジットにより関税が課せられ、英国と欧州の間での相互貸借が難しくなったという話もあった。また、機関内でのポジションの確保も課題の一つである。担当者や予算を確保するため、大学や所属機関向けのアピールが行われていた。

加えて、日本からの支援について韓国との比較から問題を指摘する声もある。韓国は、出版社から販売されている本でも申請すると購入して寄贈してくれたり、韓国文化を紹介するパネルを館内に設置するための資金を提供してくれたりするが、日本にこうした制度はなく、日本の資料を充実させるのが難

しいという。またNDLの図書館向けデジタル化資料送信サービスのためにデジタル化された資料が、実際的には利用できない問題も度々指摘された。このサービスは海外の図書館からの利用申請が可能ではあるが、制約が厳しく導入は困難であると多くの機関で言われた。デジタル化された資料は図書館間貸出の対象外となり、現状それらの資料を海外の人が利用する方法はない。JLGは、NDLと駐日英国大使に改善要望を伝えている。他にも、日本の研究書の価格が高いこと、郵便振替など対応が難しい方法でしか購入できない場合があること、図書館向け電子資料の販売が少ないことや、使いにくいことなどが日本語資料入手の課題としてあげられた。これらの問題の多くは今に始まったことではないが、状況を理解するところから始め、日本の図書館からも協力できることはないか、考えていきたい。

d 事例紹介

次に、訪問先の図書館の取り組みから、特に面白いと感じた事例を紹介する。

(a) イースト・アングリア大学図書館

2024年夏、入口のある「フロア0」の改修が行われた。書架をなくし、約80席が増設された広々とした空間には植物が配置され、昼食をとりながらオンラインで会話している学生もいて、賑やかだった。8時から18時は学生証の提示なく入館可能である。上層階には静かなエリアもあるが、UEAの図書館は、学生の居場所としてよく使われているようであった。10月に行われた改修後のオープニング式典では、学長が関係者に感謝の意を表し、来館者数の増加や学生からのポジティブなフィードバックについて報告された。英国国内での大学の評価に影響することもあり、学生からの良い評価を得るための取り組みが積極的になされ、実際に来館者数も増加していたが、一方で以前の方がよかったという学生の声も耳にした。利用者の多様なニーズに応えていく難しさを感じつつも、学生の意見に耳を傾け、その図書館に合うスタイルを模索された事例であると思う。

次にDigital UEAについて紹介する。新学期に行われるセミナーの一種で、一週間毎日、ワークショップと展示が行われた。司書と、データベースを提供する企業の担当者等により、OPACや各データベース、リーディング・リスト、AIの利用方法等のセッションがあり、事前予約不要で参加できる。「オー

ブンアクセスとはどういうものだと理解していますか」といった問いかけがあり、参加者がその場でスマートフォンやラップトップから回答した内容をスクリーンに表示する等、参加型のものも多かった。Digital UEAはその名前の通り、デジタルに特化してプログラムが組まれていた。OPACの使い方でも冊子の説明はほとんどなく、図書館サービスがデジタル化していることを強く感じた。

(b) ケンブリッジ大学アジア中東学部図書館

くつろげる空間を確保する、お茶の時間を作る、パズルや折り紙で息抜きしてもらう等、厳しい授業カリキュラムの中で学ぶ学生のメンタルケアを重視したサービスを、積極的に提供されていたことが大変興味深かった。

(c) シェフィールド大学West Bank Library

“Sheffield Authors Showcase”という優れた教員著作のコレクションに追加したい本をリクエストしてもらう取り組みが行われていた。訪問時には、“The University of Sheffield/Routledge Japanese Studies”という日本学科の教員著作が展示され、コレクションに追加したい本があれば、専用の棚に移すことでリクエストできるようになっていた。

(d) エジンバラ大学図書館

Royal Literary Fund⁸⁾で派遣されたフェローが図書館内に滞在し、アカデミックライティングのスキルを向上させるための、50分間の一对一のセッションを無料で受けることができるサービスが学生に人気を博していた。フェローは英国のプロの作家で、当時は3名が派遣されており、全員小説家であった。

(e) Bpi : Bibliothèque publique d'information

パリの研究図書館は敷居が高く、利用できる図書館に限られるという。そんな中、誰にでも開かれた図書館として多様なサービスが行われている。広い閲覧室ではピアノ等の楽器も利用でき、ゲームやマンガも充実している。障がい者サービス、移民向けの語学教室や様々な講座も行われている。そのため、学生を始め多くの人が訪れ、入館まで2時間待ちになることもあるそう。電子資料の提供についても積極的で、提供元に公共図書館向けのサービスとして必要な条件を伝えて新しいサービスを作る、他の公共図書館向けに電子資料の提供方法についてレクチャーする等の活動も行われていた。

(f) パリ日本文化会館図書館

会館で行われる日本文化関係のイベント、映画祭や展覧会に関連した資料の購入や展示を積極的に行っている。図書館利用者向けのサービスに加え、会館のイベントを企画する国際交流基金の職員に向けたサービスが行われている。図書館の存在意義を内外にアピールし続けることの大切さを強く意識した。

4 おわりに

研修を通じて得た知見や人とのつながりは、書籍等からは得られない価値あるものであった。漠然としていた日本研究のイメージが、具体的な研究者や資料として認識されるようになったこと、それを支える司書の仕事を実際に見て学ぶ機会を得たことは、貴重な経験となった。こうした経験から、図書館スタッフとしての役割を改めて見つめ直し、利用者と資料の理解を深めること、知識の継承を支えることの重要性を再認識した。メディアセンターが築いてきた良き歴史を途絶えさせることなく、今後もその発展に貢献していきたいと強く感じている。

英国生活の3か月間、異文化を目の当たりにし、業務に限らず学んだことは数知れない。ある日「アメリカが世界だと思っている？」と問われ、はっとした。歴史的にアメリカの図書館情報学と関わりのある慶應の図書館・情報学科で学び、米国で作られた規則に従い目録を作成してきた筆者は、米国の基準が図書館の基準だと考えていたかもしれない。書誌に“color”と記述したところ、英国では“colour”を用いると指摘されたこともある。日本にいる時とは違う解像度で世界を意識した瞬間であった。

また、歴史が大切にされていることとその重要性を日々実感した。英国では観光地だけでなくパブ等でも、Webサイトでour historyを紹介している。大切にするだけでなく常に歴史がアピールされており、特に魅せ方については英国に学ぶところが多いと感じた。そして、海外から慶應を見直すことで、その歴史を再認識する機会にもなった。例えば、他大学では貴重書として扱われるような和装本の一部が、本学では学生が書架で手に取って利用できる点は、海外の研究者にとって驚きであり、興味深い取り組みである。こうした特色を積極的に発信することで、海外からも慶應の魅力をより知ってもらえるよう努めたい。

最後に、訪問を受け入れ貴重な機会を与えてくださったSISJACの皆様、様々なことを教えてくださったとともに研修をコーディネートくださった司書の平野明さん、多くの質問に大変親切に答えていただいた訪問先の皆様、そして不在時の業務を引き受けて送り出してくださいましたメディアセンターの皆様に、心からの感謝を申し上げたい。

注・参考文献

- 1) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures. Conference: Looking Forward in Japanese Arts and Cultures.
<https://www.sainsbury-institute.org/events/conference-looking-forward-in-japanese-arts-and-cultures/>
- 2) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures. Third Thursday Lectures.
<https://www.sainsbury-institute.org/third-thursday-lectures/>
- 3) Ex Libris Group. List Management System : Leganto.
<https://exlibrisgroup.com/products/leganto-reading-list-management-system/>
- 4) The University of East Anglia. Collection Development Policy 2023-2025.
<https://assets.uea.ac.uk/f/185167/x/be2b3074e1/library-collection-development-policy.pdf>
- 5) OCLC. GreenGlass: Evidence-based decision support for libraries.
<https://www.oclc.org/en/greenglass.html>
- 6) OCLC. WorldShare: Enable shared efficiencies and innovation.
<https://www.oclc.org/en/worldshare.html>
- 7) Ex Libris Group. Library Management System : Alma.
<https://exlibrisgroup.com/products/alma-library-services-platform/>
- 8) The Royal Literary Fund. The Royal Literary Fund.
<https://www.rlf.org.uk/>

国立台湾図書館および台湾大学図書館における 目録業務について

はら なおみ
原 直実

(メディアセンター本部主任)

1 台湾訪問の経緯

2024年3月7日に締結された国立台湾図書館との
学術交流協定¹⁾に基づき、図書館業務の情報交換
を行うため、2025年3月3日～3月5日の3日間、
国立台湾図書館および台湾大学図書館を訪問する機
会を得た。

今回の訪問の目的の1つは、訪問先である2館の
目録業務の状況を知ることである。そのため、メデ
ィアセンター本部で目録業務を担当する筆者に声がか
かった次第である。

2 国立台湾図書館での目録業務

台湾には現在3つの国立図書館がある。国立台湾
図書館はそのうちの1つであり、日本統治期の台湾
総督府図書館が前身である。

国立台湾図書館で所蔵する資料の特徴として、歴
史的な経緯もあり、日本統治期に収集された資料を
含む日本語資料を10万冊以上所蔵していることが挙
げられる。現在はタイ語など東南アジア系言語資料も
重点的に収集している。また、台湾における台湾学研
究の中心であり、その関連の資料も多く所蔵している。

1年間で最も多く受け入れする図書は、当然なが
ら中国語資料であるが、現在でも日本語資料を毎年
1,000～2,000冊程度受け入れしており、英語資料と
同程度か、年によっては英語資料を超える受入数と
なる場合もあるとのことだった。

図書館システムはEx Libris社のAlephを使用して
いる。新規に書誌作成をする場合は、Z39.50を使用
して台湾の他大学やOCLC等の書誌ユーティリティ
の書誌データを検索し、該当の書誌を自館のAleph
にインポートした後に必要な修正を行うという、コ
ピーカタログングが主となっている。

日本語資料の書誌作成を行う際、Alephを通して
該当の書誌が見つからなかった場合には、国立国会
図書館のNDLサーチを検索し、見つかった書誌を

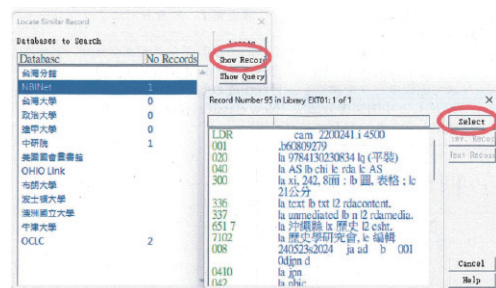


図1 Alephでの書誌インポート

参照して作成している。

書誌作成は目録を担当する職員が行うほか、年間
8,000～10,000冊を受け入れる中国語資料は、外部
委託をしているとのことだった。

目録規則は現在のところ、中国語や日本語資料は
中国編目規則(CCR)²⁾、その他の言語にはRDA³⁾を
適用している。中国語や日本語資料は、インポートし
た書誌がRDAに準拠した書誌であった場合には中国
編目規則に則った書誌に修正することが必要になる。

国立台湾図書館では著者名典拠コントロールを行っ
ており、Aleph内に典拠レコードを作成している。典
拠レコード作成には、台湾の国立書誌ユーティリティ
である全国図書書目资讯网(NBINet)⁴⁾の典拠ファ
イルや、アメリカ議会図書館のName Authority⁵⁾
を参考にしている。

2026年から全面的にRDAを適用する予定で、現
在は国立台湾図書館における適用細則や外部委託の
仕様書の改訂を進めているとのことだが、残念ながら
懇談終了の時間となったため詳しく話を伺うことは
できなかった。

3 台湾大学図書館での目録業務

台湾大学図書館の蔵書構成は、中国語40%、英語
40%、日本語13%、その他7%となっている。中国
語および英語資料が大半を占めるのではないかと予
想していたため、思った以上に日本語資料を所蔵し

ているという印象を受けた。2022～2024年の直近3年間も、日本語資料は全体の受入数の10～12%を占めていた（他は中国語50～60%、英語20～25%だったとのことである）。

目録規則は言語に関わらずRDAを適用し、書誌フォーマットはMARC21、目録言語は中国語を採用している。図書館システムはEx Libris社のAlmaを使用しており、OCLC等、外部書誌ユーティリティから書誌をインポートするコピーカタログリングも可能である。ただし、コピーカタログリングを行うか、または完全にオリジナルで書誌を作成するか、目録担当者個々の判断に任されており、統一した方法は定められていない様子だった。

台湾大学図書館でも著名典拠コントロールを行っており、中国系の人名は台湾典拠ファイル(TWNAF)、西洋人はアメリカ議会図書館のName Authorityを使用している。日本人や韓国人は独自で典拠レコードを作成している。

OCLCへの書誌・所蔵の登録については、一般書は所蔵登録のみ（ただし、OCLC上に該当の書誌が存在したものだけに限る）、学位論文と貴重書等スペシャルコレクションは書誌も新規に登録している。

	中国語資料	日本語・韓国語資料	その他
目録規則	RDA		
書誌フォーマット	MARC21		
目録言語	中国語		英語
ローマナイズ形	付与しない		—
人名典拠ファイル	Taiwan Name Authority File	自館作成	Library of Congress Name Authority File

図2 適用する規則等の一覧

4 2館の目録業務の現状について感じたこと

国立台湾図書館については、外部委託も併用しているところ、外部書誌ユーティリティ等を利用したコピーカタログリングが主流であるところが、早慶での目録業務^{6) 7)}と似ていると感じた。台湾大学図書館は、適用する目録規則、書誌フォーマットが早慶と同じものであり、OCLCへ書誌・所蔵を登録している点が共通していた。また、統一した処理フローがなく、担当者個人の裁量に任されているという部分は興味深かった。

中国語や日本語の資料については、2館とも書誌

にはピンインやローマ字を付与していないと伺った。筆者は、目録業務に携わるようになった当初、元々ローマン・アルファベットで書かれた資料以外はカナヨミまたはローマナイズ形を付与することが必須であると説明を受け、そういうものだとして認識していたが、よく考えてみれば元々は目録の排列のためにカナヨミやローマナイズ形が必要とされていたのであり、目録カードや冊子体目録を作成しない現状では、ヨミがなくとも資料の利用に差し支えることは少なくなっているのかもしれない。ただし、OCLCへ書誌を登録する場合はローマナイズ形が必須となるため、台湾大学図書館では書誌登録をする際に別途ローマナイズ形を付与しているとのことであった。

5 おわりに

早慶の目録業務では2022～2024年の直近3年間で毎年2,000冊前後の中国語資料を受け入れしている。中国語資料の目録業務はオリジナル書誌作成も含めてすべて外部委託しているが、書誌作成はともかく、典拠コントロールについては中国語がある程度理解できないと著者の同定が難しく、中国語資料の担当者に負担がかかってしまい、処理が滞ることも多い。

今回訪問した2館でのヒアリングを基に、早慶の目録業務において台湾の全国図書書目资讯网や台湾典拠ファイルの利用が可能か、可能である場合に業務の負担軽減が図れるかということを、今後検証していきたいと考えている。

今回の訪台は国立台湾図書館の皆さまに通訳を含め、大変お世話になった。また、お忙しい中、2館とも詳細な資料を作成くださり、口頭での説明を理解する助けとなった。3日間という短い期間だったが、密度の濃い時間を過ごすことができたことに感謝申し上げたい。

注

- 1) 木下和彦, 関口素子. 国立台湾図書館との学術交流協定. MediaNet. 2024, no. 31, p. 6-7.
- 2) Chinese Cataloging Rulesの略
- 3) Resource Description and Accessの略
- 4) <https://nbinet.ncl.edu.tw/>
- 5) <https://authorities.loc.gov/>
- 6) 河野江津子. 早慶目録共同運用の実現まで. MediaNet. 2020, no. 27, p. 14-18.
- 7) 原直実. 早慶目録ユニットの4年間. MediaNet. 2023, no. 30, p. 42-45.

メディアセンターの活動の記録＜2024年度＞

メディアセンター本部

1. 全体

- (1) 「早慶ライブラリーブックシェア」・「早慶ライブラリーパスポート」の開始
早稲田大学図書館との相互利用を強化し、「早慶ライブラリーブックシェア」（自校の図書検索システムから相手校の資料をリクエストして自校で借りることが出来るサービス）と「早慶ライブラリーパスポート」（自校の学生証・教職員証で相手校の図書館に入館できるサービス）を4月から開始した。
- (2) 海外への派遣研修
長期滞在型研修の実施においては、英国セインズベリー日本藝術研究所へ職員1名を9月から約3カ月間派遣した。相互の人材交流プログラムを持つ米国ワシントン大学図書館からは、12月に資料保存担当の図書館員2名が来学し、三田メディアセンターでの業務説明・図書館見学を行ったほか、全5日間の行程で国内の関連施設や保存・修復専門業者などを訪ね見聞した。また、2024年に学術交流協定を締結した国立台湾図書館へ、3月上旬に全3日の行程で職員3名を派遣し、図書館見学や業務に関する情報交換を行った。
- (3) 第13回メディアセンター研修会
2024年11月22日（金）に「どうするオープンサイエンス：2025年度義務化目前」をテーマとするスタッフ向け研修会を開催し、144名の参加があった。

2. リソースマネジメント関連

- (1) 学術論文のオープンアクセス推進への協力
慶應義塾の学術成果のオープンアクセス化を進めるため、論文掲載料の免除・割引を含めた電子ジャーナル契約である「転換契約」の締結を推し進めている。2024年度末時点で、転換契約を結んでいる出版社はElsevier, Wiley, Oxford University Press, Taylor & Francis等の6社に上る。また、2024年度の文部科学省による「オープンアクセス加速化事業」の補助金を得て、学術研究支援部との

協力の下、慶應義塾の学術成果のオープンアクセス化推進に寄与した。

- (2) 早慶和書電子化推進コンソーシアムの活動
和書の電子書籍拡大を目指して2022年に開始した同コンソーシアムについて、2024年度も4つの国内出版社との実証実験を継続した。活動の促進のために、6月に早稲田大学を会場に出版社向けの成果報告会、11月には早慶の両図書館にて岩波書店によるトークイベントを開催した。

3. システム関連

- (1) 事務用PC環境の標準化
業務のIT化を開始して以来、独自の環境で運用してきたメディアセンター職員のPC環境を、慶應義塾の事務標準環境へと移行した。

三田メディアセンター

1. 館内設備・工事

- (1) 記録的な集中豪雨のため、新館地下書庫を中心に漏水が発生した（8月21日）。閲覧席や床が水浸しになったうえ、資料の水損も確認された。これを受け、漏水したエリアに対策工事および止水工事を実施した。
- (2) その他の主だった設備更新・工事は以下の通り：
 - a 新館1階レファレンスルーム、ブラインドの更新（8月夏期一斉休業期間中）
 - b 新館2階東閲覧室椅子の更新（9月6日）
 - c 新館2階男子・3階女子・5階女子手洗いの洋式化（2月23日～3月7日）
 - d 新館5階研修室椅子の更新（3月25日）

2. 資料移動・移管

- (1) 慶應義塾関連映像および音声資料（オープンリール、VHS、カセットテープ）を福澤研究センターに移管した（4月30日）。
- (2) 書庫狭隘化対策のため、国内遺跡発掘調査報告書（請求記号EX@～）および遠山音楽文庫（請求記号TY/TYN@～）の再配置を実

施した（それぞれ6月21日、7月1日）。

- (3) 『時事新報』原紙（創刊号を除く）を、新館保存庫から外部書庫へ移動した（1月16日）。
- (4) 『花井家史料』（請求記号JH@8A@591）を研究室棟地下書庫から外部書庫へ移動した（3月7日）。

3. イベント

- (1) オープンキャンパスにて、来場者にメディアセンターを公開した（8月1～2日）。延べ2,000名を超える来館があり、1階展示室に足を運ぶ人も多く見られた。
- (2) 早慶和書電子化推進コンソーシアムの活動の一環として、岩波書店トークイベント『岩波文庫・岩波新書のつくりかた』を、慶應義塾図書館と早稲田大学中央図書館で開催した（それぞれ11月5日、29日）。本イベントでは岩波文庫編集長および岩波新書編集長にご登壇いただき、文庫や新書ができるまでの舞台裏についてご講演いただいた。慶應の回は新館1階イベントエリアで開催され、事前申込制により36名の参加者を集めた。また、イベントと同名の記念展示を1階ラウンジエリアにて実施した（10月28日～11月8日）。

4. その他

- (1) 三田メディアセンター利用規則を改正し、Webサイトに再掲載した（4月15日）。
- (2) 慶應義塾がかつて刊行していた『文學雑誌』のうち所蔵がない創刊号について、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センターより現物を借り受け、三田メディアセンターで電子化を実施した。完成したPDFファイルは1階データベースエリアの館内専用端末にて提供を開始した（5月13日）。
- (3) 『井筒俊彦文庫』のパノラマ画像を三田メディアセンターWebサイト上で公開した（12月5日）。この文庫は故・井筒俊彦名誉教授の旧蔵書で、もともと同氏の自宅内書庫で保管されていた。パノラマ画像では当時の書庫の様子が再現されている。
- (4) 電子化を進めていた『時事新報』（1882年3月～1920年12月分）について、1階データベースエリアの館内専用端末にて提供を開始した（12月）。

- (5) 2025年度中に開始を予定している「図書館資料PDF取り寄せサービス」に備え、SARLIB（図書館等公衆送信補償金管理協会）に「特定図書館」の届出をした（1月22日）。
- (6) 管財部、慶應学術事業会、警備室、保健管理センターの協力のもと、全スタッフを対象とした防災訓練を実施した（2月17日）。防災設備については動画を視聴するだけでなく、実際に設置場所に出向き、設備を実見した。AED講習や消火器体験も盛り込まれ、実践的な訓練となった。
- (7) 貴重書『論語疏卷第六』が国の重要文化財（書跡・典籍の部）に指定された（3月21日）。慶應義塾図書館所蔵資料としては、6件目の指定となる。

日吉メディアセンター

1. 施設・設備

- (1) 3階グループ学習室のOAフロア敷設とパーティション取り替えを行った（8月）。



図1 3階グループ学習室

- (2) 地下1階AVホールの扉を防音扉にした（8月）。
- (3) 正面玄関中央部分のスロープタイルを貼り換えた（8月）。
- (4) 3階北閲覧室西側の什器を入れ替えた。不要になった閲覧机は2階バルコニーへ移設し、バルコニー内の大型ソファの配置を変更した（8、9月）。

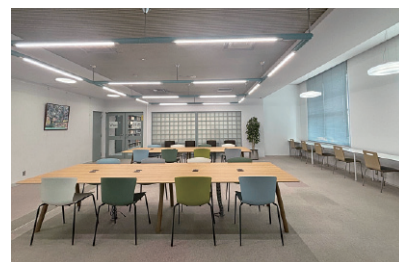


図2 3階北閲覧室西側

- (5) 北側（第4校舎側）外壁面の補修工事を行い、窓を遮光ガラスに交換した（9月）。
- (6) 1階AVコーナーのブースを6台撤去し「声出しブース」を4台新設した（10月）。



図3 声出しブース

- (7) 館内コピー機のコインベンダー4台のうち、利用の多い1, 3階設置の2台を新札対応ユニットに交換した（1月）。
- (8) マイクロリダープリンタを入れ替えた（3月）。
- (9) 1階コピー機カードリーダーを撤去した（3月）。
- (10) 2階東閲覧室OPAC端末を4階へ移設した（3月）。

2. 企画・広報・イベント

- (1) セルフオリエンテーションの開催
新入生を対象とした春は213名（4月1日～30日）、通信教育課程夏期スクーリング生を対象とした夏は125名（8月2日～17日）の参加があった。
- (2) オープンライブラリーの開催
慶應義塾大学の受験を考えている受験生を対象に実施し、夏（8月1日～31日）は595名、春（3月1日～22日）は132名の入館があった。
- (3) オープンキャンパス図書館見学
6月30日は1,286名、7月7日は1,621名の入館があった。
- (4) 図書館フレンズの活動
 - a 丸善丸の内本店で選書ツアーを実施し（5月）、選書した図書の展示を行った（7, 8月）。
 - b 協生環境推進室協力のもと、学外者も観覧可能な手話通訳付きビブリオバトルを開催した。学外観覧者は手話を必要とする方4名を含む計17名だった。その後、ビブリオ

バトルで紹介された図書と手話関連の図書を館内に展示した（7月）。

- (5) HAPPライブラリーコンサート
恒例の弦楽四重奏・ジャズ（5月）のほか、公募企画古楽トークコンサート（10月）、教員によるジャズ（11月）を開催した。

3. 利用者サービス

- (1) 日吉キャンパスの選択科目「アカデミックスキルズ」履修学生による学習相談の窓口を、春は4月17日～7月21日、秋は10月16日～1月31日の間、それぞれ平日の午後に開設した。
- (2) 理工学メディアセンターのラーニングサポート（大学院生）による出張相談を、学期末試験期の春3日間、秋2日間実施した。
- (3) 「English Academic Skills」（経済学部PEARLプログラムの1年生向け秋学期必修授業）に対しては、2024年度以降、対面セミナーは中止し英語の動画を作成し提供することとした。
- (4) 台風7号接近に伴い通信教育課程夏期スクーリング授業が休講になったことにあわせ、8月18日は日吉図書館・協生館図書室共に臨時休館とした。
- (5) 1月17日～24日、テスト期間中の閲覧席不足解消のため、AVホールを自習室として開放した。

4. 資料の移動

- (1) 地図を1階指定資料コーナー前から新聞・雑誌コーナー横へ移動した（4月）。
- (2) ギリシャ・ラテン語図書を4階東閲覧室から4階西閲覧室へ移動した（5月）。

5. 協生館図書室

- (1) 書架狭隘化のため、SDMとKMDの製本雑誌を一般書架から集密書架へ移動した（9月）。
- (2) 雑誌の配架順序をアルファベット順に統一し、和雑誌15タイトルの入れ替えを行った（2月）。
- (3) 閲覧室と事務室の蛍光灯をLEDへ交換した（2月）。

信濃町メディアセンター

1. 教育・学習支援

- (1) 看護医療学図書室との連携・協力
看護医療学図書室に設置したオンライン利用環境にて、利用者からの問い合わせに応じて湘南藤沢メディアセンターと信濃町メディアセンターそれぞれのレファレンス担当によるサポートを開始した（6月）。

2. 館内リニューアルプロジェクト

- (1) 工事・什器関連
1階マナビバエリア・ゲート正面エリアに新什器を設置した。予約可能なグループ学習スペース「マナビバブース」や、1人でも複数人でも使いやすいワークテーブルを多数設置した。カフェのような落ち着いた学習空間「マナビバラウンジ」を設置し、入退館ゲート前の新着資料棚と記入カウンターを更新し、OPACを移設した。入退館ゲート前には、サイネージとして大型ディスプレイと、新着の図書や雑誌を集約した書架を設置した（8月）。マナビバラウンジにソファ席を12席設置し、くつろぎエリアに書架を設置した（3月）。
- (2) 資料関連
1階くつろぎエリアの配架雑誌を書庫1階新着雑誌の棚へ組み込み（7月）、入退館ゲート正面の新着棚で、一部の新着雑誌の展示を開始し、研究の遂行・論文執筆に関する書籍などを集めた「研究支援コーナー」を新設した（8月）。くつろぎエリアに「教員著作コーナー」を設置し、医学部新聞「読むべき3冊」記事の紹介パネル展示を開始した（3月）。
- (3) 館内飲食ポリシー
「マナビバ」「くつろぎ」エリア限定で、「蓋つきの容器に入った飲み物」および「臭いが出ず、手が汚れない菓子類」の持込・飲食を可とするルールを試行運用を開始した（8月）。

3. 医療活動支援

- (1) 関連病院図書担当者連絡会開催
オンラインで開催し、12機関が参加した。例年行っている関連病院コンソーシアム契約状況報告および信濃町メディアセンター活動報告のほか、参加者より病院図書室の事例報告

があった。懇談の時間では活発な情報共有や意見交換が行われた。オプション企画として患者図書室の選書に関するワークショップを開催した（2月）。

- (2) KOMPASサイトリニューアル
大学病院Webサイトと合わせてリニューアルした（3月）。スマートフォン対応、操作性や視認性の改善に加え、大学病院Webサイトと同時にリニューアルを行ったことで一体感のあるデザインとなった。
- (3) 健康情報ひろば
教員著作コーナーを創設した（4月）。学内教員による、健康医療分野の選書情報を共有する科研費研究プロジェクト「Web協働選書」に参加した（7月）。新たに2名のボランティアスタッフを受け入れた（9月、1月）。外来師長室によるボランティアスタッフ向け手指衛生講習会が開催された（10月、11月）。「ボランティア感謝の集い」では8名のボランティアスタッフが出席した。（12月）。

4. 資料関連

- (1) 山中資料センター配架資料の除籍準備作業
山中資料センター配架の信濃町メディアセンター所蔵資料のうち、信濃町メディアセンター内配架資料と重複している図書（約6,503件）の確認・選別作業が終了した（3月）。
- (2) 大鳥文庫の簡易帙作成作業
状態のよくない資料（100冊程度）を山中資料センターから取り寄せ、簡易帙を作成して戻す作業を開始した（7月）。

5. 施設・設備

- (1) 1階壁面塗装・カーペット張り替え
1階マナビバ、くつろぎエリアの壁面塗装およびカーペットを張り替えた（4月～5月）。
- (2) 複合機・コピー機等の入替・撤去
事務用複合機1台・コピー機2台・FAX1台を入れ替え、利用者用コピー機2台を撤去した（3月）。

6. その他

- (1) 防災訓練の実施
災害・非常時対応マニュアルに基づき火災・地震時の対応を確認した。避難経路や消火設

備の位置・取扱方法を確認し、震度6の地震発生を想定した実地訓練を行った(8月)。

- (2) CRIK 信濃町書棚ディスプレイへの協力
管財課環境担当からの要請により、CRIK 信濃町開所式に向けて、書棚3か所のディスプレイ作業を行った。除籍予定のIndex Medicus、仮受資料、寄贈、重複交換用の雑誌や図書を配架することで対応した(5月)。
- (3) 医学教育認証評価への協力・実地調査対応
日本医学教育評価機構(JACME)の評価員の拠点が北里講堂となり、必要に応じて信濃町メディアセンターの会議室等の施設を提供した。館内の実地調査視察にも対応した(10月)。

理工学メディアセンター

1. 施設・設備の改修・変更

- (1) メディアセンターに設置されているウォーターサーバー2台を、矢上キャンパス内のウォーターサーバー増設を進めている管財課の管理下に組み入れた。
- (2) 本館1階および2階照明のLED化工事を行った(8月9日~18日)。
- (3) IDEC社入退館ゲートの改修を行い(9月5日)、早稲田大学所属者も正規生・専任教職員はICカードで、名誉教授はバーコードで入退館が可能になった(10月~)。
- (4) 本館1階荷解き室の換気対策として、除湿器設置工事を行った(11月16日)。
- (5) 創想館地下の和式トイレを撤去し、洋式トイレを設置した。またこれに伴い配管改修を行った(11月17日~24日)。
- (6) 本館1階KICプリンターのコインキャッシャーを交換し、新1,000円札にも対応できるようにした(11月22日)。
- (7) 博士課程教育リーディングプログラム終了に伴いメディアセンター施設となった本館3階の改修を順次進め、2025年4月のオープンに向けて、2024年度内に工事を完了した(2月~3月)。

2. 企画・広報・イベント

- (1) 2024年度ノベルティグッズとしてモバイルスタンド&クリーナーを作成した。プレゼンバ

トルへの参加や、オープンライブラリーのスタンプラリープレゼントとして学生や来館者に配付した。

- (2) 選書ツアーを紀伊國屋書店新宿本店で行った(9月4日)。POPとツアーの様子の展示パネルを作成し、選定により新規購入した資料162冊の展示を開催した(2024年12月6日~2025年2月28日)。
- (3) 第4回プレゼンバトルを開催し(12月)、プレゼンター・観戦者ともに理工学部生のみならず他キャンパスからの参加を多く得た。教員が講師となるサイエンスカフェは、2024年度内に2回開催し、会場の臨場感を届けられるよう、配信も実施した。秋のサイエンスカフェでは、コロナ禍以降導入していた事前申込制について、会場参加では不要としたが、従来と同程度の参加者数を確保することができた。

3. 利用者サポート・セミナー

- (1) 大学院生スタッフによる学部生への学習支援(ラーニングサポート)を対面・オンラインの両方で提供した。春と秋の定期試験期間には、日吉メディアセンターでの出張相談を実施した。出張相談、通常時の対面・オンラインでの相談ともに例年を上回る件数の相談が寄せられた。
- (2) 文献探索セミナーを対面・オンラインの両方で実施した。オンラインの件数は全体の3分の1となった。外部講師によるセミナーは、キャンパスの垣根を越えて学生が受講できるよう、2023年度に引き続きオンラインで実施をした。文献探索セミナー、外部講師によるセミナーともにWebサイトで録画を公開した。
- (3) 文学部図書館・情報学専攻の実習生1名を受入れた(8月19日~30日)。

4. 資料購入関係

- (1) 一般財団法人慶応工学会より学術振興事業の一環として、学生用図書購入のための寄付金15万円をいただいた(9月6日)。
- (2) 化学系のデータベースやプレプリントサーバー会費の支払いを理工学部間接経費で行った。

5. その他

- (1) 機関リポジトリ「ΣStar」のサーバーリプレー

スを行い、リニューアル版を公開した（10月24日～28日）。

湘南藤沢メディアセンター

1. 施設関連

- (1) 静かエリアと地下施設を除いた全閲覧席でのオンライン授業の声なし受講に加えて、1階ラウンジ、2階MMLS、2階と3階のグループ学習室での声出し受講を可能とした（5月）。
- (2) 1階インフォメーションカウンターにシャッターの取り付けおよび修繕工事を行った（8月）。
- (3) 2階MMLSのピクチャーレールを取り外し、書架を新設した（11月）。
- (4) 地下施設の空調工事を行った（12月～1月）。
- (5) AVカウンターに断熱ハニカムスクリーンを設置した（1月）。
- (6) 1階および2階のレイアウト変更を行った（2月）。
 - a 1階モニタールームを2階イベントスペースへ移動した。
 - b 2階レファレンス、データベースコンサルタント、ライティング&リサーチコンサルタントデスクを1階旧モニタールームに移動し、CNS相談デスクを含めて「コンサルティングルーム」へと名称を変更した。
 - c 2階旧レファレンス、データベースコンサルタント、ライティング&リサーチコンサルタントデスクの跡地に読み捨て雑誌や椅子を設置し、「くつろぎスペース」とした。
- (7) 1階オープンエリアに車いす用昇降デスクを設置した（2月）。
- (8) 卓上吸音テレワークブースを1階ラウンジおよび2階MMLSに設置した（2月）。

2. ライブラリーサービス関連

- (1) サービス
 - a 政策・メディア研究科および健康マネジメント研究科の修士論文について、2024年度以降提出分の印刷を中止し、「SFC学位論文リスト」でPDFのみ公開する方針を決定した（6月）。
 - b 配布用の利用案内を名刺サイズのカード形式に変更した（8月）。
 - c 閉館時間を正式に23時から22時へ変更した。

それに伴い、利用規則等を改正した（10月）。

(2) イベント

- a 新入生向け館内謎解きイベント「レイのブログ」を開催した（4月～5月）。
 - b 湘南藤沢高等部の国語授業の一貫として、高校2年生へメディアセンターの説明と見学入館対応を行った（9月）。
 - c 1階オープンエリアで教員持ち込みイベント「公務員座談会」を実施した（10月）。
 - d SFC万学博覧会の開催にあたり、メディアセンターでは館内見学に加え、体験型謎解きイベント「カモからの挑戦状」および3Dプリンターの体験会を開催した（11月）。
 - e 元常任理事・元総合政策学部長の阿川尚之先生の逝去に伴い、追悼小展示を行った（11月）。
 - f 和田研究会学生プロジェクト「ウォームシェア」施策に対し、ポスター貼付、QRコードでの生協ポイント連携の面で協力した（12月）。
 - g 2階MMLSにてSFC Reviewの編集部が最新号「外国語の海外研修」の展示を行った（12月）。
 - h 藤沢市民図書館とおおよそ10年ぶりに懇談し、実施要領改定を含む情報交換を行った（1月）。
 - i 高校生、受験生を対象に図書館を開放するオープンライブラリーを行った（3月）。
- ### (3) 資料移動
- a 大型本スペース確保のためレファレンスブック書架を移動した（3月）。
- ### (4) 学生コンサルタントの活動
- a データベースコンサルタントがプレゼンテーションバトルを開催した（7月）。
 - b メディアセンターフレンズが企画展示8件を行った。

3. マルチメディアサービス関連

(1) サービス関連

- a 短縮開館中土曜日のAVカウンター、FABスペースのサービスを中止した。
- b 館内散歩（360°カメラ画像）を公開した（10月）。
- c 2025年度学部新入生へのCNSメールアカウントの配付廃止に伴い、地下施設予約シ

システムの改修を行った（2月）。

(2) AV機材のリブレース

- a 3DプリンターMaterialStation×4台と
BambuLab P1S×3台を追加導入した（4月）。

4. 看護医療学図書室関連

(1) ライブラリーサービス関連

- a 利用相談Zoom用PCをカウンターに設置、
サービスを開始した（6月）。
- b 看護医療従事者向けの利用案内を改定した
（7月）。
- c 看護学教育評価実地調査を受審した(10月)。

(2) 企画展示

- ・「大学生生活スタートBOOK」（4月～5月）。
- ・「『今日の看護医療』ゲストスピーカー関連資
料」（6月～7月）。

薬学メディアセンター

1. 利用者サービス

(1) 学生インタビュー実施

「ご意見聞かせてキャンペーン」として、学生
図書委員や図書館をよく利用する学生にイン
タビューを実施した。18人の学部学生・大学
院生からそれぞれ20～30分かけて、来館の頻
度やタイミング、電子ブックの利用、図書館
への要望などに関する質問に答えてもらい、
今後の運営の参考になる率直な意見を収集す
ることができた。

(2) ブラウジングコーナーのリニューアル

軽読書・雑誌資料を増やし、座席をリニュー
アルすることで、学生がより気軽に立ち寄り
やすく、リラックスできるスペースづくりを
目指した。

(3) 電子ジャーナル利用促進

学術雑誌の書架において、電子ジャーナルが
利用できるタイトルに、それぞれのKOSMOS
画面にリンクするQRコードを掲示し、電子
版の利用促進を図った。

2. 資料関連

(1) ブラウジングコーナー資料の充実化

既存の旅行ガイド等に加え、あらたにNewton

別冊や自己啓発本などを購入し、学生が気軽
に読める図書を増やした。

(2) 資料の除籍

カビ対策としての書架の換気改善と、新規購
入図書が埋没しない書架づくりを目的として、
2000年までに受け入れた図書のうち現在の選
書基準に合わない資料や重複資料などを除籍
した。

3. 施設・設備

(1) ブラウジングコーナーにハイカウンター席を
5席設置（3月）。

(2) デジタルサイネージ導入（3月）

利用案内やイベント広報用として館内にデジ
タルサイネージを導入した。芝共立キャンパ
スの他部署のイベント告知等にも活用しても
らうこととした。また、雑音のマスキング効
果を目的として、BGMを試験的に導入した
（3月）。

(3) 資料および什器の清掃（2～3月）

館内に繰り返し発生するカビの除去作業を業
者に依頼し、図書や書架、閲覧席の吸引・清拭・
薬剤噴霧などを実施した。今後1年間、付着
カビ数の定点検査を実施し、経過観察するこ
ととした。

(4) 4階書庫電動集密書架の電装機器更新工事
（10月）

日・EU フレンドシップウィーク展示 EUj

近代
オリンピック
の歩み
～ EU 諸国とのかかわり～

会場：三田メディアセンター
新館1階ラウンジ

企画：慶應義塾大学 EU情報センター
問い合わせ先：慶應義塾大学 三田メディアセンター レッスンズ担当
TEL 03-3427-1056 / E-mail: mmc-ret-group@keio.jp

2024
3/15
(日)

2024
6/1
(土)

タイムに準じて
EUグッズを
GET!



新訳で読む古典

5月24日～6月10日
 湘南藤沢メディアセンター1階
 オープンエリア

内容物の美の神、イオンシシ (Klironomei) でも
 知らぬふりとなりし上 (KlironomeiからKlironomeiへ)
 このことに関して、そのなかから知識とされるもの一冊を紹介します。

協力：株式会社イオンシシ、株式会社イオンシシ
 湘南藤沢メディアセンター1階 オープンエリア

図書館展示

いつでも！どこでも！
慶應生が使える電子ブック














場所：日吉図書館 1 階展示コーナー

期間：2024年6月3日(月)～7月31日(水)

日吉メディアアクトンター

日吉図書館

メディアセンター・フレンズ企画

新書を持って まちに出よう

期間 2024年6月11日・2024年6月25日
場所 湘南鄙代メディアセンター1階・ファンエリア

コラボ企画開催中!

日吉メディアセンターで活動する図書館フレンズ、湘南藤沢メディアセンターで活動するメディアセンターフレンズがコラボそれぞれのオススメの本を相手館で紹介しています!
 COSMOSの取寄せ機能を使って
 他館の資料をぜひ読んでみてください!



図書館フレンズ

×

メディアセンターフレンズ

湘南藤沢メディアセンター



メディアセンター

6/17(月)

7/15(月)

@1階ラウンジ

× Instagram

日吉メディアセンター
 6/17(月)

7/15(月)

@雑誌コーナー横階段
 X Instagram







① バスルのQRコードを読み取る

② キーワードを入れて検索し
所蔵情報のリンクをクリック

③ 図書館検索/予約をクリック

④ 受取場所を指定し「リクエストを送信」

completed!

COSMOS取寄せ機能

映画で知ろう
～〇〇ってここが面白い～



メディアセンターフレンズ企画
展示期間：6月26日～7月15日
展示場所：湘南藤沢メディアセンター
1F オープンエリア
協力：総合政策学部教授 園枝 弘弘



知的書評合戦 ビブリオバトル

ビブリオバトルとは？

テーマに沿った本の紹介コミュニケーションゲーム「バトル」がオススメの1冊を5分間で紹介します。

読書が最も楽しみたと思った本に投票して優勝者（チャンピオン）を決定する。知的書評バトルです！

観覧自由

（学外の方の要申込・日本語の通訳あり）
 会場に「ここに座してください」「話さないでください」の紙が貼ってあり、観覧の方にはバトルの進行がわかりやすいです。

このバトルの勝敗を定めるのは、観戦者の皆さんです。
 本題・読評の書評競技バトルのルール公式サイト
<http://www.bibliobattle.jp/>

アツい1冊

開催概要

開催日時：2024年7月4日(木) 18:00~
 会場：産業政策大 学 日吉図書館南ラウンジ
 参加費：0円（参加費は参加者自身で支払います。会場費・お茶代はなし。）
 日本語手話での観戦もできます。観戦にご不便のある方は、ぜひご告知ください。

主催：産業政策大 学 日吉図書館南ラウンジ 図書館ボランティア 読書推進員 協力：日吉図書館 読書推進員



63

第24回
理工学メディアセンター
サイエンスカフェ

2024
7.5 (金)
18:15-19:30

会場：理工学メディアセンター
創想館1階学習エリア

生命を「創る視点」で眺めてみる



生命情報学科
藤原 慶 先生

生物学は物理学だ、と言われる
ことがあります。物理学で生物の
メカニズムを解明することは、
根本的に異なるものでも見えて
来ません。ほんとは生物学的な
メカニズムを解明することは、
物理学で解明することとは異な
る。よく考えれば、生物のメカ
ニズムは、物理学で解明すること
とは異なるといえる。生物のメ
カニズムを解明することとは異
なるといえる。生物のメカニズム
を解明することとは異なるとい
える。生物のメカニズムを解明
することとは異なるといえる。

◆対象：学生・教職員
☆1・2年生、専門外の方も大歓迎！

◆参加方法 ※事前申込制
以下のどちらかを選択してください

- ・会場参加（定員50名程度）【お菓子・飲み物付】
- ・オンラインによる参加

【お問い合わせ】理工学メディアセンター
rnc-info-group@keio.jp

【理工学】7/5（イベント）

第364回 企画展示

Now and Then
貨幣から見えてくる時代

～新紙幣発行記念～

7/8(月)～9/21(土)

前期：7/8(月)～8/6(火)
後期：8/20(火)～9/21(土)

会場：慶應義塾図書館 1階展示室
＜三田キャンパス＞
平日：9:00-18:30
土曜：9:00-16:30
休館：日曜・祝日（例：7/15）
8/7(水)～8/19(月)

主催：三田メディアセンター展示委員会

【三田】7/8-9/21（展示）

第2回 プレゼンテーションバトル

～好きなコト～



2024.7.12 木 18:10 - 20:00

@SFCメディアセンター1階

◆対象：学生・教職員
☆1・2年生、専門外の方も大歓迎！

◆参加方法 ※事前申込制
以下のどちらかを選択してください

- ・会場参加（定員50名程度）【お菓子・飲み物付】
- ・オンラインによる参加

【お問い合わせ】理工学メディアセンター
rnc-info-group@keio.jp

【湘南藤沢】7/12（イベント）

KEIO UNIVERSITY OPEN LIBRARY

読者の皆さんへ 慶應義塾大学の図書館へ来てみませんか

日吉 8/1(木)・8/3(土)
理工学 8/1(木)・8/3(土)
湘南藤沢 8/1(木)・8/3(土)

慶應義塾大学
メディアセンター(図書館)
3館同時 夏のオープンライブラリー開催

【日吉・理工学・湘南藤沢】8/1-31
（イベント）

Hello! New Library

信濃町メディアセンターリニュアル記念イベント

MEDIA CENTER

メディアツアー×カフェ
TOUR×CAFE

9/25(日) - 26(月)
12:00 - 17:00

館内セルフガイドツアー 2日間限定！コーヒーサービス

お気に入りの学びスペースを発見しよう！
新しくなった信濃町メディアセンターの
館内を走るセルフガイドツアーを実施。

お申し込み先：信濃町メディアセンター
Web: <https://www.lib.keio.ac.jp/mc/>
Mail: rnc-info@lib.keio.ac.jp

【信濃町】9/25-26（イベント）

10/4(Fri)～11/30(Sat)

場所：日吉図書館1階

読者の皆さんへ 慶應義塾大学の図書館へ来てみませんか

日本と世界の文学賞
～受賞作品を味わおう！

芥川龍之介賞 / 直木三十五賞
泉鏡花文学賞 / 川端康成文学賞 / 谷崎潤一郎賞 / 野間文芸賞 / 三島由紀夫賞 /
読売文学賞 / 柴田錬三郎賞 / 山田風太郎賞 / 山本周五郎賞 / 中央公論文芸賞
ノーベル文学賞
ゴンクーム賞 / 全米図書賞 / ブッカー賞 / 国際ブッカー賞 / ビュッジャー賞

【日吉】10/4-11/30（展示）

第25回
理工学メディアセンター
サイエンスカフェ

生き物の運動時の力を
計測するセンサ

機械工学科
高橋 英俊 先生

2024年
10月17日 木
18:15 - 19:30

会場：理工学メディアセンター
創想館1階学習エリア

◆対象：学生・教職員
1・2年生、専門外の方も大歓迎！

◆参加方法 ※事前申込制
お菓子・飲み物付き！
・会場参加（申込不要）
・オンラインによる参加（事前申込）

【お問い合わせ】理工学メディアセンター
rnc-info@stud.keio.ac.jp

【理工学】10/17（イベント）

第365回展示 慶應義塾図書館貴重書展示会タイジエースト

中世 日本人の読書

古代・中世の日本では、
読書の対象となるのは
主として中国伝来の書物
「漢籍」だった。
日本人はこの漢籍を書物で
どのように学習し、
また、どのように活用したのか。
古代から中世にわたる読書の様相を
慶應義塾図書館の蔵書でたどる。

2024年10月21日(月)・12月21日(土) 9:00-18:30・土曜9:00-16:30
休館日：11月1日(日)・11月20日(日)

■三田メディアセンター展示室
慶應義塾図書館 1階 展示室

【三田】10/21-12/21（展示）

日吉メディアセンター 図書館フレンズ企画

どこ
積ん読 しちゃって
良いんじゃない？

図書館フレンズ・読者も積ん読しましょ

図書館フレンズ・日吉図書館読者のみなさんが
「積ん読した本をご紹介！」
有名な小説も意外と読めてるかも？

展示期間 10/21(月)～11/25(月)
※日吉図書館新館 読書コーナー 隣接図書室
その他企画もご用意！楽しんでください！

本好きだって積ん読する。
読書の秋は本に埋もれよう。

積ん読とは？
借りた・買った本を
読まずに放置していること。

各種SNSにて
図書館フレンズの
活動を紹介！

【日吉】10/21-11/25（展示）

早慶和書電子化推進コンソーシアム
岩波書店トークイベント

岩波文庫・
岩波新書の
つくりかた

2024/11/5 TUE
17:30-19:00
慶應義塾図書館
(三田メディアセンター)

2024/11/29 FRI
17:30-19:00
早稲田大学 中央図書館

登壇者 吉川 哲士氏 岩波文庫 編集長
中山 永基氏 岩波新書 編集長

申込 早慶の学生・教職員限定
早慶どちらの会場でも参加可
参加費無料・要事前申し込み 詳細・申込はこちら

主催：早稲田大学図書館・慶應義塾大学メディアセンター

【三田】11/5（イベント）

岩波書店トークイベント

000 の棚から

読者満足度メディアセンター一、日本十傑分館
(NO.1)に選出された書籍を展示しています。
この展示会場では、岩波書店の「000」の
棚と並ぶ本から、お好きな本にたどり着くよ
うな本棚を展示します。

開催期間 2024年11月6日～18日
開催場所 湘南藤沢メディアセンター 1階オープンエリア
お問い合わせ 湘南藤沢メディアセンター 046-254-1111

【湘南藤沢】11/6-18（展示）

学習相談展示

相談員が教えます！
勉強Tipsあれこれ

12/2(月)～1/25(土)
日吉図書館1階展示コーナーほか

● 自分を知る前にやっておきたいこと（診断）／読者学生へ
先生は行く前にやるべきことはこれ！

● 午後・学習進捗で太極拳こと

● レポート書く前にこれ読んで！

● 調べるとき、何を調べて調べよう？
→相談員おすすめデータベース・検索ツール

● 大変だったレポート課題、どう乗り切った？

● 読書の勉強法、教えてください！

● 一発勝負の試験の準備、いつから何をする？

● プレゼン課題 どう乗り切った？

● 長期休暇中にやっておきたいこと、やればよかったこと

Follow us

Instagram Twitter YouTube

お問い合わせ 日吉図書館 046-254-1111

【日吉】12/2-1/25（展示）

プレゼンバトル
The 4th

プレゼンター
大募集!!

輝きは君の主張のなかに...

エントリー締切
2024年10月11日(金)

詳細・お申込みは
こちら

優勝賞金は総額100,000円を頂戴！
その他、両校員が参加費あり！

第4回プレゼンバトル開催
11月10日(土) 18:00-20:00
会場：早稲田大学中央図書館
入場無料・要事前申し込み

主催：早稲田大学図書館・慶應義塾大学メディアセンター

【理工学】12/3（イベント）

絵本の世界へ
懐かしさと新しい発見を楽しむ

メディアセンターフレンズ企画

展示期間
12月16日～12月23日

展示場所
湘南藤沢メディアセンター
1F オープンエリア

お問い合わせ先
湘南藤沢メディアセンター mc-scf-friends@adst.keio.ac.jp

【湘南藤沢】12/16-23（展示）

あなたの借りた本が展示されるかも

@湘南藤沢メディアセンター
「帰着」図書より

帰着図書とは？
返却された本が、書架に返されるまで、
一時的にブックトラックに預けられる。 (仮称)

ブックトラックは
ここ！

開催期間
2025年1月8日～24日
開催場所
湘南藤沢メディアセンター
1階オープンエリア
お問い合わせ 湘南藤沢メディアセンターフレンズ
mc-scf-friends@adst.keio.ac.jp

【湘南藤沢】1/8-24（展示）

歌麿/写楽/北斎
～鳥屋重三郎と浮世絵師たち～

場所：日吉図書館 1階展示コーナー
期間：1月8日(水)～3月1日(土) [休館日を除く]

【日吉】1/8-3/1（展示）

第36回 企画展示
議席を
与へよ
～青蓮ボスター
でみる近代
2025年1月14日(火)～2月8日(土)
慶應義塾図書館 1階展示室
三田キャンパス
平日：9:00-18:00 土曜：9:00-16:50
休室：日曜・祝日

【三田】1/14-2/8（展示）

メディアセンター展示一覧＜2024年度＞

三田メディアセンター

展示期間	回数	タイトル	開催場所
3月15日～6月1日	—	近代オリンピックの歩み：EU諸国とのかかわり (日・EUフレンドシップウィーク企画イベント、パネル展示)	ラウンジ
4月15日～5月9日 (前期) 5月11日～6月15日 (後期)	363	Japan in Books ～蔵書のなかの「日本」～	展示室
7月8日～8月6日 (前期) 8月20日～9月21日 (後期)	364	Now and Then 貨幣から見えてくる時代 ～新紙幣発行記念～	展示室
10月21日～11月19日 (前期) 11月25日～12月21日 (後期)	365	古代中世 日本人の読書 —慶應義塾図書館貴重書展示会ダイジェスト—	展示室
2025年1月14日～2月8日	366	議席を與へよ ～普選ポスターでみる近代	展示室

日吉メディアセンター

展示期間	タイトル
3月27日～5月31日	新入生歓迎展示：ようこそ！ 慶應義塾大学日吉図書館へ 2024
5月2日～6月14日	留学フェア（国際センター主催）関連ミニ展示
5月20日～6月15日	図書館フレンズ企画：メンバー紹介展示
5月28日～7月26日	学習相談mini展示：学習相談って何？ 相談員はどんな人たち？ 2024
5月24日～6月27日	庄内セミナー（教養研究センター主催）関連展示
6月3日～7月31日	いつでも！ どこでも！ 慶應生が使える電子ブック
6月17日～7月14日	図書館フレンズ企画：図書館フレンズ×メディアセンターフレンズ (湘南藤沢メディアセンターのメディアセンターフレンズとのコラボレーション企画)
6月17日～8月17日	パレスチナを知るブックフェア（福田桃子先生持ち込み企画）
7月16日～8月17日	図書館フレンズ企画：選書ツアー展示2024
8月2日～9月30日	夏期スクーリング生歓迎展示：ようこそ日吉キャンパスへ 2024
10月4日～11月30日	日吉公開講座（教養研究センター主催）関連ミニ展示
10月4日～11月30日	日本と世界の文学賞 ～受賞作品を味わおう！
10月21日～11月25日	図書館フレンズ企画：積ん読しちゃって良いんじゃない？
11月26日～2025年1月31日	キャンパス文学さんぽ：あの作品、あの作家の聖地を「ふたたび」歩く
12月13日～12月25日	図書館フレンズ企画：本の福袋2024
12月13日～2025年1月25日	学習相談展示：相談員が教えます！ 勉強 Tips あれこれ
2025年1月8日～3月1日	歌麿/写楽/北斎 ～葛屋重三郎と浮世絵師たち～

理工学メディアセンター

展示期間	タイトル
4月1日～5月31日	理工学部教員の『私の一冊』
7月17日～9月17日	矢上での生活（オープンライブラリー連動企画）
9月18日～10月31日	第25回開催記念特別展示：ポスターと写真で振り返るサイエンスカフェのあゆみ
12月6日～2025年2月28日	選書ツアー2024：162冊が仲間入り

湘南藤沢メディアセンター

展示期間	タイトル
4月1日～5月10日	大学生活スタートBOOKS（看護医療学図書室）
5月24日～6月10日	新訳で読む古典（メディアセンターフレンズによる企画展示）
6月11日～6月25日	新書を持ってまちに出よう（メディアセンターフレンズによる企画展示）
6月11日～7月31日	「今日の看護医療」ゲストスピーカー関連資料（看護医療学図書室）
6月17日～7月15日	図書館フレンズ×メディアセンターフレンズ （日吉メディアセンターの図書館フレンズとのコラボレーション企画）
6月26日～7月15日	映画で知ろう ～〇〇ってここが面白い～ （メディアセンターフレンズによる企画展示）
11月6日～11月18日	000の棚から（メディアセンターフレンズによる企画展示）
11月29日～12月11日	新訳で読む古典 II（メディアセンターフレンズによる企画展示）
12月2日～12月21日	阿川尚之先生追悼展示
12月16日～12月23日	絵本の世界へ：懐かしさと新しい発見を楽しむ （メディアセンターフレンズによる企画展示）
2025年1月8日～1月24日	@湘南藤沢メディアセンター「帰着」図書より （メディアセンターフレンズによる企画展示）

メディアセンター所蔵資料の展覧会貸出・掲載・放映＜2024年度＞

展 覧 会 貸 出

展覧会名・会場・会期	資料名（請求記号）	貸出先・主催など	所蔵館
テルマエ展：お風呂でつながる古代ローマと日本 （パナソニック汐留美術館・2024年4月6日～6月9日）	賢愚滌銭湯新話（下）（225@61@3@3）	パナソニック汐留美術館	三田メディアセンター
開館5周年企画展「めでたきとり」 （刈谷市歴史博物館・2024年4月27日～6月9日）	唐蘭船持渡鳥獣之図「鳥之圖：地」（132X@166@5-3） 「鳥之圖：天」（132X@166@5-4） 鶴庖丁譜類聚（242@1@10@10 魚菜文庫1265） 鶴包丁譜（242@1430@1 魚菜文庫910）	刈谷市歴史博物館	三田メディアセンター
内藤コレクション：写本一いとも優雅なる中世の小宇宙 （国立西洋美術館・2024年6月11日～8月25日）	詩篇唱集（170X@9@17）ほか 中世写本零葉 全6点	国立西洋美術館	三田メディアセンター
特別展「北斎 グレートウェブ・インパクト ―神奈川沖浪裏の誕生と軌跡―」 （すみだ北斎美術館・前期：2024年6月18日～7月21日）	絵本「柳の糸」（200X@C6@1 高橋誠一郎浮世絵コレクション） 源義経平知盛霊逢図（201X@350 ポン浮世絵コレクション）	すみだ北斎美術館	三田メディアセンター
特別出品 福澤諭吉1万円札 2号券および最終製造券 （慶應義塾史展示館・2024年7月1日～8月31日）	1万円札 2号券（A000002A）1984年、2004年	慶應義塾史展示館	三田メディアセンター
第364回企画展示「Now and Then 貨幣から見えてくる時代～新紙幣発行記念～」 （三田メディアセンター展示室・前期：2024年7月8日～8月6日、後期：2024年8月20日～9月21日）	『細菌学雑誌』no.62-73（1901）	三田メディアセンター	信濃町メディアセンター
創建1200年記念 特別展「神護寺―空海と真言密教のはじまり」 （東京国立博物館平成館特別展示室・2024年7月17日～9月8日）	神護寺靈寶目録（210@186@1）	東京国立博物館	三田メディアセンター
小浜藩医 杉田玄白の挑戦 ―『解体新書』出版250年― （福井県立若狭歴史博物館・2024年7月20日～8月18日）	Ontleedkundige tafelen（S15@47@1） 蘭学事始（上・下）（112@32@1～2） 戯作者考補遺（前編）（204@152@2@1）	福井県立若狭歴史博物館	三田メディアセンター
企画展「中津藩と蘭学の夜明け」 （津山洋学資料館・2024年9月28日～11月4日）	解臈文（F@カ@11 富士川文庫）	津山洋学資料館	信濃町メディアセンター
Land-scape お持ち帰りできる風景 （慶應義塾ミュージアム・ commons：KeMCo・2024年10月7日～12月6日）	ノッティンガムシャーの古事（141X@79@1）ほか 全41点	慶應義塾ミュージアム・ commons：KeMCo	三田メディアセンター
長野の仏教美術 江戸時代編 ～大勧進貫主本孝・等順と善光寺の中興～ （長野市立博物館・2024年10月12日～12月1日）	源頼朝善光寺参詣随兵日記（相良家文書 子1）	長野市立博物館	三田メディアセンター
古楽トークコンサート：スペイン中世音楽の楽しみ （日吉メディアセンター・2024年10月22日）	[Las cantigas de Santa María] ファクシミリ版 （準貴重書『歳暮マリアの古謡集』本体のみ）	日吉キャンパス HAPP企画	三田メディアセンター

展覧会名・会場・会期	資料名（請求記号）	貸出先・主催など	所蔵館
人吉球磨の玉手箱 (九州国立博物館・ 2024年10月22日～12月15日)	肥後国球磨郡田数領主等目録（相良家文書 子2） ほか相良家文書 全11点	九州国立博物館	三田メディアセンター
奇想の版画ー1500-1650 帝都プラハを交差するヨーロッパ版画 (郡山市立美術館・ 2024年11月9日～12月27日)	Menses XII anni solaris (120X@1347@1) ほか 全6点	郡山市立美術館	三田メディアセンター
「学問に凝る勿れ ー中津の社会、学問、学者たち」 (中津市歴史博物館・ 2024年12月21日～2025年2月9日)	福澤百助旧蔵「上諭條例」(福412) 慶應義塾全図(14X@B16@1) 唐蘭船持渡鳥獸之図「獸類之図」(132X@166@5-2)	中津市歴史博物館	三田メディアセンター
新春展2025「へびの憩う空き地」 (慶應義塾ミュージアム・コモンズ： KeMCo・2025年1月9日～2月7日)	七夕の本地(JL@2A@1467) ほか 全20点	慶應義塾ミュージアム・ コモンズ：KeMCo	三田メディアセンター
	医萃後集(F@イ@71 富士川文庫)		信濃町メディアセンター
	へび女(B@726.1@Um1@2) Le petit prince(KF0@951@Sa4@5)		日吉メディアセンター
第366回企画展示「議席を與へよ ー普選ポスターでみる近代」 (三田メディアセンター展示室・ 2025年1月14日～2月8日)	小泉純一郎です。(B@310@Ko4@1) 真・政治力(S@310.4@Is1@1) 日本人のための「集団的自衛権」入門(S@319.8@ Is2@1)	三田メディアセンター	日吉メディアセンター
特別展「武家の正統 片桐石州の茶」 (根津美術館・ 2025年2月22日～3月30日)	東武綱鑑(127@25@1) 宗関公御會道具附(208@83@1) 宗関公数寄屋御客御荘付之留(208@17@1) 三百ヶ條(208@221@1～3)	根津美術館	三田メディアセンター
羅漢の棲む処 (中津市歴史博物館・ 2025年3月15日～5月6日)	蕉堅藁(110X@248@1)	中津市歴史博物館	三田メディアセンター

出版物掲載

所蔵館	件数
三田メディアセンター	157
信濃町メディアセンター	9

放映

所蔵館	件数
三田メディアセンター	26

メディアセンターに関する書誌<2024年度>

2024.4~2025.3

雑誌論文・記事

- ・関口素子. “KEIO Report 記録を残し未来につなぐ—『慶應義塾図書館史Ⅱ』の刊行”. 三田評論. 2024.5, no. 1288, p. 102-103.
三田評論ONLINE. 2024. 5. 27.
<https://www.mita-hyoron.keio.ac.jp/other/202405-5.html>, (参照 2025-7-4).
- ・須田伸一. “演説館：変わる図書館, 変わらない図書館”. 塾. 2025. 1, no. 325 (WINTER 2025), p. 1-1.
<https://www.keio.ac.jp/ja/about/assets/juku/325/325-02.pdf>, (参照 2025-7-4).

Web

- ・“【新歓企画2024 Vol.6】新入生が使える学習のサポート”. 慶應塾生新聞. 2024. 4. 11.
<https://www.jukushin.com/archives/59959>, (参照 2025-7-4)
- ・“早慶和書電子化推進コンソーシアム, 学生・教職員向けの電子書籍プロジェクトを2024年4月以降も継続”. カレントアウェアネス-R. 2024. 4. 11.
<https://current.ndl.go.jp/car/218522>, (参照 2025-7-4)
- ・“早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンター, 「早慶間取寄せ貸出」・「学生証・教職員証による相互入館」サービスを開始”. カレントアウェアネス-R. 2024. 4. 16.
<https://current.ndl.go.jp/car/218687>, (参照 2025-7-4)
- ・“慶應義塾大学, 日吉キャンパス・矢上キャンパス・湘南藤沢キャンパスの各メディアセンター(図書館)が合同で高校生・受験生を対象とする夏のオープンライブラリーを実施すると発表”. カレントアウェアネス-R. 2024. 5. 31.
<https://current.ndl.go.jp/car/220809>, (参照 2025-7-4)
- ・“「パレスチナを知るブックフェア」日吉メディアで開催 7月末まで”. 慶應塾生新聞. 2024. 6. 21.
<https://www.jukushin.com/archives/60558>, (参照 2025-7-4)

- ・“早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンター, 相互資料取寄せ貸出しサービス「早慶ライブラリーブックシェア」の対象を拡大”. カレントアウェアネス-R. 2024. 11. 11.
<https://current.ndl.go.jp/car/229402>, (参照 2025-7-4)
- ・“日吉メディア「図書館フレンズ」読書の秋 皆で楽しむ”. 慶應塾生新聞. 2024. 12. 3.
<https://www.jukushin.com/archives/61576>, (参照 2025-7-4)
- ・“いまどきの慶應大生は何を読む 本好きによる「塾生選書」で, おすすめの本は?”. 朝日新聞 Thinkキャンパス. 2024. 12. 3.
<https://www.asahi.com/thinkcampus/article-111005/>, (参照 2025-7-4)
- ・“慶應義塾大学三田メディアセンター, 井筒俊彦文庫パノラマ画像を公開”. カレントアウェアネス-R. 2024. 12. 6.
<https://current.ndl.go.jp/car/231193>, (参照 2025-7-4)
- ・“文化審議会, 国宝・重要文化財(美術工芸品)の指定等について答申: 大学図書館所蔵の貴重書を含む”. カレントアウェアネス-R. 2025. 3. 24.
<https://current.ndl.go.jp/car/243943>, (参照 2025-7-4)

慶應義塾公式Webページ

- ・“早慶の図書館連携をさらに強化—「早慶ライブラリーブックシェア」・「早慶ライブラリーパスポート」の開始—”. プレスリリース. 2024. 11. 06.
<https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2024/11/6/28-163092/>, (参照 2025-7-4)

スタッフによる論文発表・研究発表＜2024年度＞

2024.4～2025.3

論文発表

信濃町

佐山のの. “医学図書館による医療活動支援 慶應義塾大学信濃町メディアセンターを例として”. 医学図書館. 2024. 06, vol. 71, no. 2, p. 95-98.
遠藤泉. “レファレンス事例 NO. 159 : 『1951年の結核治療について調査した事例』”. 医学図書館. 2024. 06, vol. 71, no. 2, p. 135-136.

研究発表

本 部

藤本優子. “Wiley 転換契約の導入から一年を振り返って―慶應義塾大学の事例―”. Wiley 転換契約アップデートウェビナー2024. 2024. 5. 23. 於オンライン
<https://apac.wiley.com/webinar/jp-webinar-wiley-ta-updating-webinar-japan-2024>
藤本優子ほか. “大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) 2024年度版元提案説明会オブション企画「今こそ知りたい！転換契約」”. 2024. 9. 5. 於 一橋大学一橋講堂 ※パネラーのひとりとして参加

三 田

山田摩耶. “慶應義塾大学三田メディアセンターの資料利活用促進の取り組み”. 令和6年度アジア情報関係機関懇談会：アジア資料へのアクセス向上に関する取組と課題. 2025. 3. 7. 於 国立国会図書館関西館

信濃町

遠藤泉ほか. “医中誌Web用RCTフィルター開発の試行”. 第39回医学情報サービス研究大会. 2024. 7. 13. 於 名古屋市立大学

湘南藤沢

飯田尚子. “ICTツールを活用したバーチャルレファレンス事例報告”. 2024年度日本看護図書館協会第54回研究会. 2024. 9. 13. 於 日本図書館協会

年次統計資料＜2024年度＞

1－1．図書費＜2024年度実績及び2025年度予算＞

＜単位：円＞

内訳 各メディアセンター	2024年度実績			2025年度予算		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
メディアセンター本部		613,942,609	613,942,609		651,809,000	651,809,000
メディアセンター本部		581,123,182	581,123,182		618,366,000	618,366,000
通信教育部		32,819,427	32,819,427		33,443,000	33,443,000
三田メディアセンター	214,140,446	326,271,413	540,411,859	237,284,000	316,971,000	554,255,000
図 書 館	76,837,061	209,202,294	286,039,355	87,000,000	202,100,000	289,100,000
学 部	137,303,385	117,069,119	254,372,504	150,284,000	114,871,000	265,155,000
日吉メディアセンター	64,642,036	102,009,353	166,651,389	76,571,000	93,287,000	169,858,000
図 書 館	23,520,760	20,708,667	44,229,427	24,700,000	20,500,000	45,200,000
研 究 室	30,845,489	57,682,894	88,528,383	40,520,000	48,968,000	89,488,000
協生館図書室	10,275,787	23,617,792	33,893,579	11,351,000	23,819,000	35,170,000
信濃町メディアセンター	16,709,370	113,013,056	129,722,426	15,000,000	114,800,000	129,800,000
理工学メディアセンター	11,344,341	118,091,487	129,435,828	13,600,000	116,400,000	130,000,000
湘南藤沢メディアセンター	35,435,461	127,241,698	162,677,159	42,140,000	121,040,000	163,180,000
図 書 館	29,632,496	116,361,315	145,993,811	35,340,000	111,040,000	146,380,000
看護医療学図書室	5,802,965	10,880,383	16,683,348	6,800,000	10,000,000	16,800,000
薬学メディアセンター	4,158,888	26,449,939	30,608,827	4,440,000	27,310,000	31,750,000
合 計	346,430,542	1,427,019,555	1,773,450,097	389,035,000	1,441,617,000	1,830,652,000

1-2. 媒体別図書費<2024年度実績>

<単位：円>

各メディアセンター		内訳	和（国内）	洋（国外）	合 計
メディアセンター本部	単行書		9,504	0	9,504
	雑誌		49,412	0	49,412
	データベース		3,181,200	0	3,181,200
	電子ジャーナル		0	581,064,266	581,064,266
	電子ブック		11,125,806	18,512,421	29,638,227
三田メディアセンター	単行書		36,543,735	90,315,462	126,859,197
	雑誌		22,047,672	76,311,492	98,359,164
	データベース		41,622,420	54,485,525	96,107,945
	電子ジャーナル		1,959,400	169,744,390	171,703,790
	電子ブック		0	44,290,763	44,290,763
日吉メディアセンター	単行書		26,205,533	16,770,184	42,975,717
	雑誌		12,993,714	14,503,418	27,497,132
	データベース		11,072,455	27,573,705	38,646,160
	電子ジャーナル		660,000	35,207,989	35,867,989
	電子ブック		396,000	17,757,442	18,153,442
信濃町メディアセンター	単行書		7,149,523	2,084,724	9,234,247
	雑誌		8,252,568	233,579	8,486,147
	データベース		1,788,600	19,079,559	20,868,159
	電子ジャーナル		4,933,804	86,021,072	90,954,876
	電子ブック		0	173,997	173,997
理工学メディアセンター	単行書		6,508,834	636,187	7,145,021
	雑誌		4,046,084	483,136	4,529,220
	データベース		110,000	3,176,892	3,286,892
	電子ジャーナル		1,834,025	104,738,501	106,572,526
	電子ブック		0	6,565,050	6,565,050
湘南藤沢メディアセンター	単行書		19,663,208	3,148,218	22,811,426
	雑誌		12,391,866	6,233,100	18,624,966
	データベース		9,079,907	34,477,647	43,557,554
	電子ジャーナル		5,626,896	63,476,338	69,103,234
	電子ブック		0	5,864,890	5,864,890
薬学メディアセンター	単行書		2,537,615	366,691	2,904,306
	雑誌		1,679,249	73,912	1,753,161
	データベース		990,000	9,366,490	10,356,490
	電子ジャーナル		341,000	15,093,095	15,434,095
	電子ブック		0	160,775	160,775
合 計	単行書		98,617,952	113,321,466	211,939,418
	雑誌		61,460,565	97,838,637	159,299,202
	データベース		67,844,582	148,159,818	216,004,400
	電子ジャーナル		15,355,125	1,055,345,651	1,070,700,776
	電子ブック		11,521,806	93,325,338	104,847,144

* リバースチャージ消費税を含む

2－1．蔵書統計＜所蔵冊数累計＞

内訳 各メディアセンター	単行書（冊数）			製本雑誌（冊数）			非図書資料 （点数）	合 計
	和	洋	計	和	洋	計		
三田メディアセンター	1,133,531	1,167,476	2,301,007	282,332	322,425	604,757	143,107	3,048,871
日吉メディアセンター	528,204	259,654	787,858	75,780	77,864	153,644	43,012	984,514
信濃町メディアセンター	93,663	51,478	145,141	103,580	186,498	290,078	4,792	440,011
理工学メディアセンター	117,364	40,993	158,357	56,500	149,911	206,411	4,199	368,967
湘南藤沢メディアセンター	281,082	75,218	356,300	51,721	17,866	69,587	17,069	442,956
薬学メディアセンター	35,618	4,537	40,155	5,604	5,908	11,512	1,004	52,671
合 計	2,189,462	1,599,356	3,788,818	575,517	760,472	1,335,989	213,183	5,337,990

2－2．蔵書統計＜逐次刊行物：タイトル数＞

内訳 各メディアセンター	カレント ^{注1}			ノンカレント ^{注2}			合 計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター	2,270	838	3,108	21,557	12,070	33,627	36,735
日吉メディアセンター	797	215	1,012	2,570	3,320	5,890	6,902
信濃町メディアセンター	680	22	702	2,971	4,606	7,577	8,279
理工学メディアセンター	269	29	298	2,739	6,653	9,392	9,690
湘南藤沢メディアセンター	604	77	681	1,216	711	1,927	2,608
薬学メディアセンター	78	3	81	172	140	312	393
合 計	4,698	1,184	5,882	31,225	27,500	58,725	64,607

注1）購読中の雑誌

注2）購読を中止または刊行が停止した雑誌

2－3．蔵書統計＜電子媒体資料＞

データベース種類数

内訳 各メディアセンター	国 内	国 外	小 計	全塾共通を加えた 種類数
全塾共通	70	246	316	
三田メディアセンター	1	7	8	324
日吉メディアセンター	6	2	8	324
信濃町メディアセンター	4	2	6	322
理工学メディアセンター	0	2	2	318
湘南藤沢メディアセンター	5	1	6	322
薬学メディアセンター	2	3	5	321
合 計	88	263	351	

電子ジャーナルタイトル数

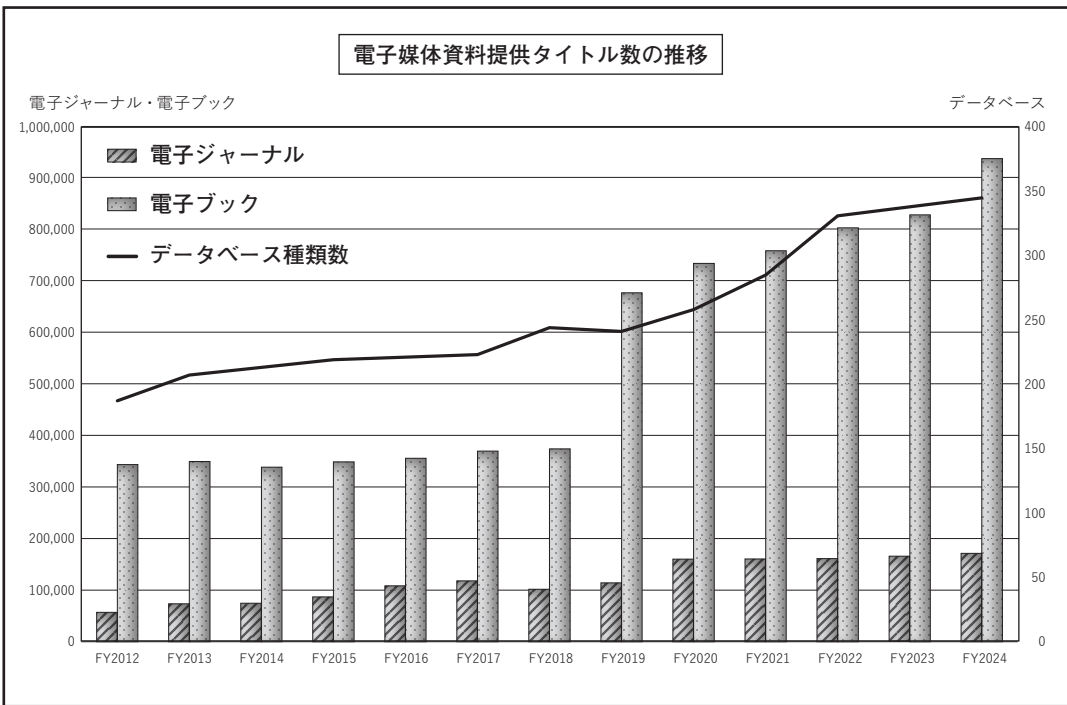
内訳 各メディアセンター	国 内	国 外	小 計	全塾共通を加えた タイトル数
全塾共通	29,338	211,373	240,711	
三田メディアセンター	12	819	831	241,542
日吉メディアセンター	7	116	123	240,834
信濃町メディアセンター	13	1,454	1,467	242,178
理工学メディアセンター	24	153	177	240,888
湘南藤沢メディアセンター	8	126	134	240,845
薬学メディアセンター	2	31	33	240,744
合 計	29,404	214,072	243,476	

全地区純タイトル数	171,501
-----------	---------

* 地区間および同一タイトルの重複を除いた数

電子ブックタイトル数

内訳 各メディアセンター	国 内	国 外	小 計	全塾共通を加えた タイトル数
全塾共通	19,280	914,786	934,066	
三田メディアセンター	0	1	1	934,067
日吉メディアセンター	0	2,547	2,547	936,613
信濃町メディアセンター	0	1,108	1,108	935,174
理工学メディアセンター	0	2,548	2,548	936,614
湘南藤沢メディアセンター	0	0	0	934,066
薬学メディアセンター	0	0	0	934,066
合 計	19,280	920,990	940,270	

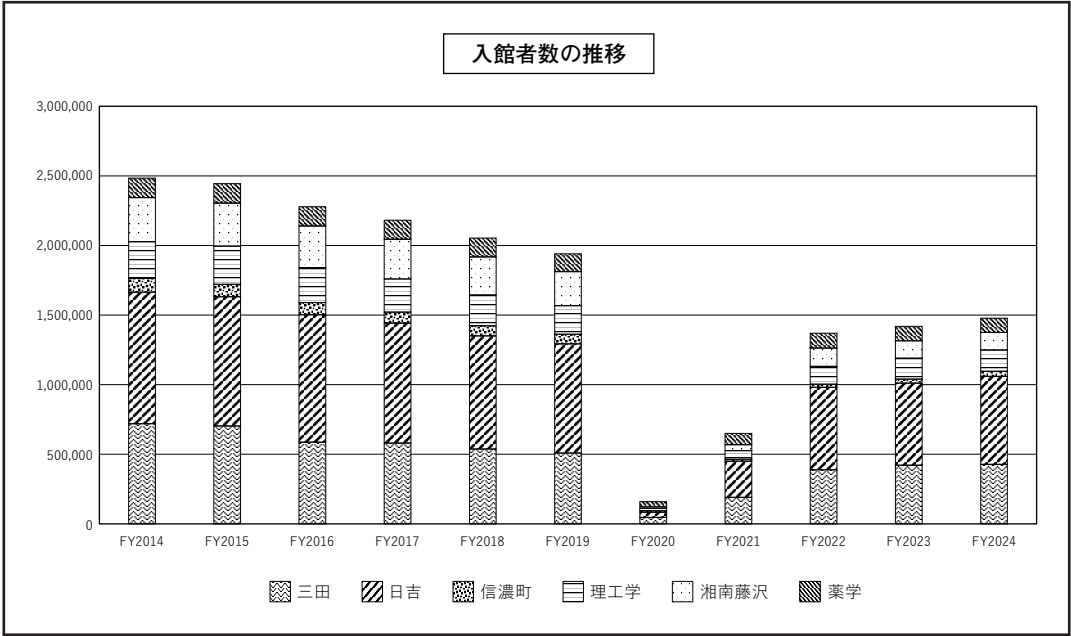


2－4．蔵書統計<非図書資料>

各メディアセンター	タイトル数	個 数
三田メディアセンター	17,007	143,107
日吉メディアセンター	12,727	43,012
信濃町メディアセンター	713	4,792
理工学メディアセンター	623	4,199
湘南藤沢メディアセンター	6,719	17,069
薬学メディアセンター	360	1,004
合 計	38,149	213,183

3－1．入館者数

各メディアセンター	人 数
三田メディアセンター	427,278
日吉メディアセンター	632,174
信濃町メディアセンター	36,689
理工学メディアセンター	153,280
湘南藤沢メディアセンター	125,496
薬学メディアセンター	102,628
合 計	1,477,545



3-2. 利用統計＜貸出及び貴重書閲覧冊数＞

内訳 各メディアセンター	館 外 貸 出					館内閲覧
	教職員	学 生	その他	塾 外	計	貴重書
三田メディアセンター	20,880	75,979	0	2,474	99,333	1,035
日吉メディアセンター	12,358	63,880	76	1,506	77,820	
信濃町メディアセンター	5,739	2,123	0	750	8,612	
理工学メディアセンター	2,086	20,778	3	63	22,930	
湘南藤沢メディアセンター	5,439	32,311	97	1,831	39,678	
薬学メディアセンター	868	2,604	0	46	3,518	
合 計	47,370	197,675	176	6,670	251,891	1,035

3-3. 利用統計＜学外との相互貸借（現物・複写）＞

内訳 各メディアセンター		依頼を受けた（貸）			依頼した（借）		
		国 内	国 外	計	国 内	国 外	計
三田メディアセンター	現物（冊）	637	72	709	1,238	44	1,282
	複写（件）	944	667	1,611	2,136	1,017	3,153
日吉メディアセンター	現物（冊）	115	0	115	236	6	242
	複写（件）	248	0	248	521	468	989
信濃町メディアセンター	現物（冊）	4	0	4	9	1	10
	複写（件）	2,984	0	2,984	289	660	949
理工学メディアセンター	現物（冊）	10	0	10	15	0	15
	複写（件）	178	0	178	48	139	187
湘南藤沢メディアセンター	現物（冊）	88	0	88	60	0	60
	複写（件）	196	0	196	545	231	776
薬学メディアセンター	現物（冊）	5	0	5	0	0	0
	複写（件）	59	0	59	20	64	84
合 計	現物（冊）	859	72	931	1,558	51	1,609
	複写（件）	4,609	667	5,276	3,559	2,579	6,138

参考データ：早稲田大学との相互貸借（上記の内数）

依頼を受けた（貸）

内訳 各メディアセンター	現物（冊）	複写（件）
三田メディアセンター	463	241
日吉メディアセンター	97	116
信濃町メディアセンター	4	89
理工学メディアセンター	10	20
湘南藤沢メディアセンター	63	43
薬学メディアセンター	5	5
合 計	642	514

依頼した（借）

内訳 各メディアセンター	現物（冊）	複写（件）
三田メディアセンター	673	658
日吉メディアセンター	49	137
信濃町メディアセンター	1	7
理工学メディアセンター	0	22
湘南藤沢メディアセンター	12	95
薬学メディアセンター	0	0
合 計	735	919

3-4. 利用統計<レファレンス・サービス>

利用者別件数

内訳 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教職員	学 生		
三田メディアセンター	432	1,560	348	2,340
日吉メディアセンター	399	2,619	229	3,247
信濃町メディアセンター	354	171	457	982
理工学メディアセンター	143	339	55	537
湘南藤沢メディアセンター	68	621	83	772
薬学メディアセンター	48	184	1	233
合 計	1,444	5,494	1,173	8,111

業務内容別件数

内訳 各メディアセンター	文献所在調査	事項調査	利用指導	そ の 他	合 計
三田メディアセンター	839	91	1,385	25	2,340
日吉メディアセンター	533	360	2,178	176	3,247
信濃町メディアセンター	88	414	432	48	982
理工学メディアセンター	92	48	365	32	537
湘南藤沢メディアセンター	106	91	519	56	772
薬学メディアセンター	10	5	203	15	233
合 計	1,668	1,009	5,082	352	8,111

3-5. 説明会・授業等<レファレンス・サービス>

内訳 各メディアセンター	回 数	参加者数
三田メディアセンター	139	2,144
日吉メディアセンター	45	4,766
信濃町メディアセンター	53	703
理工学メディアセンター	53	776
湘南藤沢メディアセンター	63	2,098
薬学メディアセンター	7	977
合 計	360	11,464

内容別回数

内訳 各メディアセンター	情 報 リ テ ラ シ ー 関 連										その他の 説明会・授業等		合 計	
	ガイダンス		外部講師による 講習会		図書館職員による 講習会		学生スタッフによる 講習会		授業（図書館職員の 講師派遣）		回数	人数	回数	人数
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数				
三田メディアセンター	2	157	0	0	102	1,678	0	0	10	112	25	197	139	2,144
日吉メディアセンター	4	302	0	0	41	4,464	0	0	0	0	0	0	45	4,766
信濃町メディアセンター	3	360	1	7	34	103	0	0	5	223	10	10	53	703
理工学メディアセンター	8	231	9	359	35	179	0	0	1	7	0	0	53	776
湘南藤沢メディアセンター	12	1,114	5	102	29	459	3	22	14	401	0	0	63	2,098
薬学メディアセンター	7	977	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	977
合 計	36	3,141	15	468	241	6,883	3	22	30	743	35	207	360	11,464

* 授業の人数はのべ参加者数または履修者数

4-1. 開館総日数

各メディアセンター	日 数
三田メディアセンター	282
日吉メディアセンター	286
信濃町メディアセンター	334
理工学メディアセンター	293
湘南藤沢メディアセンター	285
薬学メディアセンター	285

4-2. 閲覧座席数

各メディアセンター	席 数
三田メディアセンター	1,205
日吉メディアセンター	1,432
信濃町メディアセンター	192
理工学メディアセンター	469
湘南藤沢メディアセンター	956
薬学メディアセンター	146
合 計	4,400

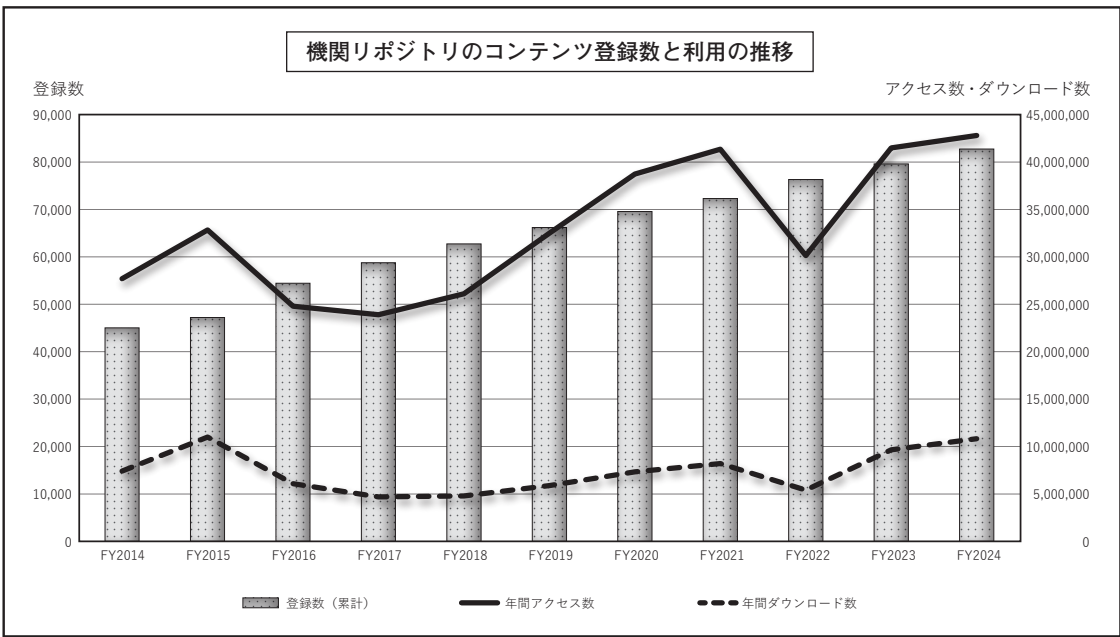
5-1. 情報発信＜機関リポジトリ＞

コンテンツ登録数（累計）	82,775
--------------	--------

* 科学研究費研究成果報告書を含む

年間利用状況

アクセス数	42,811,427
ダウンロード数	10,833,791



編集後記

『MediaNet』32号では、Web版に対応するため資料編を中心に若干の構成変更を行った。冊子版は写真や図表が見やすいように本文の用紙の色調をクリーム色から白色に変更してカラーのページを増やした。毎年、新しい試みを繰り返しながら、読みやすい形になればと考えている。

特集は、早稲田大学図書館との間で2024年度から開始した2つの新サービスを取り上げた。その内容や構築までの経過を紹介する記事2本とともに、実際の立ち上げの様子や今後の可能性を、早慶の担当者による座談会の形で収録した。早慶図書館間の協働が着実に進化していることを感じていただけたと思う。

報告記事では、2025年が日吉図書館開館40年にあたることから、記念企画の紹介と学生・教職員による座談会を掲載した。各メディアセンターの中で年間入館者数が最も多い日吉図書館の特色や今後の姿が語られている。

貴重書紹介は、『論語』の注釈書が重要文化財に指定されるまでの経緯をご寄稿いただいた。このような書物が大陸から伝来し、悠久の時を経て残存していることにあらためて驚く。本学の研究者が、この書物をどのように評価したのか、興味深い記事である。

本号は、このほかにも読み応えのある記事があつまったと思う。各記事をお楽しみいただければ幸いである。

最後にこの場を借りて、ご多忙のなか今回の特集企画に快くご賛同、ご参加いただいた早稲田大学図書館の皆さまに、MediaNet編集会議を代表して心から御礼を申し上げたい。ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします！

(佐藤康之)

誌名変遷

八角塔	：1号（昭42（1967）. 7）－ 6号（昭45（1970）. 3）
KULIC	（ISSN 0913-0705）：1号（昭45（1970）. 10）－ 26号（1992. 11）
MediaNet	（ISSN 0919-8474）：No. 1（1993. 11）－

MediaNet 第32号 2025年10月31日発行

編集	MediaNet 編集会議
発行者	関秀行
発行	慶應義塾大学メディアセンター 〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45 電話 03-5427-1644
表紙デザイン	有限会社 梅沢印刷所（小林克年）
表紙撮影	川崎直子
印刷	有限会社 梅沢印刷所

MediaNet 編集会議

編集長	佐藤康之（本部）
編集員	川崎直子（三田）、瀬戸島弘美（日吉）、遠藤泉（信濃町）、西條智架、岡田思惟（理工学）、 稲垣侑華（湘南藤沢）、鬼頭友紀（本部）
	E-mail：mc-medianet@adst.keio.ac.jp
	URL https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/



慶應義塾大学メディアセンター

<https://www.lib.keio.ac.jp/>

Web版MediaNet

<https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/>



三田メディアセンター

Mita Media Center

<https://www.lib.keio.ac.jp/mita/>



日吉メディアセンター

Hiyoshi Media Center

<https://www.lib.keio.ac.jp/hiyoshi/>



信濃町メディアセンター

Shinanomachi Media Center

<https://www.lib.keio.ac.jp/med/>



理工学メディアセンター

Media Center for Science and Technology

<https://www.lib.keio.ac.jp/scitech/>



湘南藤沢メディアセンター

Shonan Fujisawa Media Center

<https://www.lib.keio.ac.jp/sfc/>



薬学メディアセンター

Media Center for Pharmaceutical Sciences

<https://www.lib.keio.ac.jp/pha/>